

なぜ私たちは病気になるのか

医学博士 ホルスト・ミュラー著

© 2024 ホルスト・ミュラー

ウェブサイト：

www.youtube.com/@LawofLife

www.youtube.com/@TheBibleSchool

イラスト： アンドレアス・ブーホルツ

編集者： エレナ・バルツァー

表紙： ザスキア・ラリッシュ

出版： シュテファン・ラリッシュ

はじめに

親愛なる読者の皆様。あなたは今、20年にわたる人間の研究に基づいた本を手にとっています。本書は、医師である私が持つ、病気の発生の根本原因を究明したいという必要性から生まれました。私の洞察は、何千件もの診察を通じて患者との直接の接触から得られたもので、他者の記録に頼ったものではありません。私は病気の一般的な原因を見つただけでなく、人間の内面から発する権力への欲求、攻撃性、恐怖、衝動強迫、そして自己破壊や他者の破壊の理由も見出しました。

人間の思考と行動を無意識に決定している原因を認識すると、それは解決策への道も示してくれます。つまり、病気、抑圧、葛藤を止めるには、何を変える必要があるかということです。人間は潜在意識の中で常に共通の根本的な葛藤を抱えており、そこから他のはっきりとした問題すべてが生じていることに、私は気づきました。これは、病気の永続的な癒しの達成も含め、私たちの問題すべてから自由になるために必要な解決策は一つだけだということを意味します。その解決策がどう作用するかは、人間の性質のしくみを理解することで導き出せます。

本書を楽しんでいただければ幸いです。そして、皆様が痛みと苦しみの原因から解放する力と勇気を得られるようにお祈りします。

ホルスト・ミュラー博士

なぜ私たちは病気になるのか

目次

1. 人間を理解するために私がたどった道	1
2. 真理は自然の法則にある	5
3. 人間の基本的な二ーズ	10
4. 思考はどこから来るのか	16
5. 人間の霊：単なる物質ではない存在	21
6. 魂：体と心の総体	29
7. 病気はどう発生するのか	33
8. 私たちにつきまとう嘘	37
9. 自己認識：真理に向かう最初で最難関のステップ	42
10. 潜在意識：利得と損失の天秤	47
11. 創造主か被造物か：人間の真の自己同一性	53
12. 損失を被るのは誰か？	62
13. 自然の観察：病気における細菌の役割	67
14. 愛の源に対する人間の依存	70
15. 遺伝と育児：子供たちの依存	78
16. 新しい命：人間の問題に対する唯一の解決策	84
17. 新しい自己同一性を持つ新しい命の創造	88
18. 生まれつきの二ーズから解放される人間	93
19. 新しい命がもたらすもの	98

1. 人間を理解するために私がたどった道

病気はどこから来るのか？ これは苦痛に悩まされている患者なら誰もが自問する問いです。私は、ドイツのフライブルクで医学を勉強したり、専門医として研修を受けたりしていた時期に、専門文献や経験豊かな医師から幅広い専門知識を習得しました。そのため、この問いの答えを知っていると思っていました。しかしその後、満足のいく解決策を見つけられない問題を持つ患者に出会ったのです。

症例1：その患者は、ある症状に長期間悩まされていた年配の紳士でした。耳が繰り返して「詰まる」という症状です。この負担の解消を求めて、彼は私のもとを訪れました。診断は簡単でした。それは中耳の換気機能障害、つまり喉と中耳の間にある耳管の問題でした。従来の医学によれば、その原因は患者の循環系における水分不足です。そこで私は、より多くの水分を摂取するよう助言し、これで彼を助けられたと信じていました。

しかし、患者は数週間後に戻ってきました。「先生、今では毎日3リットルの水を飲んでいますが、それでも耳は詰まったままです」と言うのです。医師として、私はもっと水分を摂るよう助言することもできましたし、患者の年齢に言及して、彼の病気を老化の一般的な症状として説明することもできたでしょう。しかし、それで本当の病気の原因を見つけたと言えるのでしょうか？

専門知識をもって症状を特定し診断を下すことはできましたが、なぜ患者が病気になるのかという問いの答えは知りませんでした。私は医師として、患者の病気の原因を確信を持って説明できるようになり、症状を永続的に解決できるようになりたいと願っていました。疑問を抱えたままで患者を放っておきたくなかった、そして自分自身が理解できる答えを提供したかったのです。

私の名前はホルスト・ミュラー。医学博士です。ドイツのヴァインハイムで耳鼻咽喉科専門医として、20年間診療に携わってきました。病気の原因を徹底的に理解することは私にとって重

要です。なぜなら単に症状を治療するだけでは十分ではないからです。簡単な例を挙げましょう。家の中のカビの原因は説明可能です。カビは湿気によって引き起こされるからです。専門家が状況を改善する手段としてカビ除去剤をすすめるだけだとしたら、それは納得のできる答えではありません。カビ除去剤は湿気を除去しないからです。除湿機も、湿気の原因が特定され取り除かれていない限り、解決策にはなりません。湿気の原因が特定され、除去されて初めて、カビの増殖は本当に抑制されるのです。

多くの職業において、専門家とは自分の分野に精通している人たちです。自動車整備士は車のありとあらゆる部品を知り尽くしています。建築家は使用する建材の特性に詳しいでしょう。しかし医師は、患者を本当に理解していないことがよくあり、そのため病気の原因に踏み込めないのです。残念ながら、ほとんどの場合、医学は患者の病気の原因を説明できません。単にそれが未知なるものだからです。医学には人間の全体を見ずに、各部分に注目する傾向があり、この点が知識の欠如の原因として挙げられます。

診療所では、私は人間全体と向き合っているのだと気づきました。「鼻」や「耳」が突然、疑問を持つ人間になったのです。私は研修中に症状認識について十分な訓練を受けており、5時間で70人の患者を診察できました。最初の患者が他の69件の症例を診察した後に戻ってきたとしても、私はその患者がどういう人だか覚えていないでしょう。しかし、彼の鼻については、すでに今日一度見たことがあると気づいたでしょう。未解決の疑問が残るこの状況に、私は落胆しました。たとえば言えば、壁が湿っている理由を知らずにカビ除去剤を販売しなくなっていたからです。

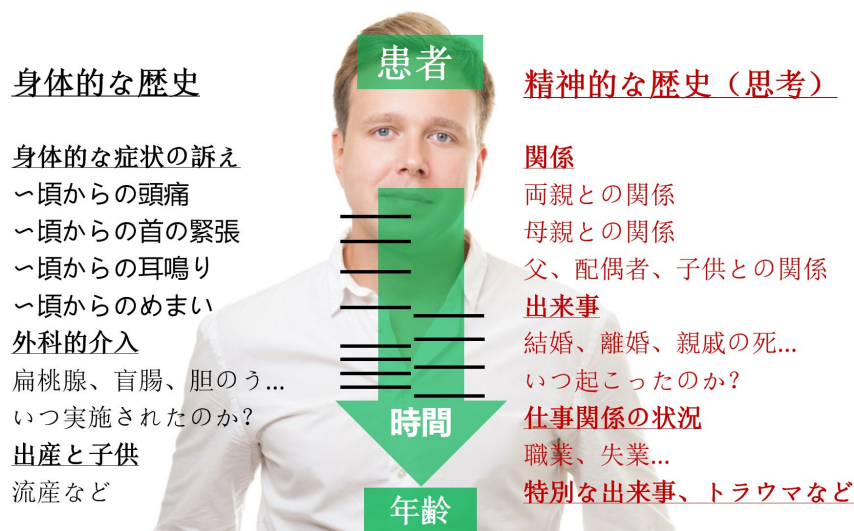
病気の原因を見つけるために、私は書籍やインターネットを調べるのではなく、患者自身に尋ねました。5時間で70人の患者と会話するのは少々短いので、もっと時間をかけて患者から話を聞く必要がありました。

最初のステップは、患者の病歴のタイムラインを作成することでした。大小の症状や病気、手術や出産など、すべてを記録しました。

病歴聴取は医学では一般的な手順です。本当に患者を知りたいなら、時間が必要です。私は今でもこれらの初期面接を行っており、一部の患者は耳鼻咽喉科でこれほど多くの質問に答えな

ければならないことに驚きます。私は、単に彼らが示す一つの症状だけでなく、患者の全体像が必要であるのだと説明します。抱えている病気すべてを含め、その人の全体を知る必要があるのです。

私は、病気や医療介入と対比させて、患者の人生の物語を並行して配置します。最も重要な側面となるのは、その人にとって最も親密な人間関係とこれまでに経験した出来事です。これらは精神的なレベルでその人にとって最も重要なことなのです。これには、両親との関係、両親同士の関係、配偶者、子供などとの関係が含まれます。また、結婚、離婚、近親者の死、職業状況、職業変更や引っ越しなどの大きな変化といった出来事も加えています。暴力や虐待の経験など重大なトラウマのような重要な人生の出来事も重要です。タイムライン上に配置されたすべてのポイントを、身体的な症状と比較します。



このようなデータを比較した後、私は患者の「精神的な歴史」が何よりも患者の症状と一致するという事に気づきました。耳が詰まる患者の場合も同様でした。身体的な影響が症状や機能障害を引き起こしているのではなかったのです。ある人の経験とその人の身体的な症状の間には直接的な関連があるに違いないと、私は気づきました。

では、耳が詰まる原因は水分不足ではなく、思考だったのでしょうか？ それを突き止めるためには、従来の医学ではしばしば周縁的にしか検討されていないものを調べる必要がありました。人間の思考、あるいは思考と思考が人間に対して果たす役割です。

私は自問自答しました。思考とは何か？ それはどこから来るのか？ そしてさらに重要なことに、それはどこで始まるのか？ いずれにせよ、思考はどこかからやって来るものであり、始まりがあるはずです。

多くの患者の病歴と人生の物語を検討した後——現在では何万もの事例があります——私は人間の病気の原因が何かを理解したのです。

2. 真理は自然の法則にある

私は病気の起源についての探求を、「絶対に信頼できる上に否定できない何か」に基づいて行いたいと思いました。そのためには明確な基準が必要でした。一般的に、人間が認識できる情報には二種類あります。

1. 一つは、自己説明的な情報。これは自らを証明するため、解釈を必要としません。このような情報には、物体、構造、機能、手段が含まれます。例えば、水が凍るという事実は曖昧ではなく自己説明的です。自然の法則は自らを証明します。この主の客観的情報はすべて、真実であるがゆえに学ばれます。特別なテストは必要ありません。
2. もう一つは、解釈が必要な情報。これは画像、言葉、身振り、行動に関するものです。例えば、本や研究を読んだり観察を行ったりするとき、その情報に対する様々な解釈が可能です。したがって、ある主張が真実かどうか、また個人の真理への欲求を満たすかどうかを判断するためには、解釈が必要です。情報は、真実と見なされる場合にのみ、人々に信じられ受け入れられます。不正確と考えられる情報は受け入れられません。それは記録されるかもしれませんが、行動には移されません。

真理はすべての人間存在の基盤です。人間は——これは意志の問題ではありません——真実だと思わない情報を受け入れることができないものです。ある人が嘘を受け入れるのは、それを真実と見なす場合だけです。したがって、確信を持つには、絶対的であり、変化せず、変更もできない情報評価の基準が必要です。もちろん、変化する、調整可能な基準を使用することもできますが、その場合の結論は不確かとなり、大きな困難を招く可能性があります。情報を記録するプロセスについては後ほど詳しく説明します。

まず、二つの異なる基準について考えましょう。

客観的基準。これは、いかなる時も変化しないものです。

1. いかなる状況によっても一時停止されることのない、原因と結果に関する自然の基本法則。
2. 元素の構成、構造、基本的な構築単位における成分の配列。

3. 元素の機能は最初から定義されており、設計に関連しています。
4. すべての元素と生命体の基本的なニーズは変更できず、最初から固定されています。

主観的基準。これは、常に一定ではなく、変化するものです。

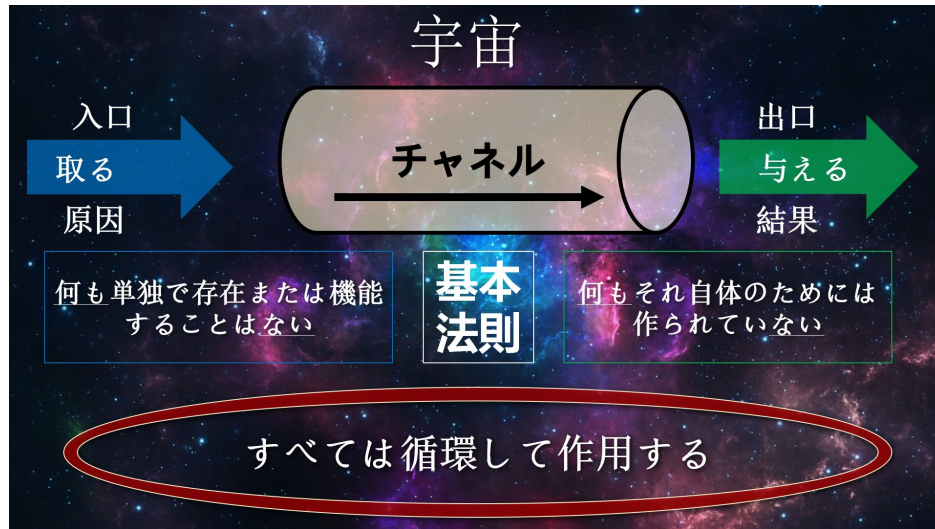
1. 言語と文法は文化によって異なります。
2. 専門家、科学者、ある人やもう一人の意見。
3. すでに真実だと信じられている既存の知識。

人間の病気の原因を確実に見つけるために使えるのは、客観的基準だけです。生命と健康は客観的なものであるため、可変の基準を使うべきではありません。家を建てるときに固定された不変の基準（メートルやキログラムなど）を使うのなら、自分自身の命というはるかに重要なものの場合においてはなおさらです。

さて、私は何を研究の基礎として取り上げたのでしょうか？ 原因と結果の基本法則や、人間についての知識——構造、機能、そして基本的なニーズです。私が本書で導く結論は、これらの不変の事実に基づいています。

宇宙の「基本法則」

宇宙は想像できないほど広大です。それでも、私たちは五感による経験を通じて、一般的な原則を理解できます。私はある関連性を発見しました。これを「宇宙の基本法則」と呼んでいます。ミクロコスモス（小宇宙）とマクロコスモス（大宇宙）のすべての要素は、この法則の下でのみ機能します。この基本法則は、単純で理解しやすい二つの原則から成り立っています。それは、「何も単独で存在または機能することはない」、また「何もそれ自体のため（それ自体の利益のため）には作られていない」という原則です。



この図の左側は、他のものや人に対する依存性を説明しています。これは、決して避けられず、常に存在する依存性です。簡単な例を挙げると、タブレットは電気なしでは機能しません。消費される電流は、機能の原因です。右側の「自らのためには何もできない」とは、結果を示しており、チャンネル自体に関するものではありません。例のタブレットは特定のサービスを実行しますが、それはタブレットそのもののためではなく、タブレット自体のために何かをすることはできません。

これら二つの原則から、最小レベルも含め、ありとあらゆる要素は入力と出力を持つチャンネルとして機能することがわかります。それは入力でエネルギーなどの物質を「取り」、それを使用し、何らかの修正された形で出力で「与え」ます。チャンネルは詰まってはなりません。詰まってしまうと、その機能は阻害されるか終了してしまうからです。

人間全体も、チャンネルとして適切に説明することができます。人も多くの個々の要素から成り立っており、これらの要素もまた小さなチャンネルとして機能します。病気は結果であり、私は医師としてその原因がどこにあるのかを発見する必要があります。基本法則によれば、原因なしに結果が生じることはありません。これは単純ですが重要な原則であり、無視できないことです。

基本法則のもう一つの重要な側面は、原因と結果が決して同じものにはなり得ないという点です。原因と結果は一致しません。エネルギーを取る要素と同じ要素が、エネルギーを引き渡すことはできません。原因と結果の分離は、チャンネルの出力と入力が常に反対の点または端にあ

るという事実によって示されます。したがって、原因が結果になることはありません。病気を引き起こすものと、病気自体が同一だということはありません。もし原因が結果と一致する可能性があれば、病気の原因となるものが病気自体にもなりえるということになります。しかし、これは不可能です。

チャンネルが順番に設置されており、共有されるシステムでは、あるチャンネルが前のチャンネルの正しい機能に依存しているという事実を見落とすと、原因が結果になりえるという誤った結論にたどり着くことがあります。一つのチャンネルが詰まると、システム全体に影響します。例えば、胃というチャンネルが食物を部分的にしか吸収できない場合、これはその後のすべての体内チャンネルに影響します。入口にある胃が少量しか吸収できない場合、当然、出口でも少量しか渡せません。ここでは、胃からの供給が減少していることが、体内の他の欠乏の原因だと言えるかもしれません。しかし、なぜ胃が正常に機能していないのかという疑問は残ります。体全体に影響するプロセスの始まりはどこにあるのでしょうか？

チャンネルにおいて原因と結果が常に異なることを示すもう一つの例は、ドミノの連鎖です。一列に並べられたドミノは、最初のドミノが押されると、順番に倒れます。最初のドミノはエネルギーを受け取り（原因）、倒れることでエネルギーを渡します（結果）。倒れたドミノが別のドミノの近くにある場合、後者はエネルギーを引き継ぎ、それを渡します。各チャンネルは同じことをし、前のものから取り、次のものに与えます。無限にドミノが並んでいれば、これは永遠に続く可能性があります。エネルギーは失われず、単に変換されるだけです。単一のチャンネルとして見ると、各ドミノは同じことをしています。つまりエネルギーを取って、与えています。しかし、エネルギーを取る場所では何も返さず、他の場所（次のドミノ）に与えており、この状態を変えることはできません。原因は連鎖における最初のドミノがエネルギーを吸収する場所にあります。私にとっても、人間のどこでエネルギーが吸収され、最初のチャンネルが活性化されるかを認識するのは非常に重要でした。

ありとあらゆるものが、チャンネルという基本形式で構築されているため、システム内のすべてがある種の循環の中でのみ機能できるというのは論理的なことです。太陽系を見れば、その循環内のすべての要素が相互依存していることがすぐに明らかになります。太陽、月、地球、惑星は相互依存しています。地球上では、すべての生物と要素の相互依存性は生態系という形で

観察できます。循環の原則は至るところに存在し、例えば高高度の風という形の空気や海洋の流れにも見られます。

循環について注目すべき点は、循環は、それが始まる場所で終わらなければならないということです。水循環は特に記憶に残る例でしょう。その循環は海で始まり海で終わります。この循環を通じた長い旅の中で、水は人間、植物、動物の多様な生命の基盤となります。私たちの体内にも多くの循環があります。例えば、心臓で始まり、心臓に戻る血液循環などです。

各チャネルは機能的に、吸収したものをすべてを引き渡すように設計されています。胃が食物の一部を自らのために保持したらどうなるでしょうか？ 少なくとも一定時間後には、私たちは死んでしまうでしょう。呼吸プロセス中、肺はどれだけの酸素を自らのために保持しているでしょうか？ まったく保持しません。なぜなら健康な肺では、すべての酸素が血液に引き渡されるからです。法則と設計は例外を許しません。そして、これは一般的に、つまり個々の細胞にも適用されます。自然は、十分に注意深く見れば認識できる、単純で美しく、容易に理解できる原則に従って機能しているのです。

3. 人間の基本的なニーズ

自然界では、何かを機能させるためには少なくとも二つの要素が必要だということを観察できます。種子が発芽するには、まず発芽プロセスを開始するエネルギーの衝動を受け取る必要があります。適切な温度、十分な湿気、十分な酸素が存在し、光条件がその特定の要件（光発芽や暗発芽）を満たしていれば、種子はこの衝動を受けることができます。これらの条件が満たされると、酵素が形成され、蓄えられた栄養素を活性化し、エネルギー代謝と成長プロセスを開始します。

人間の細胞という小さな化学工場でも同様の現象が見られます。細胞はチャンネルとして機能します——自然界のすべてのものと同様です。それは製品を生産するために存在するのです。もちろん、単独では何も生産できません。人間の細胞は適切な環境、つまり約1バールの圧力と37°C付近の温度を必要とします。圧力が高すぎると細胞は損傷を受けます。同様に、温度もわずかにしか変動してはなりません。細胞は製品を製造するために、原材料、つまり化学物質と細胞内の必要な情報を必要とします。しかし、原材料を摂取するプロセス、つまり呼吸、飲食などは製品を生産するのに十分でしょうか？ いいえ、原材料を変換するには、電気の形のエネルギーも必要です。

人間の体全体も機能するために電気を必要とします。脳波はこの点で非常に重要です。同時に、化学エネルギーという形で、その機能を維持するためのエネルギーも必要とします。

では、人間の電気はどこから来るのでしょうか？ 従来の医学では、この点において、一種の永久運動機のようなものとして説明されています。従来の医学によれば、大脳皮質は実質的に必要な電気を自ら生成するといいます。しかし、そのような永久運動機は本当に存在するのでしょうか？ 人間の脳はそのようなものなののでしょうか？ もしそうなら、脳はそれ自体の思考も生成できるのでしょうか？

患者の身体の病歴と生活歴を比較したとき、思考が人々の生活において決定的に重要であることが明らかになりました。また、人々の思考が常に何を中心に回っているか、そしてどのような種類の情報を処理しているのかも理解しました。いくつかの例を挙げてこれを明確にしましょう。

症例2：ある70歳ぐらいの患者は、20分ごとに血糖値を測定するセンサー付きインスリンポンプを持っていました。一日の出来事に基づいて糖分レベルに変化があるかどうか尋ねたところ、「孫たちが訪ねてくるという知らせを聞くたびに、とても嬉しくなり、糖分レベルはすぐに下がり始め、正常範囲になります」と彼女は答えました。

この患者の孫たちはどのようなニーズを満たしているのでしょうか？ 食物に対するニーズでしょうか？ いいえ、これは確実に愛に関する精神的なニーズであり、身体的なニーズではありません。この患者にとって明らかにポジティブな情報が、どのように糖分レベルの低下につながったのかを理解することが重要です。

症例3：別の若い糖尿病患者も、センサー付きインスリンポンプを装着していましたが、今度はネガティブな側面で同様の経験をしました。裁判所でストレスの多い状況を経験した際、彼女の糖分レベルは上昇し、装置がそれを報告しました。数単位のインスリン投与後も、糖分は上昇し続けました。繰り返しのインスリン投与でも望ましい血糖低下は見られませんでした。法廷での審問が終わってようやく、この患者の糖分レベルは下がりました。そして、繰り返し行われたインスリン投与のため、正常範囲をはるかに下回りました。

もし人間が単なる物質であり、思考が体の正常な機能にとって重要でないなら、このようなことは起こらないはずです¹。しかし、体は人が何を考えているかを明確に示します。

症例4：開業当初の頃、50代前半の男性が私のもとを訪れました。彼は怒り心頭で、薬の袋を見せました。「先生、4か月間めまいに悩まされていて、こんな薬をもらいましたが、何の役にも立ちません。このめまいの原因は何なのですか？」彼のめまいは非常に興味深いものでした。この男性は一日中チェーンソーを使って肉体労働をし

¹ 「物質は考えられるのかどうか」という問いについては後ほど検討します。

ていましたが、何の問題もありませんでした。しかし帰宅して座ると、めまいが起こるのです。

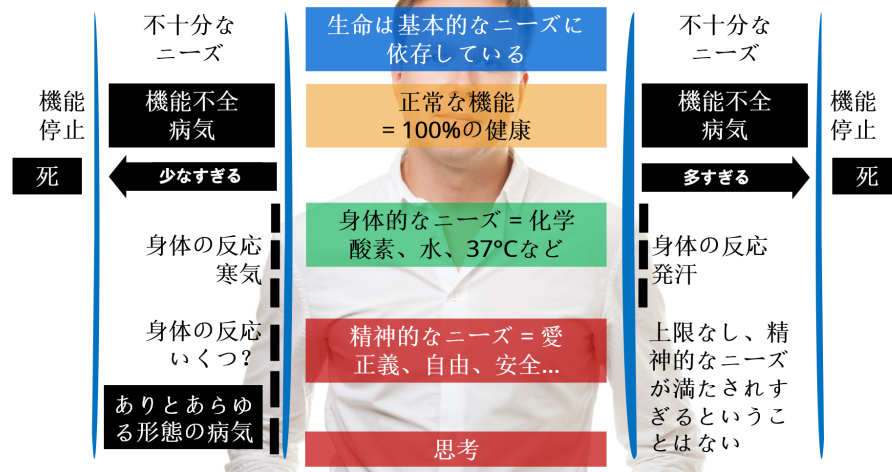
症状が始まる4週間前、隣人が彼に義母の秘密の計画を明かしました。それは彼女の家に関するもので、この患者は妻がいつか相続するはずだったため、その家を豪華に改装していました。しかし、義父が先に亡くなった場合、義母の初婚の夫との息子が家を得ることになっていました。この不当な話は患者を大いに動揺させました。この葛藤は解決されず、毎日帰宅するたびに身体的な反応として現れていました。この男性は身体的な機能不全がないにもかかわらず病気になりました。医師のアドバイスに従って、彼は化学物質、つまり薬で症状を改善しようとしたのですが、原因が別にあるため、薬は持続的な治癒をもたらすことができませんでした。

では、人間の基本的なニーズについてもっと詳しく見てみましょう。人間が適切に機能する、つまり健康であるために何が必要なのでしょうか？

生命が基本的なニーズの充足に依存していることは容易に理解できます。「生命の法則」は私たちが人間として必要とするものを制御しています。関連するニーズすべてが最適な範囲内で満たされていれば、私たちの状態は「少なすぎる」境界線と「多すぎる」境界線の間を移動します。そうすればすべてが正常に機能し、私たちは完全に健康な状態となります。この状態では、病気は発生しないでしょう。

病気や機能不全が発生するときは常に、ニーズが満たされていないか過度に満たされた状態にあります——つまり、最適な範囲の外にいます。症状が現れるとき、患者に何が「欠けている」のか、または何が「多すぎる」のかという疑問が生じます。身体レベルでは、温度や液体のように、何かが多すぎる場合や少なすぎる場合があることは明らかです。

生命の法則



自然界では、最適な範囲に加えて、人間が「ただ単に」病気であるという許容範囲が常にあります。この追加の許容範囲がどちらの方向で超過した場合にのみ、機能不全は不可逆的な機能障害、つまり人の死につながります。基本的なニーズが満たされないか過度に満たされる場合、極端な状況では同じ結果が生じます。つまり、その人は死んでしまうのです。

したがって、体に何が欠けているか、または何が多すぎるかを適時に知ることは極めて重要です。身体的なニーズに関しては、体が身体的なニーズについて私たちに向けて「話し」たら何をすべきなのか、私たちは皆学んできました。酸素、水、食物、そして暖かさが必要だということがわかります。最適な範囲の端に達するとすぐに、体は反応します。熱を観察するのが最も簡単な方法です。十分に暖かくないと寒さを感じ、暖かすぎると汗をかきます。また、「ああ、体にはこれやあれが必要なのだ」と、空腹、喉の渇き、疲れも認識します。体自体は嘘をつきません。その信号は正確なのです。体は実際の状態を明瞭に示します。本を調べなくても、食べる、飲む、または眠るべきだということが、私たちにはよくわかります。

さて、耳鳴りや耳の詰まりなどの病気があります。めまいや癌、その他多くの病気を持つ患者もいます。これらの人々に何が欠けているのでしょうか？ 食べ物や飲み物でしょうか？ このような病気の場合、私たちは生命の法則でいう最適な範囲の外にいるのでしょうか？ もしそうなら、一体何がニーズなのでしょう？

初めは、満たされていない精神的なニーズが身体的な不調につながるかどうか、そしてどのように不調になるのかは、私にとってまったく新しい概念でした。思考が人間の生活の「本質」

であることに気づき、確信するのにしばらく時間がかかったのはそのためです。人が身体を適切に機能させるには、正義、自由、安全などがが必要です。医学部ではこの点について何も学んでいなかったため、最初は理解が容易ではありませんでした。

あなたが考えていることは、言ってみれば、単なる空想です。ではなぜ思考はそれほど重要で、私たちが病気にさせることができるのでしょうか？ 私は19歳のとき、当時まだ共産主義体制下にあったルーマニアからドイツに逃亡しました。なぜ逮捕されるリスクを冒したのでしょうか？ 食べ物や飲み物のために逃げたのでしょうか？ 西側ほど多様ではなく、時には心配もありましたが、ルーマニアには十分な食料がありました。しかし、決定的な要因は物質的なものではありませんでした。自由が私にとって重要で、自由に対する大きな精神的なニーズがあったから逃げたのです。そしてドイツのフライブルクに来ました。都市にとって素晴らしい名前だと思います。

自由や正義などの精神的なニーズが過度に満たされることはありません。これは物理的なレベルとの重要な違いです。精神的なニーズは100%満たされるか、十分に満たされないか、あるいはまったく満たされないかのいずれかです。したがって、精神的なニーズには上限となる許容範囲はありません。つまり、正義、自由、安全などが「多すぎる」という状態は存在しないのです。

満たされない精神的なニーズはどのような身体的反応を引き起こすのでしょうか？ 言い換えれば、私たちの思考は体内で何ができるのでしょうか？ 数万件もの相談の後、私は身体的な症状や病気の中に、患者の精神的なニーズを認識できるようになりました。ニーズは体に現れるのです。

非物質的な要素がどのようにして物理的な反応を引き起こせるのか、私は疑問に思いました。愛、正義、自由、安全とは何でしょうか？ 化学物質でしょうか？ もしそうなら、私たちはこれらを化学的に処方し、再現できるでしょう。誰かが不正義や不親切を経験したと訴えてきたら、一服の正義、愛、自由を与えることができ、すべてが回復するでしょう。しかし、そのようなものはありません。「愛」を処方し投与することはできません。愛は精神的な要素であり、精神的な情報でもあり、化学式を持ちません。それは思考の中でのみ処理できるものです。そして、それが人間の絶対的なニーズであることは否定できません。しかし、愛がないと

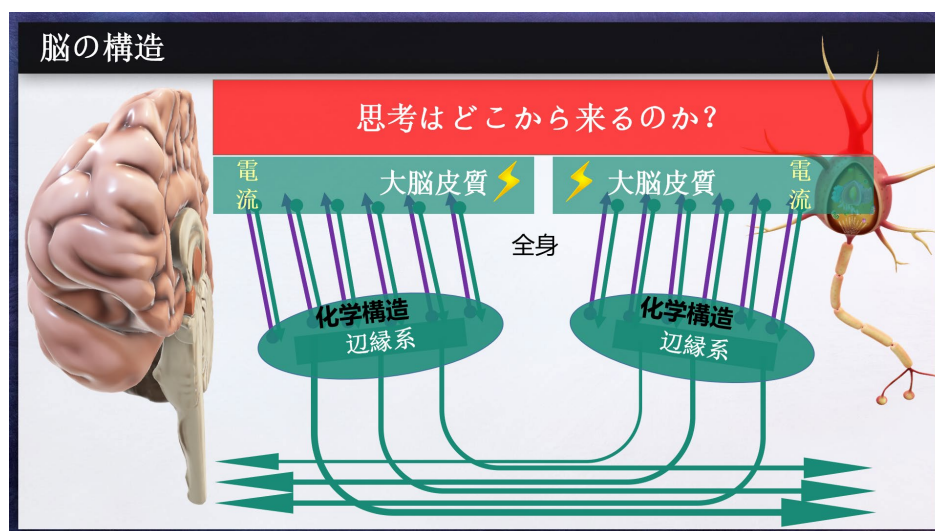
体が病気になるという事実について、私たちはほとんど意識していません。酸素、水、食物が指定された量で供給されなければならないのと同様に、ニーズとしての愛も100%満たされなければなりません。

病気の原因の根底に迫りたいなら思考が中心に来るのは、こういった理由からです。そのためには、思考とは何なのかを知る必要があります。思考が情報を運ぶことは知っています。私が次に検討したのは、「思考はどこから来るのか」という問いでした。

4. 思考はどこから来るのか

思考はどこから生まれるのか、あるいは誰がそれを「作る」のか？ それが問題です。主観的な視点に惑わされなくなかったため、この問いも絶対的な情報に基づいて追求しました。

人体という有機体は、多くのことを学べる絶対的な構造です。例えばタブレットが多くの部品で構成されているように、人体も相互接続された器官の多くによって構成されています。各器官は複雑に絡み合っただけでなく、機能します。どこかで、人体の器官すべてが制御され、調整されなければなりません。したがって、器官すべてを接続する中枢があるはずで、大脳皮質がこの中枢、つまり体全体の接続点を形成する場所だということを私たちは知っています。神経経路という形で、すべての「配線」が大脳皮質に接続し、人間の体を制御しているのです。



次のステップでは、脳の構造をより詳しく見ていきましょう。大脳は二つの半球、すなわち右脳と左脳で構成されています。二つの半球の大脳皮質は互いに接続されていないため、大脳皮質を切断せずに真ん中で切開することができます。脳の下層構造は破壊されるかもしれませんが、大脳皮質は完全なままです。これは「なぜ身体の片側だけを蝕む病気があるのか」という問いにおいて重要な点です²。

² 遺伝の法則によれば、左右の大脳皮質はそれぞれ一方の親の特徴を受け継ぎます。

外皮質は、しわのある、わずか4〜5mmの厚さの層です。そして何十億もの神経細胞、すなわちニューロンで構成されています。これらは導電ケーブルとして機能し、大脳皮質から体へと伸びています。このようにして、全身が大脳皮質に結合されているのです。体内で起こることはすべて大脳皮質で始まります。神経路はそこから脳を中心、いわゆる辺縁系に向かいます。その後、神経路は分岐し、右から左、そして左から右へと位置を変更し、体全体を走ります。

身体機能はすべて、大脳皮質での電気的な衝動から始まります。この衝動は体内において起こる次のステップすべての引き金です。ちなみに、各神経経路は絶縁されています。このようにしてのみ、電流は体内の正しい場所に到達し、例えば小指を正確に動かせるのです。この電気的な衝動は辺縁系に到達します。そこで、衝動は最初の化学反応を引き起こし、これはすぐに大脳皮質に報告されます——いわゆる感情です。この信号は、電気的な衝動または電流が体内で何をするのか、それが体にとって適切かどうか——何かについて満足かどうか——についてを示す最初のフィードバックとなります。

思考はどこから生まれるのでしょうか？ 脳内、例えば大脳皮質や辺縁系で生まれるのでしょうか？ それとも脳の外、または大脳皮質の外から来るのでしょうか？ ここでも自然の法則が答えを見つける役に立ってくれます。

従来の医学は（簡単に言えば）、「思考は大脳皮質の神経細胞のシナプス間で発生する」と主張しています³。脳波と化学物質が相互作用し、そのようなプロセスの過程で、例えばアイデアが生じるとされています。しかし、何十億もの神経細胞がある中で、どの細胞が思考をコントロールする機能を持っているのでしょうか？ どれが最終的な決定を下すのでしょうか？ どこかに上位の点、少なくとも技術的な装置と似たような、ある種の出発点があるはずです。

ここで問題となるのは、「脳はそれ自体のために考えることができるのか？」という問いです。この質問に確実に答えるには、脳が何でできているかを検討する必要があります。他の既知の物質すべてと同様に、脳は原子で構成されています。周期表の様々な元素の原子は互いに

³ この点の概要は、Eccles, J. C. (2000) 『How the Self Controls Its Brain (3rd ed.)』 (邦訳：自己はどのように脳をコントロールするか) において提示されています。物質主義的な解決策の限界に関するEcclesの説明は注目に値します。原著p.261f参照。

反応することができ、私たちはその後起こる化学反応のプロセスについて多くのことを知っています。

これらの反応は

- 外部要因に依存してのみ発生する可能性があり、
- 前提条件と反応の可能な結果が常に予め決められているため、偶然に起こることは不可能です。また、
- 化学はエネルギーと情報を吸収し、保存し、伝達できます。

化学反応は原子レベルの自然の法則で定義されており、常に同じ方法で起こります。これは特定の基準を満たすセメントなどを生産できる唯一の方法です。化学が情報を吸収し、それを取り出し可能な形で保存するため、電子機器を使用できるのだと、私たちは知っています。また、化学は熱を吸収し伝達することもできます。

同時に、化学元素にとって自然に不可能なことが何かも、私たちは知っています。コンピュータには思考がなく、考えることができません。顔認識やいわゆる「人工知能」を持ち、反応することができるとしてもです。「反応する」ことは「考える」ことを意味しません。

化学元素は

- 何も感じることができません（携帯電話は何も感じません）。
- 選択することができない、つまり決断を下すことができません。
- 自分自身をコントロールしたり破壊したりすることができません。
- 意識を持つことができません（タブレットにはどれだけの意識がありますか？）。
- 自己反省することができません。
- 道徳観を持つことができません。

したがって、化学元素が思考の源ではないということは明らかです。しかし、思考はどこから来るのでしょうか？ なぜ人間は考えることができるのでしょうか？ 脳がもっぱら化学物質で構成されているならば、それが独立して考えることは自然に不可能でしょう。

人間は感じたり考えたりできます。しかし、化学元素は無感覚です。怪我した指の神経は脳に衝動を伝えます。そうして初めて、頭の中で感覚が生じます。誰が痛みを感じるのでしょうか？ 感情の座はどこにあるのでしょうか？ 感情の存在自体が、「人間は化学物質だけで構成されているのではない」という優れた証拠です。

さらに、人間は非生物の自然界の元素とは異なり、自分自身を破壊することができます。自然の法則は物質の自己破壊を規定していません。しかし、人は自らのニーズを満たさない情報に応じて、11階の窓から飛び降りて人生を終わらせることができます。これは私のある患者の恋人がしたことです。彼女が電話で彼と別れたとき、彼はその通話中に飛び降りて死んでしまいました。

化学元素、例えばタブレットは、自らの破滅をもたらすことはできません。しかし、動物においては自己破壊が観察されています。例えば、愛する飼い主が死んだとき、猫や犬はしばしば重病になり、死んでしまいます。一部の動物は死ぬまで食べることを拒否します。なぜこのように行動するのでしょうか？

人間や動物の中には、自己破壊を行うという決断が下される前に、まず自己破壊の考えを生じさせる何かがあるはずで

人には認知能力があります。他の人々に関して幸せになったり怒ったりすることができます。これは、彼らが情報を意識的に認識し、それに対して認識可能な方法で反応できることを意味します。また、人は選択をすることができます。こうして、人生のパートナー、職業、あるいは車さえも選びます。物質にはどれもできないことです。

人間はこういった能力すべてをどこから得るのでしょうか？ その源はどこにあるのでしょうか？ それは脳の中にあるのでしょうか？ 自然の法則は、「化学的構造だけで考えることができる」、あるいは「化学物質だけで構成される器官が考えることができる」という可能性を排除しています。明らかにする必要があるのは、「人間の中の何が考えることができるのか」という点です。これを明らかにして初めて、「思考がどこから来るのか」という問いに答えることができます。

5. 人間の霊：単なる物質ではない存在

人間には「化学」だけでは説明できない能力がたくさんあります。人間には物質を超える何かがあるのです。この構成要素を見つけることができ初めて、「病気がどこから来るのか」という最初の問いに答えられます。先に示したように、純粹に物質的な要素としての脳自体は独立して考えることができません。脳は思考の起源にはなりえません。脳は思考において絶対に必要ではあるものの、独立して考えることはできないのです。

では、思考の起源は何なのでしょう？ 私が見出したのは、人間と動物には霊があるに違いないということだけでした。霊は目に見えず、物理的に直接検出することはできませんが、その存在を証明する理解可能な証拠はあります。

非物質的な霊の存在の証拠

1. 人間と動物の精神的なニーズ

人間と動物の両方において観察できる精神的なニーズは広範囲に渡ります。これには、自由、安全、好奇心、知識など、数多くのニーズが含まれます。人間の精神的なニーズは、例えば正義、真実、責任、道徳、評価などの点で、動物のそれをはるかに超えていることは間違いありません。しかし、人間の精神的なニーズのリストはこれで完全だとは言えません。共通点は、これらのニーズすべてに非化学的な性質があるという点です。「自由」という錠剤が一服あるというわけではないのです。

このようなニーズを要求するのは、何らかの実体です。この実体が存在しない場合、ニーズは必要ではないため、無意味です。人間の中には精神的なニーズを要求する実体があります。しかし、それは何でしょうか？ 人間の中の何が、あるいは誰が自由を求めているのでしょうか？ 私たちの脳細胞は精神的なニーズを欲しているのでしょうか？ それとも心臓、肝臓、胃が求めているのでしょうか？ あるいは、例えば脳細胞は適切に機能するため、他の人々からの理解を必要としているのでしょうか？ 細胞はそれ自体や他の人に対して不正が行われたとき、抗議したり、動揺したりするのでしょうか？

理性的に考えると、そういうわけではないというのは明らかです。したがって、人間や動物の中にも、精神的なものを要求する何かがあるはずで、真実と嘘、正義と不正義、安全と不安全を区別できる何か。愛情深い行為と不親切を見分けられる何か。人間には明らかにこういった能力があります。しかし、この能力はどこから来るのでしょうか？ 「人間は単なる物質以上の存在である」という説明以外に、私には答えがありませんでした。精神的な実体の存在を、あっさり否定することはできません。私たちはすでにその存在を示す用語を知っているので、私たちには霊があるのです。

2. 霊に対する体の依存性

化学物質で構成される私たちの体には、植物と同様に、単独では満たせない物理的なニーズがあります。植物が自然や人間に依存して水を得て吸収するように、私たちの体も精神的なニーズを満たすにあたって霊に依存しています。体は空腹や渇き、震えや汗を通してその必要性を霊に伝えます。このようにして、体は霊に何が欠けているか、または多すぎるかを示します。体は単独で食物や水を取りに行くことはできません。霊だけが体に食物、水、酸素などを供給できるのです。体はこれらの物質を吸収し処理しますが、単独で「調達」することはできません。体をコントロールするのは霊です。霊を通じて人は動くことができます。たとえそれが冷蔵庫や水道のところへ行くだけだとしても同様です。

霊がなければ、体は自らの世話をすることができないでしょう。体が不足を補うため、霊に信号を送るのはこのためです。空腹は細胞から発生しますが、細胞自体は空腹を感じることはできません。したがって、空腹はある細胞から別の細胞への信号ではなく、細胞（物質）から霊への信号です。そして、霊はこれによって体のニーズを満たすことができます——または拒否することもできます。これは、人間には霊があるに違いないという第三の証拠にもつながります。

3. 物理的なニーズに対する霊の優位性とそのニーズ

「愛」（精神的なニーズを示す用語としての「愛」）と命の間で選択しなければならない人の人生で葛藤が起こった場合、愛は生命よりも重要です。私はこの優位性を何度も目にしました。どちらのパートナーも、一人で生きたくないの、もう一方より先に死にたいと願うカッ

プルが多くいます。年配の患者は、妻が亡くなれば、すぐに自分も死ぬつもりだと私に話しました。ある若い男性の場合は悲劇的でした。ガールフレンドが二人の関係を終わらせたとき、彼はその状況に耐えられず、父親の銃を手に入れ、彼女をドライブに誘い、彼女を撃ち、その後自分自身を撃ったのです。

私の患者たちは物理的なニーズよりも精神的なニーズを優先しているということが、私には明らかでした。人々が精神的な欲求を追求するためだけに食事、睡眠、休息を諦める姿は、日常的に見られます。パーティーで精神的なニーズを満たすことが人生そのものよりも大事な思春期では、身体的なニーズはあまり注目されません。

単に存在するだけで満足する人はいないでしょう。例外はありません。私はよく患者に「あなたはただ生きているだけで満足しますか？」と尋ねます。誰も、生きているだけで十分だとは答えません。誰にでもその人を動かす何か、人生に意味を与えてくれる何かがあり、それなしでは満足しないでしょう。人生における意味の（想定される）喪失が精神的なストレスにつながり、それが体内での病気として現れることを、私は観察してきました。病気は人が自らの「生命」のために戦っている結果ではありません。むしろ、病気は人が人生の「意味」を満たすことができないか、または失った結果として生じるものなのです。

依存症もまた、生命そのものではなく、人生における意味を満たすことと関係しています。意味に対する精神的なニーズがますます増えており、それに伴い、依存症の人々も多く見られます。意味は常に生命より先に来ます。これは霊が体の上位にあり、人々は自分たちの人生の意味を満たせなければ、むしろ自分の命を捨てることを好むという証拠です。

そしてこれは、マズローのピラミッドが逆に構築されていることを意味します⁴。物理的なニーズは、ピラミッドの最初の層となっています。しかし人間の生活の現実には、人間のニーズのピラミッドが実際には主に精神的なニーズで満たされており、物理的なニーズは二次的に満たされていることを示しています。確かに、物理的なニーズと精神的なニーズがあり、私たちには両方が必要です。しかし、精神的なニーズは体の物理的なニーズよりも重要なのです。

⁴ 原文引用元：Maslow, A. H. (1943): A theory of human motivation. Psychological Review. 50 (4), S. 370-396.

では、人々が人生の意味を生命そのものよりも高く評価するのは、一体何が原因なのでしょう
か？ 何が人間を導いているのでしょうか？ 脳——つまり体——なのでしょうか、それとも
霊なのでしょうか？

4. 霊の能力は体の能力を超える

体は感覚や感情を通じて、そして神経を通じて霊と通信します。こうして体の欲求を伝えま
す。霊は体の欲求に応じなければならないのでしょうか、それとも拒否することができるので
しょうか？ 経験が私たちに示しているのは、霊が何かをしたくない場合、体がどれだけ緊急
の信号を送ったとしても、そのニーズは満たされないということです。霊は強制的に動かせな
い実体なのです。

私は霊の機能から、その特性について三つの点を突き止めることができました。

1. 霊は閉じたシステムであり、外部からコントロールすることはできません。霊は外部か
ら影響を受ける可能性がありますが、その影響を受け入れるかどうかは霊そのものが決
定します。
2. 霊をコントロールできるのはそれ自身であり、コントロールは霊の内側から行います。
3. 霊は常に活動しています。つまり、霊には受動的な状態は存在しません。

決定を下す能力は、おそらく物理的要素と精神的要素の間の最も重要な違いです。物理的要素
は「いいえ」と言うことはできず、外部から来る命令に従います。誰かが木材を加工している
とき、木材は自らを守ることができません。体にできるのは、反応し、化学物質を代謝するだ
けです。体は受け取った命令に従って反応します。霊は命令を受け取らず、独立して行動しま
す。

したがって、霊の能力は

1. 自らの行動のためのもの（自ら率先して行動したり、アイデアを思いついたりできる）
と
2. 外部からの刺激に対する反応の拒否（「いいえ」と言う）

であり、こういった能力は物質には見出せません。

霊も、何かをするためには情報を最初に処理する必要があります。しかし、霊は自ら行動し、反応したいときに反応するか、または反応せず、外部からの衝動を拒否します。このような理由で、霊が物質と等しいということはありません。霊は物質よりも優れているため、霊が物質から生じることもありえないのです。

体が食物を要求するとき、霊はこの欲求に従うことができます。しかし、霊は体からの緊急の信号とは反対に、食物なしで過ごすという決定を自由に下すこともできます。精神的により高いニーズを満たすのであれば、人は命を脅かすハンガーストライキも行えるというのは、このような理由からです。

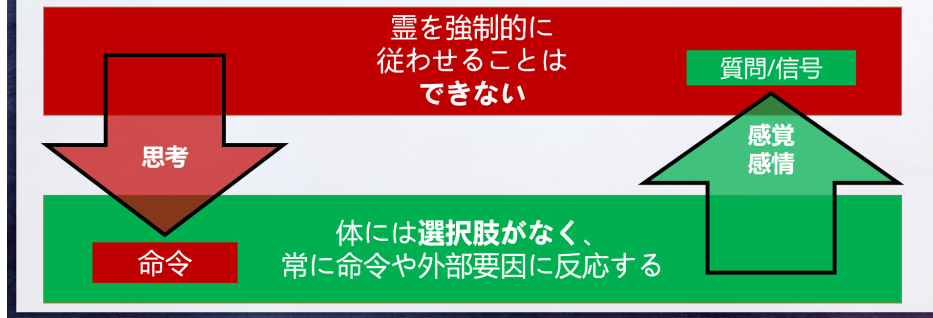
これらすべてが、物質は霊に影響を与えるものの、コントロールはできないことを示しています。物質は霊に対して不快感や痛みという反応を引き起こすことで霊を妨げることができます。しかし、物理的な反応を通じて、体（物質）に従うように霊に強制することはできません。

これは、霊が物質のように命令できる要素ではないことをはっきり示しています。霊は内側から自らをコントロールするため、提供された情報が自らの精神的なニーズを満たすかどうかを確認する必要があります。ニーズを満たす何かを提供された場合、それを受け入れ、それに従って行動します。そうでない場合、提供されたものに従った行動はしません。つまり、霊は選択肢として明確に「いいえ」と示すことができます。これは物質にはできないことです。

拷問の最終的な目標も、体を通じて霊に到達することです。霊が感じ、耐えなければならない体が損傷または破壊されます。しかし、このプロセスできえ霊に行動を強制することはできません。拷問を受けた多くの人々は、拷問がどれほどひどくても、決して屈服しません。これは人間に二つの実体があるに違いないというさらなる証拠です。

霊と体の間の上下関係

- 人に備わる二つの要素は互いに通信しなくてはならない。
- 人（そして動物）の魂と体は互いにどう通信しているのか？



5. 霊の思考による体のコントロール

下された決定は、脳への信号やリクエストではなく、命令です。物理的要素としての体は、体の外の世界に反応しなければなりません。選択肢はありません。手の動きは、霊からの衝動、命令を体が実行しているにすぎません。体は「いいえ」と言うことはできないのです。

パニック発作の例を使って、これら二つの実体の間の相互作用を見ることができます。人間の霊がある状況を「命を脅かす危険」と解釈すると、一瞬の驚きが体に働きかけ、体全体の代謝を変えるホルモンをミリ秒のうちに放出させます。体に選択の余地はありますか？ いいえ、それはあらかじめ定められた方法で反応しなければなりません。パニックが妄想に基づいている場合でも、身体的な反応は同じです。何か悪い夢を見て、目を覚まして安心し、「単なる夢だった！」と自分に言い聞かせることがあります。このような場合でも、身体は反応します。これは、ある種の映画を見て自発的にパニックを誘う場合にも当てはまります。

霊が思考を通じて体をコントロールするためには⁵、自然の法則によれば、体に物理的な衝動を与える必要があります。衝動がなければ体を動かすことはできないでしょう。私たちの脳が電

⁵ 呼吸機能もまた、霊の存在における化学的プロセスによってコントロールされています。この化学的プロセスは、霊がそれをコントロールしている間のみ機能しますが、霊はその機能の方法を決定しません。食物摂取に関する決定とは異なり、呼吸は訓練できますが、意識して永続的に止めることはできません。したがって、コントロールとは単に体に命令を与えることだけを意味するのではなく、体内で定義されたプロセスを、定義された枠組みの中で維持することをも意味するのです。

流で動作することはわかっています。これらの衝動はどこから発生しなくてはなりません。しかし、脳は自らに衝動を与えることはできません。これは生きている人と死んでいる人の違いによって示されていることです。死んだ人の脳には何が欠けているのでしょうか？ 電流です！ しかし、なぜ電流が欠けているのでしょうか？ そもそも電気はどのようにして大脳皮質に入るのでしょうか？ 何が脳内の電氣的な衝動を生成するのでしょうか？

物質として、脳はそれ自体を動かす電氣的な衝動を生成する能力を持っていません⁶。もし脳が自らを動かす手段を自給自足できたら、脳は永久運動機関になるでしょう。しかし、それでは依存性の基本法則とチャネルの原則が無効になってしまいます。そうすると、脳は人間のその他すべての器官だけでなく、宇宙で観察可能なすべての要素とも異なって機能するものだということになってしまいます。

思考と決定を通じて電氣的な衝動を引き起こすのは霊です。霊は言わば脳を「動かし続ける」のです。これらの電流は測定できるものです。そして霊による脳内での活動以外の何ものでもありません。死んだ人々からわかるように、脳そのものは電氣的な衝動を生成することはできません。自然の法則によれば、死んだ人はこのようにして、生きている人には霊があるに違いないということを証明しています。

霊の存在の証拠は以下のようにまとめられます。

霊がなければ、人間は

- 精神的な活動を行えない
- 精神的なニーズを持たない
- 知覚を持たない（感じる、見る、嗅ぐ、味わう、聞く）
- 思考を持たない
- 評価能力を持たない（「はい」と「いいえ」の選択）
- 責任能力を持たない
- 道徳能力を持たない

⁶ ここでは、大脳皮質から体全体を駆け巡る、複雑なコントロール衝動について言及しています。体そのものによる脳へのエネルギー供給ではありません。

- 精神性を持たない
- 体を動かすことができない

つまり、霊のない体は死んでいるのです。ここで、避けられない問いが生じます。物質が霊を生み出せないというなら、霊は一体どこから来るのでしょうか？

6. 魂：体と心の総体

進化に基づく科学によれば、霊は物質から発生します。しかし、それは霊と呼ばれるのではなく、「精神」と呼ばれています。精神は大脳皮質の活動の結果と見なされています。もしこれが事実なら、身体的なニーズや苦難は精神的なものよりも重要であるべきです。体が霊をコントロールすべきです。しかし、そういうわけではないということを、すでに見てきました。

自然の法則によれば、非物質的な霊が細胞の化学構造や物質から発生することはありません。体が精神を作り出し、それが体に何かを食べさせるかどうかを決定したり、11階から飛び降りさせたりするなど想像してみてください。理性に照らして考えてみると不自然であり、因果関係の法則に反しています。

思考によって体内に電気の流れを引き起こすのは霊です。これらの思考の方向に応じて、体内の電流は機能不全、自傷行為、そして病気さえも引き起こす可能性があります。

これは、霊によって生成される電気的な衝動が、大脳皮質に対して何か特定の結果をもたらすはずだということを示しています。つまり、「正しい」思考は体にとって適切な衝動をもたらし、「間違った」思考は有害な結果をもたらします。大脳皮質は物質であり、それ自体には決定能力がなく、また霊や思考に対してそれがどう反応するかについて、自由に決めることはできません。これは、霊の正しい思考方法、つまり体に対して正しい電気的な衝動を与える思考は、体内で確実に読み取れることを意味します。それと同時に、体内の、体に適合せず、正しくもない電気的な衝動も客観的な反応を示します。主観的な考えを客観的に測定するのは、特に私たちの生命と健康に関わるとき、非常に有益なことです。

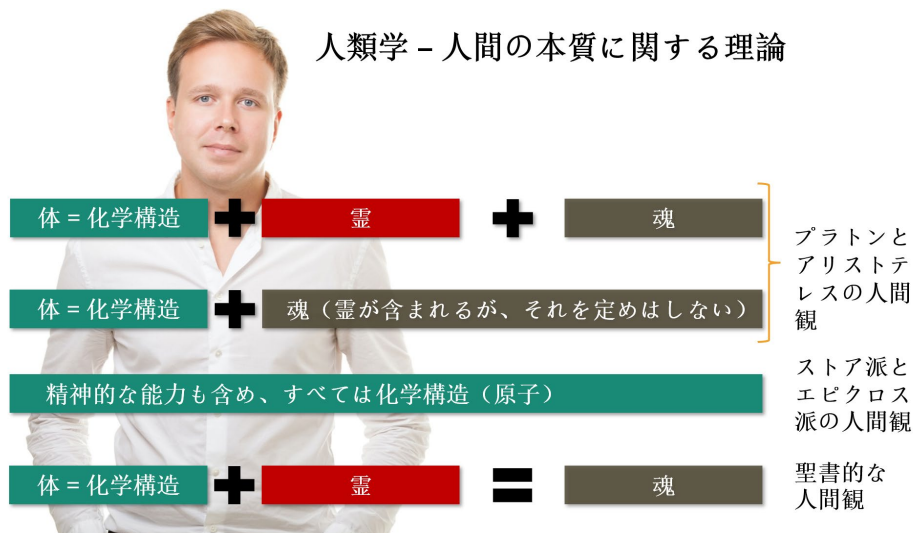
しかし、これらの詳細を突き止める前に、人類学の概要について、つまり人間の本質に関する理論について知るべきです。人間の構造についてはさまざまな理論がありますが、ここでは最もよく知られている三つのアプローチに絞って検討します。

1. 一方では、人間は三つの独立した実体、すなわち「体」、「霊」、「魂」の相互作用で見なされています。魂と霊は精神的な実体です。この人間観は古代ギリシャ人によって形作られたため、「プラトンとアリストテレスの人間観」と呼ばれています。プ

ラトンは人間を、「動物の体に閉じ込められた神」として非常にはっきりと描写しています。したがって、死は人間にとって一種の解放なのです。人間は再び神になります⁷。

この人間に関する理解は今日でも影響力があり、特にキリスト教を含む多くの宗教で見られます。

2. 古代ギリシャ人以来、別の概念もありました——ストア派とエピクロス派の人間観です。この見方によると、人間全体はもっぱら化学構造であり、精神的な能力もその構造から生じるとされています。進化に基づく医学と科学の大部分は今でも、この比較的単純な人間観を支持しています。この見解によると、愛や情熱は細胞内の「燃焼」によって生じます。



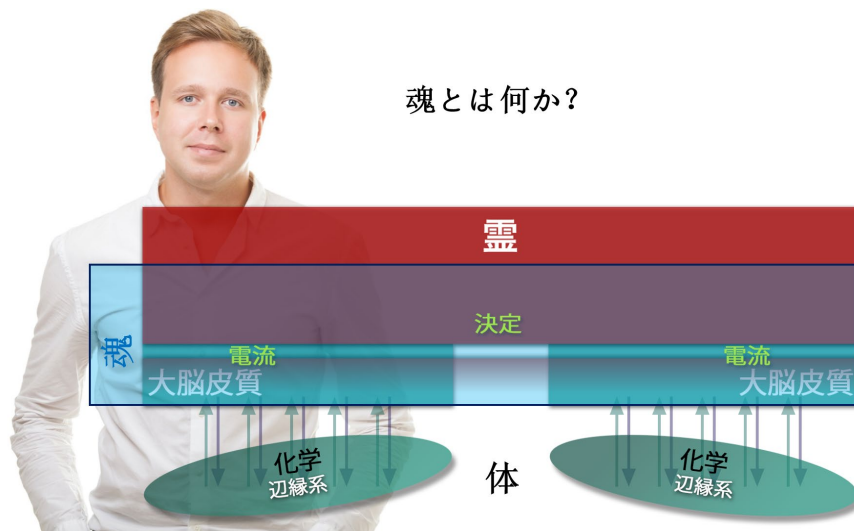
3. これまで述べてきたことに照らして、「物質だけでは人間を説明できない」という否定できない証拠があります。自然の法則によれば、体は、体そのものだけでは生み出せない力によってコントロールされる必要があります。したがって、人間が二つの要素、つまり「体」と「霊」から成り立っていると見なすのは理にかなっています。第三の要素は見つけれませんでした。体と霊の相互依存性——つまり一方は他方なしには何も

⁷ 原文引用元 : Reuter, H. (2014): History of psychology. Hogrefe, pp. 31-45

できないという依存性——に基づいて、「魂」という用語はこの事実を適切に表現しています。したがって、人間は霊と体から成る魂なのです。

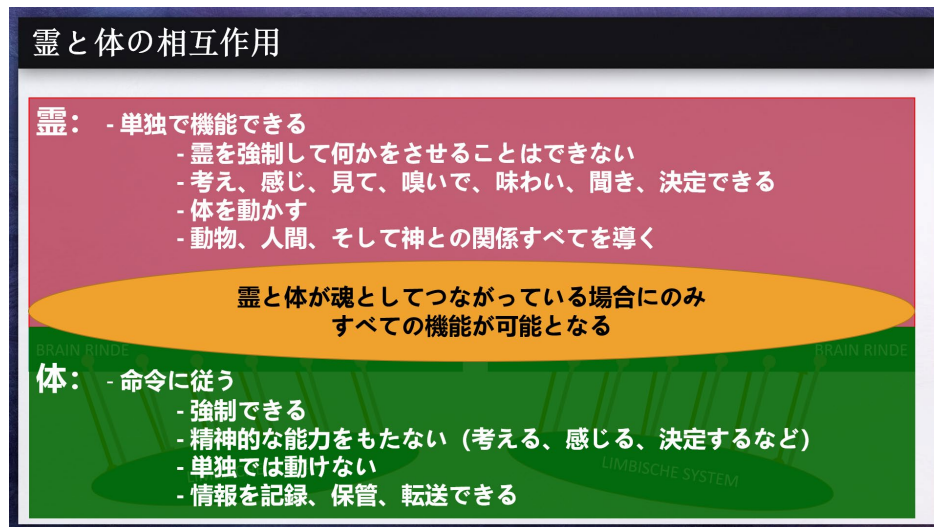
水を例に、これを説明してみましょう。水 (H₂O) は酸素と水素が組み合わさることで存在します。水が二つの要素から成り立っているように、魂も二つの不可分な要素から成り立っています。水は、二つの要素が分離すると、もはや水ではなく、酸素と水素になります。霊と体が分離すると、人間は死んでしまいます。これは、魂がもはや存在せず、霊と体という分離した要素だけが存在することを意味します。つまり、両方の実体と一緒に機能する場合にのみ、人間は機能できるのです。

霊と体の協力を示すもう一つの例は、ピアノ奏者とピアノの関係です。ピアノは単独で音を出すことはできません。また、奏者はピアノなしでピアノの音楽を作ることはできません。奏者とピアノと一緒に機能するときのみ、音楽が生まれます。この音楽は奏者と楽器の組み合わせなのです。それと同じように、魂は霊と体の相互作用の結果です。体はピアノであり、霊は奏者です。二つの異なる要素が、新しい実体、生きた魂をもたらします。自然の法則によれば、相互依存性がありますが、体は霊によってコントロールされています。霊と体が分離すると、音楽はなくなります。霊が体を離れると生命は終わるのです。



霊と体は機能的な単位を形成します。この二つの要素が機能するのは、一緒になったときだけです。それにもかかわらず、霊は体の上位にあり、体をコントロールしています。それでいて、体には霊が上書きできない固定の設定があります。これは、霊が体をコントロールしてい

ても、体の限界を超えることはできないということを意味します。人間の霊は、このような理由で体によって制限され制約されているのです。



これは、人間の五感——感じる、見る、嗅ぐ、味わう、聞く——が体と霊の組み合わせによってのみ存在できることを明らかにしています。物理的な情報は神経を通して体から大脳皮質に到達し、その後、感じたり、嗅いだり、見たり、聞いたり、味わったりする霊に提示されます。霊の考える能力も大脳皮質に依存しています。霊はそれ自体のために考えますが、大脳皮質なしでは考えられません。足そのものは歩けなくても、歩くために使われるのと同様に、霊もまた機能する脳なしには考えることができません。人間がすることすべてにおいて、両方の要素が常に関与しているのです。

7. 病気はどう発生するのか

私は病気発生の原理について、ある症例から学びました。ここでは症例についてお話ししたいと思います。その後の患者すべてにおいても同じパターンを繰り返し観察することができ、例外はありませんでした。

症例5：ある30歳代前半の女性患者は、鎮痛剤を服用してもまったく止まらないほど重度の頭痛に2週間悩まされていました。かかりつけ医から治療を受けていましたが効果がなく、その医者は副鼻腔感染症の可能性を除外するために彼女を私に紹介しました。私は患者を徹底的に診察しましたが、異常は見つかりませんでした。彼女の様子は非常に苦しそうだったので、脳腫瘍や脳出血の可能性も考えました。しかし、同日に行った頭部CTスキャンでも異常所見は認められませんでした。

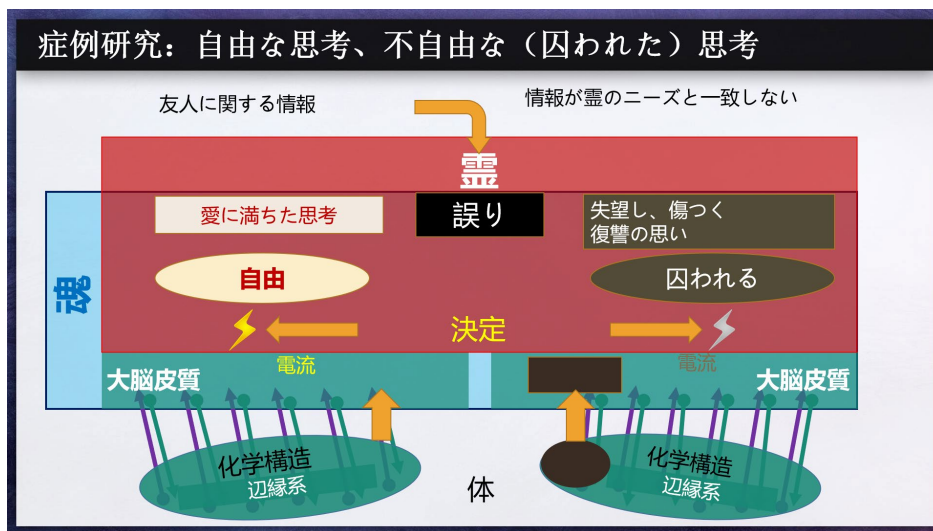
この女性の痛みは当初、説明がつきませんでした。頭部外傷やその他の身体的な影響もありませんでした。彼女の痛みは単なる想像の産物なののでしょうか？ もちろん、痛みそのものは目に見えませんが、機能的MRIによるスキャンで脳の活性化領域を検出し、可視化することはできます。特定の活性化パターンが生じると、人は痛みを感じる事が分かっています⁸。痛みは辺縁系から大脳皮質への化学反応であり、霊に痛みを信号として伝えるものです。

この女性にどう対応すべきでしょうか？ 彼女には確かに重度の症状がありました。痛みは想像できません。しかし、想像によって痛みを生み出すことはできます。痛みがあれば、それは実際に生理的に経験できるものです。この点については、私自身の経験からも確認できることです。医学部生だった頃、虫垂炎がもたらす生命を脅かす危険性についての朝の講義に出席した日のことです。私はその日の真夜中頃に虫垂のあたりに痛みを感じ始めました。死ぬかもしれないという恐怖から、すぐに緊急治療室に向かい、入院することになりました。虫垂炎かどうかを判断するための2日間の検査の後、念のため私の虫垂は切除されました。最終的には、炎症は起きていないことがわかりました。

⁸ 原文引用元：Kröner-Herwig, B. et al, (2011): Pain Psychotherapy: (7th ed.) Springer, p. 6

症例5 (続き) : 痛みの身体的原因が見つからなかったため、残されたのは精神的要素だけでした。2週間前に患者に影響を与えた出来事が何かあったかどうか尋ねたところ、女性は「2週間前、彼氏が私を裏切っていたことが分かったんです」と話しました。二人の関係は1年続いており、彼女は遠くから彼のもとに引っ越すために多くを犠牲にしていました。家族から離れ、彼と一緒に住むようになったのです。しかし最近になって、彼の不誠実を知ったのでした。

私たちの霊には誠実さに対するニーズが刻まれており、不誠実さはその反対です。満たされるべきニーズがあるため、ニーズの反対となるものに対しては自動的に拒絶反応を示します。この女性の場合も同様でした。しかし私は、どのような思考の流れが頭痛につながったかという点に興味を持ちました。そこで、真実を知る前に彼に対してどのような考えを持っていたか、そしてその後どう考えが変わったかについて、彼女に尋ねました。彼女が以前彼に対して持っていた考えは、愛に満ちた思考だけでした。愛に満ちた思考は本質的に自由な思考であり、私たちの精神的なニーズに対応しています。自由な思考はすべて、体に適切な電気的な衝動を引き起こす決定につながり、辺縁系でポジティブな感情を生み出します。これは電気的な衝動が体にとって適切であったという物理的な証であり、霊に「このまま続けて！」という情報を与えます。愛に満ちた思考は不調を引き起こすことができず、したがって体に病気を引き起こすこともありません。



しかし今となつては、この女性は彼の不誠実に関する悪い知らせを受け取りました。この情報は、誠実さ、正直さ、そして正義に対する霊の二ーズに違反するものです。なぜなら、彼は浮気をすることで、単に信頼を裏切り、不正直だというだけでなく、不正も犯しているからです。このような信頼の裏切りに、彼女はどうか反応するのでしょうか？ 失望し、傷つき、復讐の思いも抱きます。

このようなネガティブな思考は、明らかに体を傷つける電氣的な衝動を生み出します。霊が考えるのは、自らを閉じ込める不自由な思考です。霊が自らを閉じ込めるとき、霊は体に合わない決定を下し、体に合わない電氣的な衝動を脳内で引き起こします。この誤った力は、脳とそれにつながる他の器官すべてに損傷をもたらします。つまり、ネガティブで不自由な思考は常に、体に合わない電氣的な衝動をもたらし、体に対して様々な程度の損傷を与えるのです⁹。

一般的に言えば、人間の二ーズは、誰かが自分の霊の二ーズを満たさないことをするときを感じるものです。この「反二ーズ」は、それに対して行動を起こすきっかけであると考えられます。しかし、他者を変えることは（通常）できないため、この試みは自分自身の自我を閉じ込める結果につながります。このような不自由な思考に固執すればするほど、それらはさらに増殖し、霊の中で解決不可能な問題がさらに生じます。先ほどの患者は別の思考にも14日間苦しめられ、囚われていました。「彼が二度と浮気しないという保証があれば、彼を引き留めておきたい」という思考です。これにより彼女は不可能な状況に置かれました。彼が将来も誠実であり続けるという保証はどこにあるのでしょうか？ 彼女自身もそのような保証はないことを知っていたはずですが、それでも彼に執着し、可能であれば彼の誠実さを強制したいと思っていました。そして彼女のうちにある衝動強迫が、彼女の頭痛を引き起こしていたのです。

⁹ 思考は大脳辺縁系を經由して、人間の循環系における次の地点である骨髄に衝動として到達します。賢者ソロモンでさえ、悩み苦しむ心は骨を枯らすと記しています（箴言17章22節）。身体の病気はすべて骨髄から生じることをソロモンは知っていたのです。ここで血液——すなわち、すべての抗体と免疫細胞——が作られます。骨髄で起こることはすべて、霊の命令によって生じるのです。骨髄の活動は体内の他のすべての器官の機能に影響を与えます。空気、水、食物などの物質的要素は、思考の後に、肺や胃などを通じて人間の機能サイクルに入ります。人間の始まりにあるのは化学物質ではなく、霊的要素としての愛なのです。器官からの情報は脳辺縁系へと流れ戻り、次に大脳皮質へ、そしてそこから霊へと向かい、こうして人間の機能サイクルが完成します。

ここで、私たちの人間関係の根底にある理由について、疑問が生じます。なぜ私たちは関係を築くのでしょうか？ 一般的には、「私たちは精神的なニーズを満たすために他の人間を必要としている」と信じられています。この患者もまた、自らの精神的なニーズを彼氏に満たしてもらう必要があると信じていました。彼が愛、忠誠心、安全性に対する彼女のニーズを満たしてくれると考えていたのです。そのため、彼女は彼を選び、彼と一緒に暮らしていました。実際に彼は彼女のニーズを満たすことができるのでしょうか？ 彼女の要求は現実的なのでしょうか？ 自然の法則では、一方が他方のために飲んだり、食べたり、考えたりすることは可能なのでしょうか？

「他者が自分の精神的なニーズに反する行動を取ると、誰もが自分自身に反対するような反応を起こすものだ」ということを、私は何度も何度も見てきました。自分では気づかずに、そして望まずに、自分自身を傷つけているのです。この患者の場合も同様です。彼女は「彼は自分に対して誠実になる義務がある」という確信から、精神的に自分自身を閉じ込め、自らの頭痛を生み出していました。私もしばらく彼女に同意していました。しかし、この要求によって彼女の霊が彼女の体を傷つけており、自然の法則からすると彼女の望みは叶わないということ、私は理解しました。そうして初めて、私は自分の考え方の誤りに気づいたのです。

医師として、私は「体に害を及ぼすことを体にすべきではない」と仮定しています。もし体に間違った食物を与えれば、体はそれに対して否定的に反応します。もし体が私の思考に対して否定的に反応するなら、その思考は正しくないに違いありません。この場合は、体に有害な食物を変えるのと同じように、思考を変えなくてはなりません。

その後のすべての患者にも見られた思考の誤りとは何でしょうか？ それは嘘とは見なされていない、無意識の自己欺瞞にあります。そしてそれは私たち全員に共通しているため、愛する人々、私たちの世話をする人々が期待に応えなかったとき、あるいはこの人たちが死んでしまったとき、誰もが自分自身の敵となり、自らを破壊してしまうのです。もし病気と自然の法則を基準として使用していなければ、私はこの無意識の自己欺瞞に気づかないままでいたでしょう。

8. 私たちにつきまとう嘘

患者との対話を始めたとき、私はあることに気づきました。誰もが皆、その内に「私は愛される必要がある」という確信を持っていたのです。どうやら、人は「愛される」ことで自分のニーズを満たせると考えているのです。私の患者の物語はすべて、何らかの形で愛を中心に回っており、「私は愛されていない」という思考が常に中心にありました。

次に、愛されることに対する期待を示す実例をいくつか紹介します。

症例6：ある若い女性患者は、3日間まったく飲むことも食べることもできない状態でした。しかし、診察しても身体的な異常は見つかりません。この女性は結婚して2年。彼女の大きな悩みは、夫の儉約な態度でした。当初、彼は新婚旅行に行きたがらなかったのですが、彼女はなんとか彼を説得できました。ホテルに着いたその晩、彼女はきれいに着飾り、夫が食事に連れて行ってくれると期待していた時のことです。彼は「さあ、スーパーマーケットに行ってお何か食べるものを買おう」と言いました。これは決してロマンチックとは言えません。

つまり、この女性はケチな男性と結婚しており、彼はできる限り節約に励んでいたのです。その新婚旅行中、彼女はホテルのプールで自殺を試みました。そして、私の診察を受ける前にも、夫が過去2年間で何も変わっていないことを示す出来事が再び起きていました。

人の問題はすべて、他者から愛されていないと考えることから生じます。なぜ母親は息子が食器を片付けないと怒るのでしょうか？ 母親は自分で皿洗いができないから困るのでしょうか？ 彼女は何年も皿を洗ってきました。彼女が怒るのは、潜在意識レベルで、息子が彼女を愛さず、評価していないと考えるからです。そうでなければ、息子は母親に皿洗いを押し付けたいはずで、人間関係を扱う書籍の大半は「あなたは愛される必要があり、それは持ちつ持たれつなのだ」と述べています。「誰かが私たちのためにいるべき、あるいは私たちのニーズのためにいるべきだ」という嘘の考え方は、人生を通して私たちにつきまとい、生きるのを難しくしているのです。

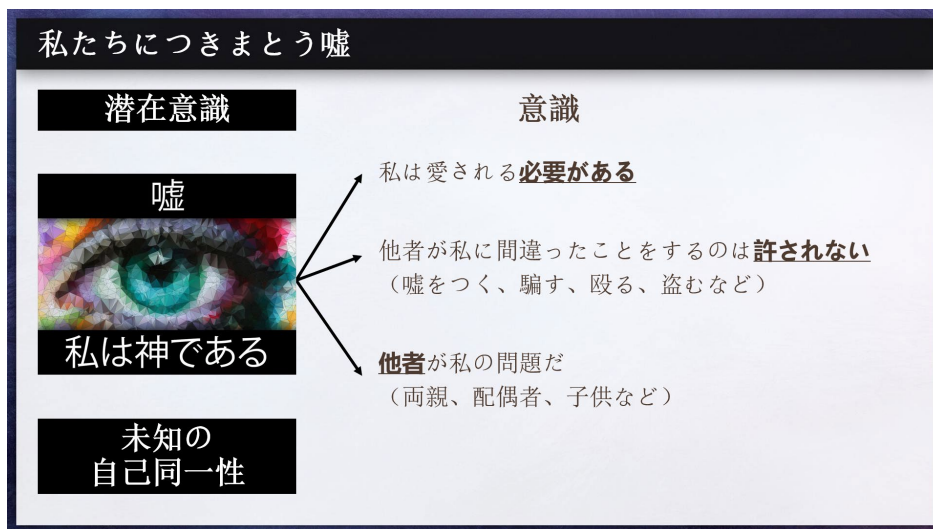
この誤りからは、別の嘘も生まれます。「他者が私に間違っただけを許されない」という嘘です。これは、他者は「私」に嘘をついたり、「私」を騙したり、殴ったり、「私」から盗んだりしてはならないということを意味します。私は診療所でこの顕著な例に遭遇しました。

症例7：ある患者は、夫が浮気をしていることを知り、かんかんに怒っていました。彼女は繰り返し彼を非難し、彼はいつもそれを否定していました。しかしある日、彼は浮気を認め、別れたいと言ったのです。患者は、夫が他の誰かと関係を持っていたこと以上に、彼が長い間嘘をついていたことに腹を立てていました。私は彼女に「あなたは旦那さんにとって一体どういう存在なのですか？ 旦那さんがあなたに対して正直になる義務があると思っっているのですか？」と尋ねました。

もっと一般的に表現してみましょう。他者が私に対して何らかの義務を持っている、私という存在は一体何なのでしょう？ 他の人たちは私に嘘をついたり、騙したりできるのでしょうか？ 私を殴ったり、私から何かを盗んだりできるのでしょうか？ もちろん、国の法律を破ることはなれるでしょうが、他の人たちはそういう行動を取ることができる、というのは事実です。他者の行動に耐えられなくなった瞬間、つまり他者が自らの望みを果たす権利を私が奪おうとする瞬間、私は自分自身を閉じ込め、苦しむことになります。

二つの単純な質問で、他者の愛がいかにか非論理的に判断されているかが明らかになります。患者に「誰かがあなたのために考えることはできますか？」と尋ねると、彼らは皆、「いいえ」と正しく答えます。

しかし、質問をわずかに変えて、「あなたは誰かに愛される必要がありますか？」と聞くと、誰もが「はい！」と答えるのです。これは論理的ではありません。もし私が本当に誰かに愛される必要があるなら、それは「誰かが私に対して愛に満ちた思考を持てるはずだ」ということになります。つまり、実質的に二つの質問は同じであり、それに対する患者の答えは矛盾しているのです。人々はしばしば、他者の思考に対する自分の見方がいかに矛盾しているかすら認識していません。



なぜ誰もが愛されたいと思うのでしょうか？ また、なぜ子供の頃に母親から愛されなかったら、障害を持った大人になると誰もが確信しているのでしょうか？

40歳代の患者の耳を診察しようとしたとき、彼は身をひるがえしました。なぜそれほど怖がるのか尋ねると、男性は「両親が私を愛してくれなかったからです！」と答えました。本当に40歳になっても、両親に愛されなかったという理由で恐怖を感じるものなのでしょうか？ 自分のニーズを満たす上で、「他者が何をするか、あるいはしないか」ということは、意味を持たないのだと、私たちは理解していません。自分のニーズと人生にとって決定的な影響力を持つのは、自分自身の行動だけなのです。

「私は愛される必要があり、それによって私の精神的なニーズが満たされる」という考えは嘘です。単にそれが不可能だからです。誰も他者の身体的・精神的なニーズを満たすことはできません。私たちの体は、否定的な感情や病気を通して、この自己欺瞞を明らかにします。

体は、ある思考が真実か嘘かを見極める最良の方法です。体に嘘をつくことはできません。体は許容範囲内で反応しますが、反応そのものに代わるものではありません。とりわけ、私たちの体は機能するために電気を必要とします。この電流は人間の霊によって引き起こされます。しかし、霊もまた自らのニーズを持っており、それを最初に満たす必要があります。情報を吸収する前の霊は、内部が空です。ニーズを満たすためには、「誰？」、「どのように？」、そして「どこから？」という三つの質問に答える必要があります。

私の胃を満たす責任は誰にあるのでしょうか？ 100%の責任を負うのは私だけです。なぜなら、他の誰も私のために食べることはできないからです。食べるとは、自然から前もって取ったものを用いて体のニーズを満たすことを意味します。私たちは生命の法則に従って食べます。与える前に、まずは取る必要があります。

次は、精神的なレベルに目を向けましょう。私の霊が十分な愛を得られるようにする責任は誰にあるのでしょうか？ 霊が「満たされる」ようにする責任は誰が負うのでしょうか？ 身体的なニーズと同様に、それは100%私自身の責任です。では、どのように責任を果たすべきでしょうか？ 人間の構造は、隣人への愛に満ちた思考が体に適切な電気的な衝動を生み出すために必要であることを示しています。しかし、この情報は最初に吸収されてから伝達される必要があります。

しかし、人間は心の中で誤り、愛することには二つの行動があることを見落としています。愛することとは、単に与えることなのだと考えています。しかし実際には、私のニーズを満たしてくれない他者に対して愛に満ちた思考を与えられないとしたら、結局のところ私は相手からその情報を取り、こうして受け取ったものをそっくりそのまま返すことになる、という点が明らかになります。もし相手の心が乱れていたり怒っていたら、私も同じようになります。もし相手が愛情深い人なら、たいてい私もその人に対して愛情深く反応し、その状態に喜びを感じます。なぜなら、愛に満ちた思考を持っている限り、それによって引き起こされる電気的な衝動は私の身体的なニーズに一致し、害を及ぼさないからです。

「取ることによって与える」の原則は思考にも適用されます。愛に満ちた思考とは、与えることを意味します。このような思考は、どこから前もって取れるのでしょうか？ 私を愛さない人々に対して、そのような思考を何気なく持つことができないのはなぜでしょうか？ それは、霊が「他者から何かを与えられることによるのみそのニーズが満たされる」という誤りを深く確信しているからです。つまり、私たち誰もが、他者の行動に固執しているということを意味します。

言葉は必ずしも決定的ではありません。「愛している」といった言葉でさえ、昨日私を殴った人から発せられれば、怒りやストレスを引き起こす可能性があります。そのような場合、あなたはどうか反応し、感じるのでしょうか？ 発せられたのは美しい言葉です。もし言葉の内容が信

じられないなら、愛に満ちていない思考で反応します。これは否定的な感情を呼び起こす電氣的な衝動を生み出します。このことから、感情は他者の行動から生じるのではなく、自分自身の反応からのみ生じることが明らかになります。

では、なぜ私は（一般的に）他者のネガティブな行動に対してポジティブに反応できないのでしょうか？ なぜ客観的でいられず、動揺して気分が悪くなるのでしょうか？ それは、心の中の誤りが、他者は私に何かを——愛でなくとも、少なくとも親切さを——負っているという無意識の信念を、私たちに持たせるからです。

しかし、「愛される必要がある」という考えは機能的ではなく、法則から逸れています。自分に関わる機能が自分の外で行われることはありません。誰も、自分が受け取っていないものを他の人に与えることはできません。私たちは皆、他者に影響を与え、逆に他者から影響を受けます。しかし、ある人が他者の「カリスマ性」に反応するかどうかは、完全にその人次第です。あなたに向けて提示されているものが良いものであれ悪いものであれ、それを受け取らないとしたら、何も起こりません。

「取ることによって与える」の法則によれば、私は愛を与える前に、どこかからそれを取らなければなりません。もし私を愛さない人を愛することができないとしたら、ある事実が明らかになります。それは、その人こそが実は、私が愛を取る、または愛を受け取りたいと思っている相手その人こそが、私が愛を取る、あるいは受け取りたいと思っている相手なのです。つまり、私はその人を愛の源として利用しているのです。

人間の構造を理解すれば、法則は原因と結果の絶対的かつ信頼できる尺度を私たちに与えてくれます。宇宙のすべての機能の基本法則と人間の構造により、生活のほぼすべてのことがなぜ起こるのか、あるいは起こらないのかを分類し、説明することができます。人間には反省する能力があります。これにより、自分自身について気づき、こういった気づきについて考えることができるのです。

9. 自己認識：真理に向かう最初で最難関のステップ

最も重要な知識とは何でしょうか？ それは自己認識ではないでしょうか？ 私は、人間の本质に対する深い無知が人類にとって最大の惨事だと確信しています。私はどのように考えるのか？ 私の感覚や感情はどのように生じるのか？ なぜ私はこのように反応するのか？ もし人々が自分自身についてよく知っていれば、他者に欺かれることはないでしょう。自己認識があれば、私たちは自分が誰なのか、何ができ、何を達成できるか、そして何が不可能かを知っているでしょう。しかし残念なことに、人々は自分自身についてよく知りません。学校や大学では、私たち自身についての真実を教えてくれません。

患者の人生の物語について患者と話し始めたとき、人々が自分自身を誤解しているということに、私は気づきました。患者の物語から、この人たちが自分自身について誤ったイメージを持っていることは明らかでした。私は「私も自分自身をこれほど間違っているのだろうか？」と、自問せざるを得ませんでした。私たちは「自分自身について知らない」という大きな困難を抱えています。自己認識は難しいかもしれませんが、病気を説明できるようになるためには、自分の内部で起きるプロセスを理解することが不可欠です。

鏡を使えば、自己認識を果たせます。体の場合、私たち誰もが鏡のことを知っています。鏡は現実を反映するのでしょうか？ 良い鏡は正確な反射を示します。では、霊のための鏡は何でしょうか？ どうしたら人間としての自分自身を認識できるのでしょうか？

自分自身を認識するには、客観的な基準を使うことが重要です。私たちにはどのような手段があるのでしょうか？

自己認識のための手段

A. 体。私たちはすでに人間の脳の構造、特に大脳皮質について見てきました。神経を通じて体のあらゆる部分がつながり、身体機能はすべて大脳皮質を介して制御されています。これは私たちが霊を持っているからこそ可能なのです。霊と体は、ピアノの演奏者とピアノのように一緒に作用します。思考と決定を通じて、霊は制御を行い、体に電流を送ります。臓器には受け取る以外の選択肢がないため、脳はチャネルとしての機能において、これらの電流を受け取

り、それに従って反応します。つまり、脳は霊が指定したとおりに、体に衝動を伝達するので
す。

最初の身体的反応は辺縁系で起こります。感情を通じて、ホルモン（化学物質）は電氣的な衝
動を引き起こした思考が体にとって適切だったかどうかを最初のサイクルで報告します。感情
は常に思考の帰結、つまり効果です。感情と思考は並行しているわけではありません。例え
ば、恐怖の思考は無意識のうちに生じ、電氣的な衝動と、それに続くホルモンの放出を通じ
て、「体にとってストレスとなる感情」として認識されます。これは、人々は自らが感情とし
て認識するものに関して責任を負っていることを意味します。感情は究極的に、私たちの無意
識の思考の鏡なのです。

先ほど紹介した重度の頭痛を持つ患者の場合（症例5）、彼女が彼氏に対する愛に満ちた思考
を変えた後に感情が現れました。そのきっかけは彼氏の浮気に関するネガティブな情報であ
り、その情報は彼女の霊のニーズを満たすものではありませんでした。そのため、彼女は失望
し、傷つき、そして復讐の可能性について考え始めました。この情報を受け取った後、彼女の
思考はもはや自由ではなく、閉じ込められたものとなりました。強迫観念にとらわれたように
考え始め、「囚われた身」となった瞬間から、彼女は体に適合しない衝動として辺縁系にネガ
ティブな感情を引き起こす決定を始めました。その後すぐに、さらなる反応として頭痛が始ま
ったのです。

体は霊によってコントロールされるため、霊にとって完璧な鏡となります。体は客観的であ
り、嘘をつけません。与えられたことや、経験したことを伝えるだけだからです。体は——鏡
として——霊に対し、霊そのものに関する真実を明らかにできます。そして、霊は基本的に二
つの情報、つまり真実または嘘の情報によってのみ特徴づけられるため、体は霊に対し、霊が
真実に基づいて考えているか、それとも嘘に従っているのかを証明します。このプロセスは、
霊が無意識の自己欺瞞を認識し、それを真実で置き換えるのを助ける、重要な客観的基準な
のです。

B. 囚われた霊。人は、自分の精神的なニーズに一致する情報を受け取っている限り、自由のま
までいられます。否定的に反応する必要はありません。期待が満たされている限り、問題はな

いのです。しかし、相手が期待に応えなくなった瞬間——または自分の視点から正しいと思われることをしなくなった瞬間——問題が始まります。

私が幼かった頃、祖父は犬を飼っていました。その犬は、からかうと、自分の尻尾を噛み、円を描いて走り回りました。他の人が間違いを犯したからといって、自分自身を破壊するのは賢明なことではありません。しかし、これは私が診察した患者全員に見られる一般的なプロセスなのです。世界中のすべての人を知っていたとしても、おそらく例外を見つけることはないでしょう。

一部の患者は「自分には別の考え方をする選択肢がある」と考えています。自分は怒りを避けることができると考えています。本当にそんなことができるのでしょうか？

症例8：35年の結婚生活の後、ある患者は、夫が結婚当初から複数の女性と異なる場所で浮気していたことを知りました。患者はこの事実を発見してから約3年後、いくつかの症状を抱えて私の診療所を訪れました。その一つは睡眠障害でした。「夜になると眠れなくなりました。車を運転しながら星を眺め、この状況からどうしたら抜け出せるか考えています」と、彼女は言いました。

この女性の霊は自由でしょうか、それとも囚われているのでしょうか？ 誰が彼女を閉じ込めているのでしょうか？ 彼女は35年間、夫と共に幸せに暮らし、満足していました。夫の浮気について知ったときに初めて、彼女の中で破壊のプロセスが始まったのです。彼女が自分自身を破壊していることに気づかなかつたら、他に誰が彼女を助けられるのでしょうか？ 誰も彼女を助けられません。彼女は、夫の行動が自分を破壊していると考えています。しかし、浮気について知らなかった頃、夫の行為は彼女を傷つけませんでした。これにより明らかになるのは、何をどう知覚し、評価するかによって、私たちは傷つくという点です。

どの患者も自己破壊者であると気づいたとき、私は「なぜ患者は自分を破壊するのだろうか？」と自問しました。もちろん、私は自分自身にも同じ問題があることを発見しました。これは誰にでも影響します。誰もが皆、その機能においては同一だからです。しかし、何が間違いなのでしょう？ 私たちは皆、どこで間違っているのでしょうか？

欺瞞は、受け取った情報が真実と見なされることによって成り立ちます。情報が嘘として認識されない限り、欺かれた人にとっては真実のままです。つまり、嘘が真実として受け入れられるからこそ、不幸は生じるのです。

C. 原因と結果に関する自然の基本法則。次は私たちが築く関係のパターンを検討しましょう。私たちは母親、父親、配偶者、子供、ペットなどと関係を築きます。なぜ私たちはこういった関係を築くのでしょうか？ この人たちを愛し、この人たちに何かを与えたいからでしょうか？ それともこの人たちから何かを得たい、つまり愛されたいからでしょうか？ なぜ頭痛を訴えた女性は彼氏と同居することになったのでしょうか？ なぜ人は結婚するのでしょうか？ 何かを与えたいのでしょうか、それとも得たいのでしょうか？ 「両方！」というのがごく普通の答えです。しかし、それは本当でしょうか？ 法則によると、同じ場所で同時に与え、受け取ることはできないと、私たちは学びました。それは不可能なのです。同時に前進・後退できないのと一緒にです。

人間はその過ちのせいで、自らに「私は愛や、他者の行動や存在に依存している」という思考を押し付けています。しかし、これは本当なのでしょうか？ この問題には二つの根源があります。一つは、私たちが正しいと思うことや、他者に期待することを、他者が実行しない場合。もう一つは、他者がそれを実行しても、死んでしまったり、私たちとは関係がない場合です。

ほとんど無意識のうちに抱く依存という考えによって、私が関係を結ぶすべての人が私の債務者となります。私たちは、取るのではなく、与えることによって関係を始めます（少なくとも私たちはそう思っています）。しかしこれは法則に反しています。自然においては「取ることによって与える」という原則に従ってすべてが機能します。しかし人々は、後で取ったり受け取ったりするには、まずは自分が与えるものだと考えています。まずは自ら与えるものだと考えているという点において、人間の魂は根本的に誤っているのです。つまり、他者は自分に対して何かを負っており、それに対してその人は何かを返さなければならないという考え方です。

この誤った考え方のせいで、誰もが何かを「最初に」与え、そのお返しを期待しています。たとえ、自分ではそういう期待をしていないと思ってもです。相手から何も返って来ないの

であれば、あなたが相手に対して持っているネガティブな思考は、何かが間違っていることを明らかにします。

要約すると、私たちの自己認識に役立つものが三つあります。

1. 体は感情、機能障害、不安、そしてあらゆる種類の病気を通して示してくれます。
2. 希望のない見方に囚われた霊。変わることがなく、平穩を一切与えてくれない思考。
3. 原因と結果の基本法則。これは、「与える」ことの前に、「取る」ことが先行すると定めています。外部から身体的また精神的に必要なものを取り、それを渡す、つまり実行することによってのみ、個人は自らのニーズを満たせるのです。誰も他の人のために飲んだり、食べたり、考えたりすることはできません。

10. 潜在意識：利得と損失の天秤

患者の物語を記録していた初期には、症状に基づいて患者を分類していました。耳鳴り、めまいなど、同じ症状を持つ患者を比較したいと考えていたのです。異なる症状には異なる原因があると仮定していたからです。各グループの共通要素を見出したいと思っていました。耳鳴りの患者に共通する点は何か？ めまいの患者に共通する点は何か？ 類似点はあるのか、そしてあるとすれば、それは何なのか？ 私が特に興味を持っていたのは、複数の病気や症状を抱える患者たちでした。彼らの人生ではどのような出来事が起こり、多くの病気が重なっていったのか？

長年にわたり、私は同様の症状を持つ患者たちの人生の物語における類似点を探し続けました。2007年には、人間に関する知識を深める発見をしました。どんな物語であれ、話がネガティブなものになると（病気の物語はすべてそうです）、どれも個人的な損失という概念を中心に展開していたのです。「すべての問題、つまり人間の病気すべての出発点となる、単一の思考が存在する可能性はあるだろうか？」と、私は自問しました。

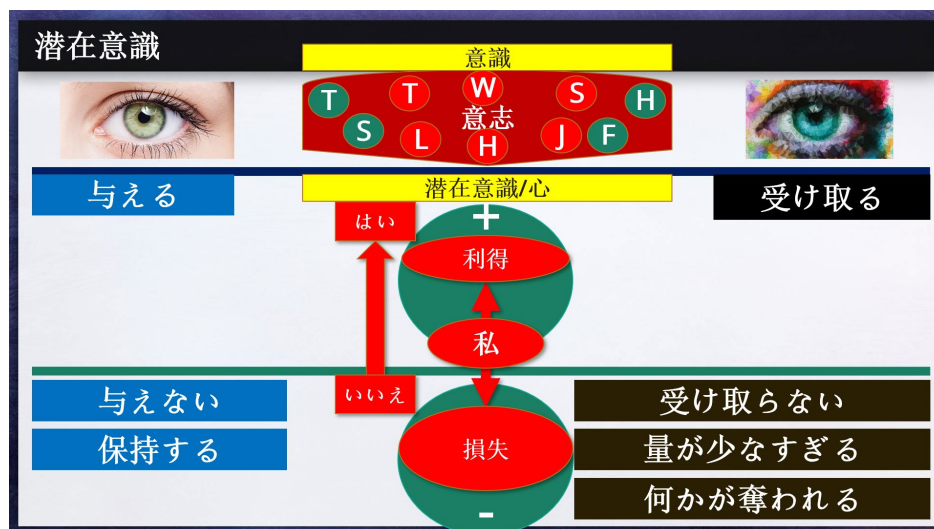
何が病気の引き金となるのかについて、完全に確信するまでには長い時間がかかりました。しかしある時点で、私たちの人生を困難にしている根本的な原因は、個人的な損失の概念だということがはっきりしました。物語の内容を問わず、それがネガティブなものであれば、個人的な損失という概念が根底にあるのです。他の原則はまだ見つけることができていません。この探求の過程で、私は潜在意識に注目するようになりました。そして潜在意識は人間の病気や問題の原因に関する答えを私に与えてくれたのです。

損失の概念をより深く理解するためには、霊の機能的中心である潜在意識を理解することが重要です。中心的な思考によって人がどのように機能するかを示すため、以下に図表をまとめました。上部には意識的な霊のレベル、その下には潜在意識的な霊があり、私はこれを「心」とも呼んでいます。意識的な霊には意志が含まれています。私たちは特定の信号や情報を知覚します。図表では、身体的なニーズは緑色で示されています。Hは空腹（hunger）、Tは喉の渇き（thirst）、Sは発汗（sweating）、Fは寒気（freezing）を表しています。人間はまずこういった身体的なニーズを意識する必要があります。その後はニーズを満たすために行動します。意

志とは「行動が必要!」と点灯する画面のようなものです。その画面を通じて、「ああ、行動の呼びかけがある」と認識するのです。

赤色で示されている精神的なニーズも知覚されます。誰もが精神的なニーズを持っていますが、その優先順位は人によって異なります。精神的なレベルでは、主となるニーズがあるので、図表では、私自身が調和を必要としているため、中央に調和を表すH (harmony) を配置しました。Jは正義 (justice)、Fは自由 (freedom)、Lは忠誠 (loyalty)、Wは知恵 (wisdom)、Sは安全 (security) を表しています。身体的なニーズの場合と同様に、精神的なニーズを満たすには、ニーズを意識する必要があります。ニーズを満たす決定はすべて、潜在意識で行われます。つまり、ニーズを意識しても、決定自体は無意識に行われるのです。

潜在意識は霊と体の接続点です。霊は体に対する供給とコントロールのため常に活動しているので、決定を行うたびに大脳皮質で電気的な衝動を引き起こします。一秒以内に数百もの決定を行うため、ほとんどの決定は無意識にのみ行われます。図表では、「S」は霊 (spirit) を表しています。



霊は入口で受け取るすべての情報を評価する必要があり、それを「利得」と「損失」という二つのカテゴリーにしか分類できません。利得とは、霊と体のニーズを満たすものです。損失はこれの反対、つまり反ニーズです。また、「ゼロライン」もあります。つまり、ポジティブであれネガティブであれ霊のニーズを満たさず、何らかの反応を引き起こさない情報です。ゼロラインは、利得または損失の量や程度を決定するため、重要な存在です。この単純な分類に従

って、私たちは「はい」か「いいえ」かの二択で、すべての決定を下します。私たちの決定は、利得に対しては「はい」、損失に対しては「いいえ」とすると、事前に定められています。損失に対する「はい」は存在しません。例えば、なぜ慈善事業に寄付するのか、あるいはしないのか、自問して確認してみてください。人間の決定はすべて、単純な「はい」または「いいえ」にさかのぼることができるのです。

空腹時に人が無意識に考えることは何でしょうか？ 食物を利益と見なすはずですが、このプロセスは意識的に行われるのでしょうか？ いいえ、そうではありません。もし誰かの前に複数の食物、例えば複数の果物が置かれていたら、その人は無意識にそれぞれの果物に関する利得と損失を計算します。その計算の後にのみ、果物は選ばれ、食べられるのです。

人間の決定は「はい」か「いいえ」の二択以外に存在しません。どの広告も、利得か損失の回避のどちらかを約束します。「ここで買ってください、当店の商品は劣悪で値段も高いです」という広告に応じる人はいません。こうなると、選択肢はありません。人は損失と見なすものすべてを避け、それに対して「いいえ」と言います。このプロセスは中断することも回避することもできません。

霊の決定プロセスでは、霊は損失を避けなければなりません。損失を避けている場合、そして損失を避けている限り、恐怖は生じません。人は赤信号でブレーキを踏み、ネガティブな感情を抱くことはありません。しかし、状況、他の人々、時間、お金などをコントロールしようとすると、少なくともそれがうまくいかない場合には、恐怖が生じます。こう考えれば、恐怖とは何かも理解できます。不安は、自分のコントロール下でないものを避けなければならないと考えるとき、常に生じるのです。利得に対する恐怖は決してなく、あるのは損失に対する恐怖だけです。

病気と人間の問題すべては、「いいえ」と答える選択肢（損失を避ける能力）を失っていると信じることから生じます。人間は構造的に、損失に対して常に「いいえ」と言い、利得に対して常に「はい」と言うように定められています。これは人間の機能の一部なのです。損失やその期待、あるいは損失に関する信念はいかなる形でも受け入れられません。個人的な損失は認められないものであり、それを信じ、経験する人を時間の経過とともに壊れさせ、病気にします。これは、各個人が損失をどれほど重大なものとして認識するかにも依存します。大きな個

人的損失は強い感情を引き起こし、時間の経過とともに重篤な病気につながります。小さな個人的損失が引き起こす感情と病気は弱いものです。個人的損失のレベルは個人によって異なります。損失の物語が同じ内容でも、その認識と経験の深刻さは、大いに異なる可能性があります。強度は主観的で個人的ですが、決定が行われるメカニズムは誰にとっても同じです。

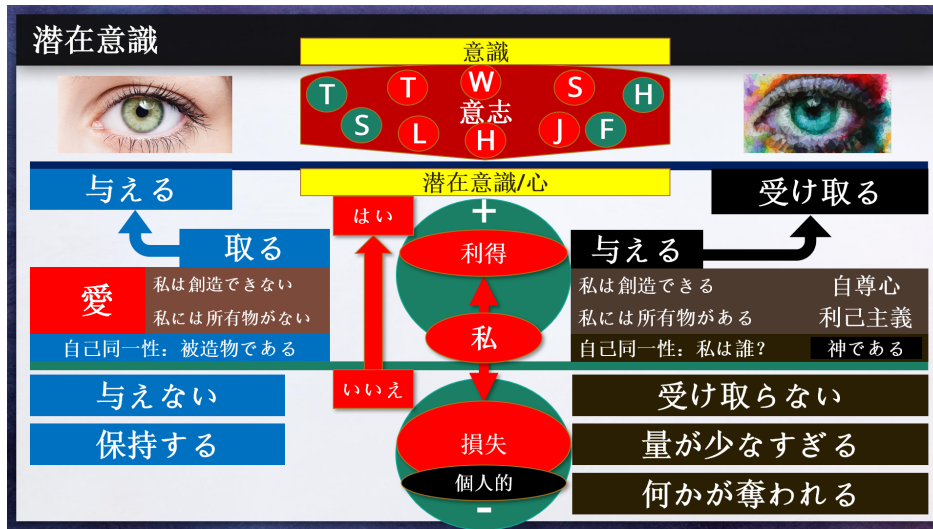
私たちは、勝ちと負けに関して記録された印象や情報を数千分の一秒で計算します。例えば、これは決定を下さなければならないプレイヤーの脳波で測定されました。すべての情報と認識は勝ちと負けに分類されます¹⁰。「個人的な損失を回避できない」と単に信じることで、人は様々な問題に直面するのです。

「他者によって個人的な損失が引き起こされる」という信念から、人間の問題すべてが発生すると理解したとき、私はこの考えの起源を探し求めました。そしてそれは、霊の視点の中に見つかりました。霊の視点は二つの目で表せます。何かを利得または損失として分類する前に、一種のフィルターがあります。それが霊の視点です。これは図表の上隅にある二つの目で表しています。霊には（精神的な）目があり、この目を通じてすべてをみます。物事を見る方法は二つしかなく、それに応じて評価します。

図表の右側の目で、霊は何かを得ることに利得を見出します。何かを得ることが利得であると見なされたら、損失はその反対、つまり何かを得ない、十分に得ない、あるいは何かを奪われることを意味するはずでありません。反対に、図表の左側の目で、霊は与えることに利得を見出します。つまり、その反対である、与えないことや保持することが損失となります。

この時点で、宇宙の基本法則を思い出すべきでしょう。「取ることによって与える」という包括的な原則について検討しました。この原則はありとあらゆる要素に適用されます。すべてがチャネルの作用に従って機能するからです。保持は、この普遍的な原則とは一致しません（肺は酸素を保持しないなど）。この法則は、取り入れたものを保持することを許可しないのです。

¹⁰ 原文引用元：Fehr, T., Herrmann, M., Meyer, G., Miedl, S., (2010). Neurobiological correlates of problem gambling in a quasi-realistic blackjack scenario as revealed by MRI. *Psychiatry Research: Neuroimaging*. 181, 165-173



私たちは、どちらの目で物事のありのままの様子を見て、どちらの目で自らを欺くのでしょうか？ どちらの目が「いいえ」という決定をせざるをえない場所に置くのでしょうか？ 左側の目は、いかなる状況でも常に「いいえ」を実行する能力を人々に与えてくれます。利得と損失は、私が取るまたは控える行動の中だけにあるのです。取る、与える、保持する、というのは常に私自身の行動です。

しかし、右側のカメレオンのような目は偽りの視点を生み出します。この目は、利得は「取ることに依存し、損失は「取らないこと」によって生じるものだ」と示唆しているのです。つまり、この目は「他者の正しいとされるまたは間違っているとされる行動」、また「他者が取っていない行動」に常に注目していることを意味します。焦点は自分自身の行動ではなく、「他者」の行動にあるのです。この視点では、自分の精神的なニーズを満たすために、他者に完全に依存することになります。

興味深いものの恐ろしいのは、自らの精神的なニーズを満たすために、誰もが常に他者に没頭しているという点です。カウンセリングにやって来る配偶者たちは、たいていある人物のことだけを話しますが、それは誰でしょうか？ 焦点は完全にパートナーにあります。パートナーの間違った行動について話すのです。

誰かが他者をコントロールしたいと思う状況は、その他者が自分に対する損失を引き起こさないようにしたいという意図からのみ生じます。これがすべてのコントロールと監視のメカニズムの起源なのです。

物事の見方には二つしかありません。一つは、「はい」と「いいえ」に関する決定を自らコントロールしている場合です。他の誰も自分のために考えることはできないため、「はい」と「いいえ」が自分に属していることは明らかです。

もう一つは、「他者は自分が回避できないような損失を引き起こせる」という反対の考え方です。利得のある状態で、ニーズを満たすものを得ている限り、その人は快適に感じ、問題はありません。しかし、35年の後に配偶者の浮気が明るみに出て、これまでの利得が突然、「得られない」または「奪われる」ということになると、この状況はその後の人生において重荷となります。なぜなら、ここで主流となるのは「他者が私に対して損失を引き起こした」という考え方だからです。

このシステムには、天秤を左右する決定的な要因があります。それは「個人的な損失として捉えるかどうか」という点です。個人的な関係の外でネガティブな出来事が起きたとしましょう。例えば子供の死や虐待などです。それは確かに損失であり、不正であり、悪いことです。この出来事がその人の心に永続的な影響を与えるかどうかは、それが個人的または非個人的な損失として評価されるかどうかに応じて決定されます。症例5では、頭痛を訴えた若い女性が彼氏の浮気に怒っていましたが、彼女は間違いなく彼の行動を個人的に受け止めています。彼女は「彼は私に対してあんなことをした」と考えています。しかし、彼女に対して取った行動ではないと思っていたら、彼女の問題は解決されるでしょう。

確かに、彼は間違ったことをしました。しかし、彼は本当に彼女に対して何かをしたのでしょうか？ 彼女は本当に彼の忠誠心に対して拘束力を持っていたのでしょうか？ 他者に対するこの権利はどこから来るのでしょうか？

その答えを求めらる中で、私は人間の心の最も深い部分——自己同一性に遭遇しました。「自分は誰なのか」という問いについて、人は何を考えるのでしょうか？

11. 創造主か被造物か：人間の真の自己同一性

私の患者たちが両親、パートナー、子供、兄弟姉妹、友人などに対して持つ要求はすべて、他者よりも自分が高い位置にあるという態度を示しています。つまり、どの要求も「他者には自分のニーズを満たす義務がある」という前提から生じているのです。この考え方により、他者は自動的に、自分のニーズを満たすために存在しなくてはならない従属者となります。私は、人間のよく知られた動機——つまり利己主義と自尊心——に基づいて、この優越性への要求がどこから来るのかを探究してきました。

利己主義の背後には「私には所有物がある」という確信があります。これは「何かが私個人に属している」という意味です。一方、自尊心は「私は創造できる」という態度から生じます。つまり、「私は自分自身の内部から何かを創り出し、それを伝えることができる」という考えです。このような態度により、人々は常に最初に与え、その見返りとして何かを得たいと願うのです。たとえ意識的には何の見返りも望まずにそうしていると思っていたとしても、例えば単純な「ありがとう」の言葉をもらえないというだけで怒るなど、自己欺瞞としてそれは表面化します。

何もかもが個人的な損失を中心に回っており、この思考が人の体を破壊するため、私は「人間は本当に個人的な所有物を持つことができるのだろうか」と自問しました。私は多くの人々と最悪の経験について話し合ってきました。子供を亡くした人や、子供が虐待された人もいます。こういった出来事から何年も経っているにもかかわらず、親たちはまだ苦しみ、傷を抱えたままです——そして身体的な病気の強度はさらに増しているのです。

前述のように、自己認識の助けとなるものとして、私たちには体という鏡があります。体を破壊するもの、つまり病気にするものが正しいはずはありません。これは精神的なレベルでも同様で、霊がそれを正しいと信じていてもです。したがって、個人的な損失という概念は、体を破壊し霊を閉じ込めるがゆえに、間違った原則と見なさなければなりません。では、この深刻な、すべてを破壊する思考の誤りはどこから来るのでしょうか？

霊はありとあらゆる出来事を評価しなければなりません。もし霊が子供を自分の所有物と評価し、その子が（おそらく不自然な出来事を通じて）死んでしまった場合、霊はこの取り返しの

つかない大きな個人的な損失という思考によって体を破壊してしまいます。なぜなら、霊には個人的な損失を受け入れる能力がないからです。人間の霊は失うことができない、つまり人間には個人的な損失に対して単純に「はい」と言う能力がないのです。

ここで疑問が生じます。何かを所有するという主張は正当化できるのでしょうか？ なぜ人間は、そう考えていたとしても、所有物を持つことができないのでしょうか？ 答えは単純です。人間には何も創造できないからです。何かを本当に所有物とするには、それを創造しなくてはなりません。しかし、人間を含め、すべてがチャネルとして機能するため、人間には何も創造できないのです。人間は物事を始めることができます。何かを組み立て、分解する能力を持っています。想像力を使って美しいものをまとめたり、絵を描いたりする能力があります。しかし、これは創造とは同じではありません。なぜなら、人間の努力の結果はすべて、すでにそこにあるものから生じ、すでに存在するものが展開されるだけだからです。子供も両親を「通して」生まれますが、両親「から」生まれるわけではありません。しかし、人間は誤って、物事——さらには命——を創造できると考え、子供は自分「から」来ると思い込んでいるのです。

したがって、体の病気と閉じ込められた霊は共に、「何かが自分に属している」と考える人間が間違っていることを証明しています。自然の基本法則もまた、何もそれ自体には属していないことを示しています。「私は自分自身に属し、自分の体と命は自分という個人に属するものである」という人間の主張は自己欺瞞から来ているものであり、私たちはこの自己欺瞞を明らかにしなくてはなりません。

霊の誤った動機から生じる二つ目の考えは、「自分自身で何かを生産できる」というものです。人間は、どのニーズを実際に自分自身で生産できているのでしょうか？ もう一度、人間の基本的なニーズを見てみましょう。酸素は、私たちが環境に依存していることを明らかに示しています。「取ることによって与える」という原則に従って、人間は必要な酸素を空気から得なければなりません。水についても同様です。水源がなければ、人はすぐに死んでしまいます。人間は食物を生産することはできず、自然から取ってきた後でのみ、それを調理できるのです。

愛という基本的なニーズを、このように否定することはできません。人間の生活のすべては愛を中心に回っています。だからこそ「愛はどこから来るのか」を問うことが重要なのです。

「もし愛が霊のニーズであるなら、それは情報の問題でしかありえない」という点を明確にしておくべきでしょう。愛、正義、自由、安全などの精神的なニーズは精神的な情報です。これは電磁波という意味でのエネルギーではなく、純粹に言葉や画像で表現される精神的な情報なのです。測定可能なエネルギーでも知覚可能なエネルギーでもありません。霊によって処理されたときにのみ、霊の決定によって大脳皮質で特定の電気的な衝動（エネルギー）に変換され、体内で物理的に測定できるようになります。

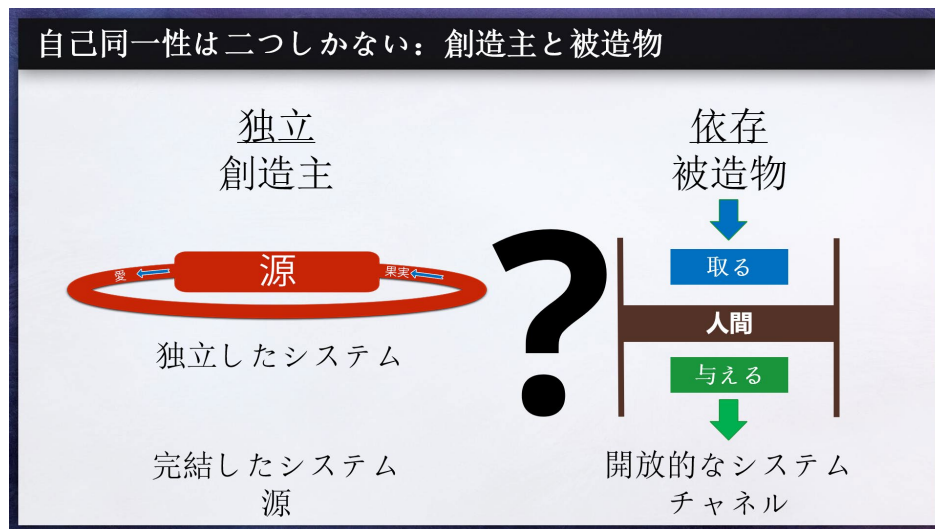
人間は愛を、つまり人間が緊急に必要とする精神的な情報を、自ら生産することができるのでしょうか？ 人間は情報の生産者なのか、それとも利用者なのでしょうか？ 物理的なレベルでは、手段が創造されるのではなく実施されるだけだということに疑いはありません。精神的なレベルでも同様の認識が必要です。つまり、私たちは、体が化学物質を変換するのと同じように、霊においては情報を変換しているのです。メディアがこれほど力強く発展してきたのは、霊が情報を求めて渴望しているからだということは明らかです。非常に幼い頃から、子供は画面の前に座って魅了され、情報を吸収しています。最近では、子供に静かにしてもらいたい親は、携帯電話やその他の画面を使ってその目的をたくみに果たすことができます。子供たちは驚くほど長い間、食べ物さえも我慢できるのです。

霊に宿る誤りのために、人々は、愛を含め、情報を自分で実際に生み出せると考えています。私の患者はほぼ全員、自分自身で愛を生み出せるかという質問に「はい」と答えます。もしそうなら、愛は基本的なニーズではないはずですが。そうすると、誰もが自分の中に愛を生産し、その愛によって生きているということになります。しかし、誰もが愛を求め、何よりも他者から愛されたいと望むという事実は、自分自身の中には愛がないことを示しています。法則によれば、愛はまず吸収され、処理され、伝えられなければなりません。チャンネルでは基本要素の生産はなく、伝達が行われるだけです。チャンネルは、以前に吸収し処理した何かを伝えるだけなのです。人間は新しいものを何も創造することはできません。家や飛行機を作るときでさえ、私たちは新しいものを創造しているのではなく、既存の材料を使って組み立てているだけだという点を理解すべきです。私たちの霊は並外れた能力を数多く備えていますが、無から基本的な要素を創造することは、一つもできないのです。

人間の（誤った）確信、つまり何かを所有したり創造したりできるという確信は、どこかに起源があるはずで、この出発点は、人間の自己同一性です。「私は誰なのか？」という問いこそが、ありとあらゆる情報を処理するために心が使っている問いなのです。

私たちの世界で根本的に可能な自己同一性は二つしかありません。人間は被造物、つまりチャネルであるか、あるいは創造主、つまり源となる神であるかのどちらかです。では、人間の霊は自分が誰だと信じているのでしょうか？ 「私は被造物だ」と信じているか、あるいは「私は創造主だ」、つまり神だと信じているかのどちらかです。

創造主とは、それ自体で存在するシステムです。創造主には二ーズがありません。創造主は源だからです。創造主はありとあらゆるものの原因であり、起源です。起源には原因がありません。さもなければ、それも結果となってしまふからです。この起源は自己完結しており、吸収を必要としません——創造主には二ーズがないのです。創造主は自らの創造物に関して、すべてを自発的に養い、供給します。



対照的に、被造物は本質的に、常にチャネルとして構築されています。被造物は、与える前にまずは取らなくてはならないのです。これは、すべての被造物が例外なく開放的なシステムとして構築され、絶対的に依存していることを意味します。では、人間はどちら側に当てはまるのでしょうか？ 人間がチャネルとして機能し、被造物であることに疑いはありません。これは、物理的なレベルでは誰にでもすぐに受け入れられますが、精神的なレベルでは人間は自らの誤りに気づかないのです。

人間の霊は「自分は神である」と誤って考えています。しかし、私がこの話をすると、患者は皆、「先生、今までそんなふう考えたことはありません！」とすぐに言います。意識的な思考に関しては本当にそうかもしれません。しかし私が診療所で診ているのは、実際には「神」だと思っている患者だけだという認識に至りました。患者を苦しませ、その結果として病気に導いているのは、いつも患者の他者に対する要求です。こういった要求がなければ、霊は自由となり、体も病気から自由になるはずですが。

患者が内心では自分を神だと考えているということを患者に対して証明するのが、医師として私が直面している課題です。これが無意識にしか起こらない、あるいは認識されていないとしても、人々が抱える問題はすべて、他者よりも自分を高めることから生じているのです。

人間が「私は神だ」と考えていることを示す明確な証拠があります。人間の内面的な態度は、外側に行動として表れるものです。まず、他者に対する権力の行使があります。人間はすでに子宮の中で、他者に対して権力を行使し始めます。そして次の権力闘争は生まれてから始まります。強いのは母親か、子供か。権力の行使は、自分が他者よりも高い存在であるという考えから生じます。もし自分が他者と同じ階級にいるとしたら、権力を求めようとは思わないでしょう。もし他者が自分に何の利益ももたらさない、あるいは自分の損失を減らすことができないなら、他者に対して権力を行使する必要はないのです。

一部の学生が監獄の囚人の役割を与えられ、他のテスト被験者が看守として囚人に対する完全な権力を与えられた、有名な実験について聞いたことがあるかもしれません。短時間のうちに、ごく普通の人たちが獣のようになりました。看守が理由もなく囚人を拷問し、苦しめ始めたため、数日後、テストは予定より早く中止せざるをえなくなりました¹¹。権力を与えられた人は誰でも行動を変え、遅かれ早かれ権力を乱用し、それを手放したくなくなるのです。与えられた権力を適切に扱えるのは、誤った自己同一性の考えから解放された人だけです。

他者に対するコントロールの行使は、あなたの内なる態度を明らかにします。他者にコントロールされるのを好む人はいません。それでも、多くの人々は——様々な方法で——他者に対するコントロールを求めます。ある人は妻の車にカメラを設置し、彼女が浮気をしていないこと

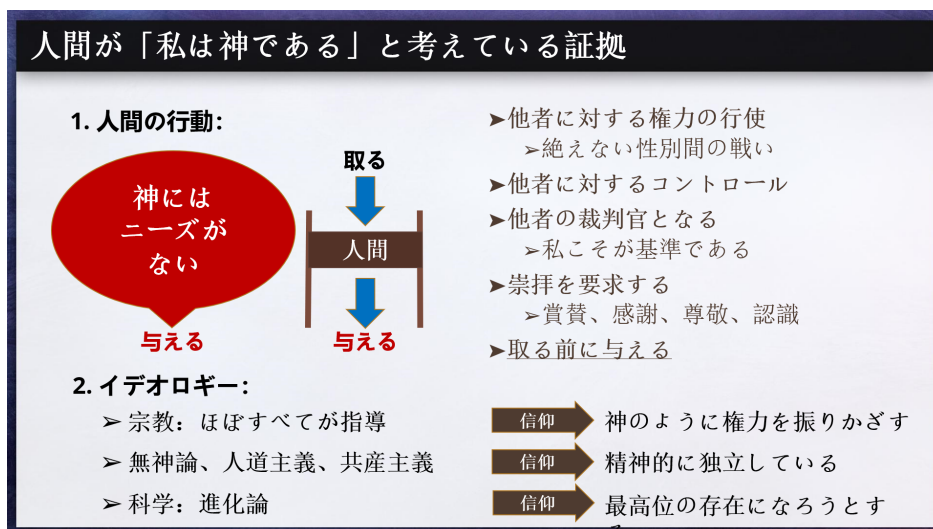
¹¹ 原文引用元：Banks, C. W., Haney, C., Jaffe, D., Zimbardo, P. (1971): The Stanford Prison Experiment: A Simulation Study of the Psychology of Imprisonment. Conducted August 1971 at Stanford University

を確認します。他の人はパートナーや子供の携帯電話をチェックします。もちろん、誰もが良い結果を望んでいますが、それは自分にとっての良い結果なのです。

人はまた、自分自身を裁判官として位置づけ、他者の行動について判断を下すことを好みます。しかし、その判断の基準は誰のものなのでしょう？ もちろん自分のものです。

人は様々な形で崇拝を要求します。自分には相手から賞賛、感謝、尊敬、または認識を受ける権利があるのだと信じています。だからこそ、それを期待し、要求するのです。

ある患者は、レストランで盛大なパーティーを開きました。家に帰り、すでに支払った請求書を確認したところ、店主が200マルク（ドイツマルク）ほど少なく請求していたことに気づきました。患者は公正でありたいと思い、翌日、残りのお金を店主に持っていきました。患者が店主と会い、残りのお金を払ったとき、患者と彼の妻はジュースを一杯飲みました。患者は自発的に店主に200マルクを返したため、ジュースに対して支払う必要はないと思っていました。しかし、店主が5.80マルクを要求したとき、患者は怒り、次の15年間この店に戻ることはありませんでした。なぜ私の患者は追加でお金を払ったのでしょうか？ 彼はそれを「無償で」したのでしょうか？ なぜ彼は自分の善行に対して報酬を求めたのでしょうか？ もし彼が神でなければ、店主は彼の正直さに対して何も返す義務は負っていないはずですが、そうではありませんか？



人間が自分を神だと考えているということを最も明確に示す証拠は、人が建前上は「取る前に与えている」場合です。神には二一ズがなく、与えるだけです。人間はチャネルであり、常に与える前に取らなければなりません。もし人間とは逆の行動を取るとしたら、その人は神のはずです。さもなければ、このように行動しないでしょう。

私たちの危険で根本的な誤りを明らかにするアプローチがもう一つあります。それは多くの本に書かれている様々なイデオロギーに見られます。宗教はその一例です。主流の宗教はすべて、人々が権力や強制力を行使すると神になれるような信仰を教えています。人々に抑圧を与え、何をすべきか、何をすべきではないかを命じるシステムは、この誤った考えに基づいているのです¹²。

無神論者、人道主義者、共産主義者の世界観も存在します。これらの哲学すべてには、大きな共通点があります。「人間は精神的に独立している」という信念です。その結果、人は自分自身の愛と精神的な二一ズを生産することを意味します。この誤りは、妻や子供が死んでしまい、人々がより所を無くしてしまったような困難なときに明らかになります。このような状況は、人は精神的に独立しているわけではないということを示すのです。こういったイデオロギーは神の視点から来ています——しかし、こういったイデオロギーを信じる人たちが神だったとしたら、その人たちは精神的に独立しているはずです。

多くの科学も進化論という深い誤りに基づいています。それは、十分な時間と材料さえあれば、より低い存在からより高い存在が生じ得るという科学の信念の基礎となっています。この思考システムにおける最高の存在としての人間は、必然的に神だということになります。

具体的な点から離れてみると、ありとあらゆるイデオロギー、宗教、また世界観に共通する偽りの根があります。究極的には、これらはすべて一本の木の枝にすぎません。その根とは、「私は神である」という人間の内なる確信です。人はまさにその確信通りに行動し、各自が他者よりも優れている、より巧みである、またはより賢いと考えています。誰もが互いに競争し

¹² 対照的に、帰結と抑圧を同一視すべきではありません。帰結は、人に対して変化を強制するのではなく、人の限界と自らの行動の帰結を示す(だけ)だからです。

ています。人は他の人たちを判断し、コントロールし抑圧したいと思い、暴力、戦争、殺人に至ることさえあります。

宗教内部においても、そしてキリスト教においても、状況が優れているわけではありません。誰もが自分自身を神と考え、それに応じて行動しています。あなたは自分を隣人よりも高く見ているでしょう。その結果は、宗教を信じない人たちにとっても同じくらい悪いものです。純粹に宗教的な問題をめぐって多くの戦争が戦われてきました。

前述の人間の行動やイデオロギーは、人が自分を単なる被造物以上の存在と考えていることを証明しています。もし人が自分自身についての真実——理性と目に見える事実が否定できないこと——を理解していたら、傲慢、独裁的な態度、競争、力比べ、抑圧、暴力は起こらないでしょう。

人間の基本的な問題に対する唯一の解決策は、正しい自己同一性を認識することです。そうすれば、常に団結と平和につながるでしょう。もし人間が「私は被造物だ」と理解したら、全員に居場所ができるでしょう。国籍、異なる能力、肌の色、サイズの違い、服装、趣味、様々な役割が原因となり、緊張、比較、または衝突を引き起こすことはないでしょう。誰もが隣人と同じ立場にいるとわかるでしょう。誰も、自分をもっと知っている、またはもっと良くできると主張することはないでしょう。常に互いに競争することもないでしょう。互いに比べ合う必要があるのは神々だけです。被造物の間に権力闘争はなく、誰も他者を判断する必要はないでしょう。コントロールの必要性もありません。暴力、殺人、戦争もないでしょう。したがって、すべての問題の解決策は、「私は本当は誰なのか」について正しく理解することです。

もし私が「私は被造物だ」という自己同一性の中で生きるとしたら、私は法則に従います。被造物として、私は何も生産できず、所有物がないことを知っています。私は与える前に、まず何かを取らなければなりません。これは身体的なニーズと同様に、愛（精神的なニーズの総体）にも当てはまります。もし私が自分のために何も保持せず、それを伝えたら、私は常に利益を得ます。私の利益は与えることによって得られるからです。隣人に対して愛に満ちた思考を持つと、私たちは満たされ、良い気分になるのです！

だからこそ、自己認識が極めて重要となります。私たちは皆、生まれつきの嘘により、自分自身について自らを欺いています。この嘘は、偽の自己同一性によって構成されています。私たちが信じている自分は、本性とは異なる、決してなれない誰かです。これは受胎時に始まり、死ぬまで続きます。否定的なことすべての起源は、自己欺瞞と、一方を他方よりも高めようとする態度にあります。私たちがこの嘘を持って生まれることは事実であり、それは避けられません。しかし、誤りに気づいたらすぐに、それを取り除くための解決策を探すべきです。なぜなら、それを保持し続けると、この誤りは否応なく私たちを破壊するからです。

したがって、人間の問題は外側ではなく、内側にあります。こういう理由では、私たちは自分たちの外に解決策を見つけられないのです。法律、国家、また教会の規則では問題を解決できません。誰もが一人の個人であるため、解決できるのは内側の問題だけです。しかし、自分の内側に問題があるということを認識するのが困難な点です。自分が間違っていて、自分の外に問題を探している限り、解決策は決して見つからないでしょう。

12. 損失を被るのは誰か？

個人的な損失を被ったという思考は、残りの人生を決定する可能性があります。ここでは、特に難しい症例でこの点を説明していきます。

症例9：私は国外で、ある20代前半の若い女性を診察しました。彼女は5年間うつ病に苦しみ、繰り返し自殺の考えを抱えていました。一般的に、自殺の考えは「私は神である」という誤った自己同一性から生じるものです。この女性に何が起こったのでしょうか？ 5年前、幼稚園時代の友人が彼女に連絡してきました。当時の彼女はまだ少女の年頃でした。友人の男は彼女を街のカフェに誘い、彼女の両親にも許可を求めました。男は車で彼女を迎えに来ましたが、その車には他にも3人の男がいたので、彼らは途中で車を止め、彼女をレイプし、殺しかけました。死の恐怖の中、彼女は何とか逃げ出して隣の村で助けを求めましたが、助けに応じてくれたと思った別の男も、彼女を車に乗せるとすぐに再び彼女をレイプし、もう死んでしまうのではないかとこのほど彼女を殴りました。

この少女は短時間で二つの恐ろしい出来事を経験しました。男たちの行為は間違っていたのでしょうか？ もちろん、100%間違っています。しかし、彼女が5年経った今も精神的に苦しんでいる理由は何でしょうか？ その出来事が理由なのか、それともその出来事への対応が問題なののでしょうか？

避けられないトラウマが私たちの人生を困難にするのでしょうか？ それとも、そのトラウマについて考えることが問題なののでしょうか？ 驚くべきことに、レイプ被害者の多くは外部からは理解し難い考え方を持っています。この若い女性は、彼女に起きたひどい出来事について自責の念を感じていました。「あなたはレイプされるために車に乗ったわけではない」と私が言うと、彼女は「いいえ、私には防げたはずなんです！」と反論しました。彼女の後悔、そして「防げたはずだ」という考えは、「私は神である」または「私は前もって何が起こるか知っている」という考えから来ています。しかし実際には、誰も将来何が起こるかを知ることはで

きません。それでも彼女は、自分が何か間違ったことをして、そのためにレイプされたのだと強く確信していたのです。

このケースは人間の恐ろしく、誤った思考過程を示しています。患者が「自分は正しい」と深く確信しているとき、誤りを示すのは困難です。それでも幸いなことに、誤りを明らかにする良い方法があります。そこで私は彼女に、「自分を責める思いは、あなたに対してどのような影響を与えていますか？」と尋ねました。「こう考えても、何も良いことはありません」と答えました。

この点で、彼女は確かに正しかったのです。自分自身でも、罪悪感の思いが浮かんだときにどう感じるか確かめてみてください。体は即座に反応し、「この思考は不自由であり、真実ではない」という、明確な信号を送ります。これは、彼女が出来事を誤って処理していたという最初の証拠でした。二つ目の証拠は彼女のうつ病、つまり体のプロセスの混乱です。彼女の苦しみは、彼女の評価——つまり彼女の思考——が間違っており、真実ではありえないことを証明していました。

被害者は犯罪に対する責任がありません。しかし、その行為を自分自身に反対するために使い、その結果として自らを破壊するような状況を避けるため、全力を尽くすべきです。そのためには、自分の問題に対する解決策を見つける必要があります。

症例10：ある高齢の患者は、2年間近く激しい咳に悩まされていました。この咳は吸入療法でも薬でも治まらず、待合室からその咳が聞こえてくるほどでした。さらに、彼女は20年間腹部のがんを患っており、それが膀胱失禁を引き起こして10年間続いていた。患者は30分ごとに膀胱を空にしなければならず、咳と失禁の組み合わせは非常に苦痛で、何回か手術を受けても解決しませんでした。

患者の話は次のようなものでした。彼女の母親は彼女を褒めたことが一度もなかったのです。幼少期から青年期にかけて、母親は彼女を利用するだけで、兄弟たちを優先していました。母親は20年前に亡くなっており、そのため患者にはこの欠如を補う方法がもはやありませんでした。ほぼ80歳になった今でも、彼女は母親が自分を褒めな

かったことに深く苦しんでいました。彼女は事実上、母親を債務者のリストに載せていたのです。

彼女の状態が良くなるには何が必要でしょうか？ 「母親には自分を褒める義務がある」という思考の誤りを認識する必要があるでしょう。一見するとこれは厳しく思えるかもしれませんが、もし母親が彼女を褒める「必要がある」とするなら、彼女は子供以上の存在——つまり神——でなければならないはずです。人間の機能と自然の法則についてのカウンセリング中、私は彼女に、「健康になるには、母親を愛することで、彼女を罪の意識から解放する必要があります。母は自分を利用しただけなのだ、という思いはストレスになり、それはあなたの体がはっきりと示しています」と説明しました。

この患者は信仰深い女性だったので、母親を愛せるよう、また母親に対する見方を変えられるよう、神に助けを求めることを彼女に勧めました。3週間後、患者は診療所に戻ってきましたが、待合室に長く座っていても、もう咳は聞こえませんでした。彼女は診察室に入ると、喜びにあふれた様子で、「前回お会いしてから咳は止まり、膀胱も完璧に機能するようになりました」と言いました。夕べの祈りの中で母親への愛の願いを神に表現した結果、症状が回復したのです。

私たちの霊は、体で起こることに対して責任を負っています。霊は、他者が自分にとって絶対的に必要なものを与える義務があると考えるがゆえに、体に問題を引き起こすのです。

症例11：ある60歳前後の女性患者は、進行したがんを患っていました。彼女の人生は決して平坦ではありませんでした。3歳のとき、母親に見捨てられて養子に出され、13歳のときには友人の兄にレイプされました。その後、そうとは知らずに小児性愛者の男性と結婚し、夫は子供たちを虐待していました。このことを知った彼女は離婚しましたが、受けた傷は彼女の心の中で個人的な損失として残り続けました。離婚から8年が経過した後、彼女は病気になりました。

この女性の立場になってみましょう。彼女は幾度となく不当な扱いを受けてきました。それは幼少期から始まっていた。彼女を傷つけた人々はその罪を償うことができるでしょうか？いいえ。彼女が経験した不正は取り返しがつかないものです。しかし、彼女の正義感はそのことを求めています。彼女は正義への欲求を抑えることができません。そのため、正義感を満たすことができないという理由で、彼女は自分自身を破壊してしまうのです。

思考の内容が何であれ、すべての思考は自分自身についての真実か嘘のどちらかから生じます。その間には何もなく、中立的な領域すらありません。常に、自分自身についての一つの嘘だけが本当の問題なのです。これらすべては潜在意識の中で急速に連続して起こるため、私たちは損失の出来事についてどう考えるかを、意識的に問い直す必要があります。

そこで、「私は神である」と「私は被造物である」という二つの同一性の間の根本的な違いを検討してみましょう。

依存性： もし私が神なら、私は精神的に「独立」しています。私は、自分が必要とする情報の生産者だからです。

もし私が被造物なら、私の魂はチャンネルであり、私は創造主に対して自動で精神的に「依存」しています。

所有権： もし私が神なら、「すべて」が私に属しています。

被造物なら、「何も」私に属することはありません。

自律性： もし私が神なら、私はすべてを自らの力で行います。




被造物としては、一人では何もできません。私は以前に取ったものを与えるだけです。

基準点： もし私が神なら、「すべて」が私を中心に回っています。

もし私が被造物なら、「何も」私を中心に回っていません。

この思考プロセスの最後にあるのは、常に利得または損失の分類だけです。しかし、個人的な損失は受け入れられないものです。したがって、個人的な損失は本当に存在するのか、それとも幻想なのかという疑問が残ります。損失について考える人の体への破壊的な影響、霊の絶望感、そして自然の法則に基づいて、妄想としての個人的な損失の概念を明らかにし、理解する必要があります。

不当な扱いを受けたのは誰？

真理	自己同一性	嘘
 被造物		 私は神である
<ul style="list-style-type: none">▶精神的に依存▶何も私のものではない▶私だけでは何もできない▶何も私を中心に回っていない <p>損失を被るのは 創造主 私には被害は ない</p>	<p>配偶者の損失 友人の損失 両親の損失 子供の損失 性的な暴力による損失 ありとあらゆる損失</p> <p>誰が損失を被る？</p>	<ul style="list-style-type: none">▶精神的に依存していない▶すべては私のもの▶私だけですべてできる▶すべてが私を中心に回っている <p>私が損失を被る 損失は個人的 私は被害者</p>

被造物の視点から経験した不正義を処理できないでいる人は、一生その状態に囚われたままとなり、病気と身体的な痛みに苦しむこととなります。40年、50年、60年経った後も——つまり生涯——幼少期に何か悪いことが起きたために苦しんでいる人たちと、私は話をしてきました。選択肢はありません。私たちは経験することすべてを計算し、評価しなければならないのです。その経験について考える必要があります、その後の思考を避けたり、隠したり、省略したりすることはできません。しかし、どの視点から考えるかを知っていれば、思考の自由があります。被造物の視点——つまり私たち自身についての真実——を採用する人は、誰でも自由になり、病気の重症度に応じては健康を取り戻すことができるのです。

13. 自然の観察：病気における細菌の役割

私はしばしば患者の耳の感染症を診察します。炎症を起こした耳の多くでは、ある細菌がよく見つかります。この細菌は、鼓膜や耳道に肉芽腫（皮膚のないいわゆる「野生の」肉）が成長することで増殖します。必要な栄養素がある限り、細菌は増殖してその産物を生成できます。

さて、治療はどこに施すべきでしょうか？ 細菌と戦うべきか、それとも炎症に取り組むべきでしょうか？ 医学では両方のアプローチがあります。抗生物質は通常、両方を同時に減らすためにコルチコステロイドと組み合わせられます。しかし、炎症の原因が取り除かれなければ、これらの薬は一時的にしか、時にはまったく効かない場合もあります。

私は大多数の症例において、このしくみを観察できました。

症例12：ある60歳の患者が右鼓膜に重度の炎症を起こし、治療を受けに来ました。私は炎症のプロセスを止めるために通常の薬を使用しました。しかし、炎症は治療中に悪化し、良くなりませんでした。そこで私はこの男性の生活状況について話をしました。彼はあと3週間経たねば裁判で審理されない、重大な紛争に巻き込まれていました。法廷審問が終わるまで、何も彼の助けにはなりません。その後、炎症は施された治療の下で消え、細菌は増殖しなくなりました（細菌は殺すことはできず、減らすことしかできません。常に不活性な形で存在し続けます）。患者を健康にしたのは、治療だったのでしょうか、それとも思考の変化だったのでしょうか？

細菌が何かを生成できるのは、食物を得られる場合のみです——そして体がこの食物を与えなければなりません。したがって、細菌もまた炎症の結果であり、その原因ではありません。細菌感染はそれが生成する毒素によっても害を引き起こす可能性があります。常に二次的なものとしてであり、原因ではありません。

その結果、病理学的な細菌の成長は常に、細菌と真菌の両方の場合において、体内の炎症が先行します。したがって、細菌が生成する毒素が体に有害な場合には、抗生物質を使用できます。しかし、これは炎症を治癒するものではありません。原因と戦ってははいないからです。私

は患者に病気がどこから来ているかを説明する必要があります。炎症が消えるとすぐに、細菌の活動も消えます。

細菌は、体が居場所と栄養を与えた場合にのみ成長できます。細菌はいつでも活性化する可能性があります。細菌に対していつ食物を与えるのか、いつ与えないのかを決定するのは、宿主だけです。これが、ウイルスが体によって生成され、炎症因子として使用される唯一の方法なのです。

症例13：体の右側だけに帯状疱疹が発生した、約60歳の患者が診療所を訪れました。帯状疱疹では、神経に沿って皮膚に水疱が形成されます。水疱が現れる前に、約3日間何も見えないまま痛みがあります。水疱が現れると、それはウイルスだと言われます。しかし、このウイルスはどこから来るのでしょうか？何がそれを生み出すのでしょうか？なぜ体のこの部分だけに現れるのでしょうか？誰がこの局在性をコントロールしているのでしょうか？

私はこの患者に対し、体の二つの側面、相互に接続された脳半球、そして父親と母親からの遺伝について話しました。人間関係に不満と葛藤がある場合、病気も現れてきます。患者の人たちに、病気は彼らの思考から来ていると説明すると、なかなか理解してもらえないことがよくあります。ちなみに、ストレスも従来の医学では帯状疱疹の引き金として知られています。私は診察の経験から、体の利き手側は、母親またはパートナーとの人間関係の影響を受ける側であることを知っています。そこで私は、先ほどの患者に対し、彼女の病気は脳の左側での思考によって引き起こされ、それは何かネガティブなものであったに違いないと彼女に説明しました。何か彼女が同意しない、個人的な損失があったに違いありません。それが体に害を与えたのでしよう。体は嘘をつけません。

彼女は、ちょうど終わったばかりの休暇について話してくれました。すべてが順調で、口論はなかったと言いました。彼女の母親は5年前に亡くなったそうです。母親が亡くなった日について尋ねたところ、それは彼女の休暇と一致しており、最初の水疱はその翌日に現れました。その後、患者は休暇中に母親を思い出し、彼女を悼んでいたと述べました。

悲嘆は、痛みを伴う、危険な思考です。それが病気につながるからです。悲嘆は、あなたがまだ他の人から何かを望んでいることを証明します。しかし、この人は死んでおり、もういません。故人について考える際、その死が自分にとっての大きな損失だと見なさなければ、あなたの体は心の命令に従ってウイルスを生み出すことはないでしょう。しかし実際には誰もが、自分の母親やその他の人がいないということで、自分自身を哀れに思います。このような考え方は、人々が出来事を適切に処理することを妨げ、病気につながります。微生物の存在は、実際の原因である間違っただ思考には関係ありません。治療においては微生物は確かに役割を果たしますが、原因の除去には役立ちません。

自然には、変えられない基本的な関係があります。これによれば、マクロ生物は常にミクロ生物を支配します。これは例外なく真実です。しかし、それとは反対のことが語られ、教えられています。したがって、いわゆる専門家の発言ではなく、自然とその明らかなプロセスを基準として使うべきです。例えば、腐敗作用に含まれる細菌は、常にどこにでも存在しています。まだ木に実っているときでも収穫後でも、りんごが腐敗し、細菌がそれを「消化」できるようになるかどうかは、明らかに細菌そのものには依存しません。

高等生物は常に下等生物を支配します。もし逆だったら、高等生物は存在できず、したがって人間も存在できないでしょう。私たちの腸内や皮膚には、体全体の細胞よりも多くの細菌がいます。数の上では、細菌は簡単に私たちを「食べ尽くす」ことができるはずですが、しかし、最近私たちが共生しているため、そんなことはしないのです。

要約すると、細菌、ウイルス、真菌などの細菌は、私たちの病気の実際の原因にはなりません。物質より優れた霊が体をコントロールしており、これには細菌の効果も含まれます。したがって、人間の体の構造と機能、そしてその二ーズについて正確に理解することが重要です。

14. 愛の源に対する人間の依存

人間の霊の「自分は神である」という誤りにより、人は自分を精神的に独立した存在だと見なしています。そのため、「自分は独立している」と考える人に対して、(情報の源という意味も含めて)愛の源に対する依存について説明するのは簡単なことではありません。しかし、人間のプロセスすべてが情報の受信から始まるという事実は否定できません。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚のどれを通して情報を受け取るかを問わず、情報は吸収される前に評価のプロセスを経なければなりません。このしくみの概要はすでに紹介しましたが、ここではこのプロセスをさらに詳しく説明します。

カナダで、ある少年が霊に関する私の講義を聞いた後、母親に「お母さん、お母さんは僕の霊に、今すぐ無理やりピアノの練習をさせることはできないって知ってる?」と言いました。子供たちは素晴らしい存在です。子供たちは物事のつながりを直感的に、鋭く理解することがよくあります。この少年は母親が自分に対して行動を強制できないことを知っています。では、なぜ彼は母親が求めたらそれに従ってピアノを練習するのでしょうか? その理由は、彼の霊が母親に依存しているからです。霊は常に自ら行動しますが、独立して行動することは決してありません。霊は何らかの源から精神的なニーズを満たさなければならないのです。この少年は母親との関係を通じてニーズを満たしているため、本当は望まなくても、母親の言うことを聞くのです。

霊の依存性をさらに証明するのは、報酬や処罰の脅しによって、通常なら霊が自ら進んで行わない行動を取らせることができるという事実です。私の診療所ではそのような状況をよく目にします。椅子に座る子供に対して、母親が「お願いだから、口を開けて!」と懇願しても、子供は口を開けようとしません。むしろ子供はさらに強く口を閉じてしまいます。しかし、母親が「あとで好きなアイスクリームを買ってあげる」と約束すれば、子供の霊はその報酬を認め、口を開けるのです。

しかし、やがて子供の霊は母親の提案にはもう満足できなくなり、約束や脅しが効かなくなります。子供は母親のことなど一切気にかけず、自分の望むことをするようになります。

これまでに、霊について三つの重要な特性がわかりました。

1. 霊は閉じたシステムであり、外部からコントロールできません。霊は外部からの影響を受けることはありますが、その影響を受け入れるかどうかは霊が単独で決定します。
2. 霊がコントロールできるのは霊自体だけであり、それは内側から行います。
3. 霊は常に活動的です。つまり、霊には受動性はありません。

霊には満たさなければならないニーズがあるため、外部から提供される情報は霊のニーズを満たすものでなければなりません。つまり、情報は「真実である」と評価されない限り、取り入れられません。霊は、真実、あるいは霊が真実だと考えるものだけを受け入れることができます。したがって、霊は取り入れる前にすべての情報を検証する必要があるのです。

霊はどのように、何を使って情報が真実かどうかを確認するのでしょうか？ 情報を評価するには、検証を行うための基準が必要です。この基準は客観的（絶対的で確実）なものか、あるいは主観的（不確実）なものかもしれませんが、いずれにせよ評価に使用される基準は決定的な役割を果たします。客観的基準と主観的基準の違いについては、第2章ですでに説明した通りです。

検証の結果、情報が真実だと判断されれば、それは信じられます。これにより「信じる」と「取る」ことの組み合わせが生じます。情報は自然発生するものではないため、霊は同時にその情報の源も信頼するのです。霊（常に人として理解されるべきもの）が信頼するためには、情報の源にも霊がなければなりません。つまり、他の人々だけが（ときには動物も）対象となります。愛は木や化学元素から得ることはできません。情報を信じ、人を信頼するのであるテーマについて専門家の話を聞き、その専門家に同意するということは、その専門家を信頼し、その人の情報を信じているということです。これが個々のケースにおいて賢明かどうかはまた別の問題です。

情報が吸収されると、残りのプロセスは迅速に、そして順序正しく進んでいきます。霊の決定は脳皮質で電流を引き起こし、電流は的確に体内に向けられます。体はそれに応じて反応しなければなりません。もちろん、どのような食物をどれだけ食べるかなども決定しなければなりません。霊は体のニーズを満たすべきなのです。もし霊がそうせず、体のニーズを無視することを選べば、体、そして結果的に霊も、近い将来のうちに死んでしまうでしょう。

霊の出口においてのみ、人間は創造の目的を果たすことができます。正しい自己同一性を持つれば、人間は自由な存在となるでしょう。依存したままの状態に変わりはありませんが、常に自由にいられるのです。しかし霊の入口では、自己同一性において、「私は神である」という嘘があります。この嘘は、私たちが発見して取り除かない限り、一生涯私たちにつきまといます。自分自身に関するこの嘘は、自らが愛の源であると私たちに信じ込ませます。そして、真の愛の源とのつながりを破壊し、もはやその源に戻れないようにしてしまうのです。依存の法則は、依然として適用されるとしても、私の視界の背後へと消えていきます。私たちは霊のための情報はもはや必要ないと考え、この点では何にも頼らずに生きているという幻想を持つのです。これこそが、すべての人間が生まれつき抱えている大きな欺瞞なのです。

しかし、人間の生活は、人が独立できないことを明確に証明しています。チャンネルとして、人間は常に入口で依存している状態です。しかし出口では、人間は独立しています。受け取った愛で何をするかは完全に自分次第なのです。愛からは悪いことは決して生まれません。食事で満腹になれば、吸収したエネルギーで何をするかを自由に決められます。しかし、食べたいものを食べる自由はありません。エネルギーを与えてくれないものを食べても意味がないのです。「何を」「どこから」取るかというのは、私たちの選ぶことではありません。こういった問いは、どの被造物の決定や自由意志の範囲内にもないのです。私たちの二ーズはあらかじめすべて定められています。私たちの自由は、二ーズを満たすために取り入れた資源で何をするかを決めることにあるのです。

愛を理由に私たちができることはいくつあるでしょうか？ 無数です。電流とプログラムからすでに幅広い生産物を生み出している無機質なコンピューターと比べて、人間にはより多くの可能性があります。生産物においては、私たちは自由だからです。

私たちが得るべき最も重要な認識は「私は誰か？」という問いへの答えです。選択や責任がない状態の私は、生まれつき誤りの中にいます。無意識のうちに、自分はある特定の存在だと信じているものの、その存在にはなれないのです。この誤った自己同一性を認識することが、変化を起こし、嘘から抜け出す第一歩となります。

個人的には、私を欺き人生を困難にする嘘をもう信じたくありません。本当の問題は他の人間や環境にあるわけではありません。確かに、間違った状況もあります。しかし、自分の周囲の環

境のために本当に何かができるのは、私が自分のためには何も求めず、チャンネルとして真実の中で生きるときだけです。心に平和があれば、葛藤や破壊はありません。しかし、法律や措置によってこの状態を達成することは決してできません。人間の問題は私たちの中にあるのです。もし私たちが皆、欺かれた状態のまま突然完璧な世界に送られたとしたら、その世界は2週間後にはどうなるでしょうか？

内面的に変化し、真理と自然の法則に立ち返るとき、私は周囲に良い影響を与えます。そうでなければ、私は家族や周囲の人々に善い行いをするよう強制しなければなりません。それが私にとっての「善行」だからです。そのため、まずは自分自身の内部で何かを変える必要があります。その後で、自分の考えや何が正しいかについて述べられるようになります。このようにして、私たちは良い影響を及ぼすことができるのです。たとえ私たちの良い影響が他者に受け入れられなくても、少なくとも私たちは創造の目的を果たしたことになります。

前述のように、自己同一性は「創造主」または「被造物」の二つしかありません。創造主は独立的存在であり、自己完結的なシステムです。創造主は独立しており、その創造物の源です。私はよく創造主を円で表現します。一方、すべての被造物（人間を含む）は「取ることによって与える」という法則に従います。この法則により、被造物はチャンネル、つまり開かれたシステムとなり、依存します。創造主と被造物のどちらが先に現れたのでしょうか¹³？ 明らかに、創造主だけが原因であり、被造物は結果にすぎません。

これまでに精神的な二一ズ¹³の総体を表すため、「愛」という言葉を何度か使いました。愛はどう定義できるのでしょうか？ 結局のところ、愛は人間が機能するにあたって、最初に必要とするものです。愛はもちろん主観的なものであり、人は愛についての質問に対し、それぞれ異なる答え方をするでしょう。それと同時に、究極的には誰もが「愛は必要か」という問いに肯定的に答えます。「愛が必要か」と「愛される必要があるか」という問いの間には、選択肢はありません。私たちの霊は愛があつて初めて機能します。愛には自由、正義、調和、認識、安全

¹³ あなたも恐らく、「鶏が先か、卵が先か？」という有名な問いをご存知でしょう。この問いは重要でないわけではありません。答えはただ一つです。鶏と雄鶏は卵よりも前に神によって創造されました。雌鶏は雄鶏なしでも卵を産むことができますが、ひよこを孵すことは決してできません。生命が繁殖するために満たされなければならない条件は多様であり、一次元的なものではないのです。

など、精神的な二ーズすべてが含まれています。これらはすべて、人間にとって変えられない二ーズなのです。人間はこうして作られているのです。

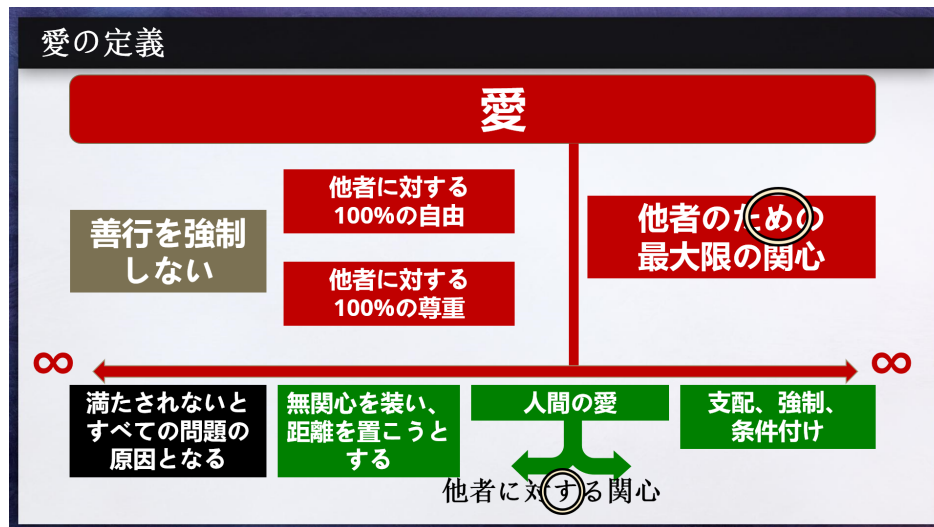
私は特に調和を必要とする人間として、皆を喜ばせようと努めます。皆が「相手に思いやりを注ぐ」雰囲気の中で心地よさを感じます。しかし、物事が思い通りに進まないとき、調和に対する私の欲求はどうなるのでしょうか？ 私が8歳のとき、両親は別れました。一週間後、私はB型肝炎というウイルス感染症にかかりました。何が原因だったかわかりますか？ 両親の別居が子供に害を及ぼすことを疑う人はいないでしょう。しかし、どのようにしてウイルスが肝臓に入り込むのでしょうか？ 精神的なレベルで問題があるとき、なぜ身体的な反応が起きるのでしょうか？ それは子供が両親の愛に依存しているからなのです。

当時、私は病気になることを選んだのでしょうか？ 自分の家族を選ぶ、または選ばないという選択肢はありませんでした。8歳の時点で、私はすでに自分の家族について考え、結婚の計画を立て、夢見ていました。女の子たちはいつも私の関心の的でした。私は彼女たちに調和と愛を求めていたのです。実際、私は早く結婚しました。調和を得る必要があったからです。どの男性にも、理想の女性像があるでしょう。しかし、その理想が常に現実となるわけではありません。

調和や正義などが必要だというのは、選択の問題ではありません。私たちの霊に組み込まれていることなのです。これらの二ーズを満たさなければ、不幸になり、病気になります。私は体に基ついた愛の定義を見出しました。「愛が欠如している」状態だと、体は病気になります。愛は体の中で何をするのでしょう？ ここで定義する愛とは、体がもはや病気にならないことを意味します。霊がこの愛を取り入れて実践すると、脳波は体を適切に機能させるのです。愛の二ーズだけでなく、電流の効果も決定されています。霊は、ピアノ奏者がするように、電流の「鍵盤」を押して、体全体が適切にコントロールされるようにします。人間は必要とするものを選ぶことはできません。選べるのは、すでに取り入れたものをどのように使うかについて決定することだけです。

では、愛とは何でしょうか？ 私の定義は、関心と自由という二つの次元を結合します。どちらも限界がなく、それゆえ無限です。もし私たちがこの形で愛を実践したら、誰からも害され

ない、自由な存在となれるでしょう。愛はすべての人間の問題に対する解決策です。愛は他者に対する最大の関心を伴います。しかし、なぜ関心が愛にとって重要なのでしょうか？



愛には、他者に対する最大の関心が伴わなくてはなりません。人間の愛も他者に大きな関心を示すことができますが、それは他者への関心であって、他者のための関心ではありません。どの母親も自分の子供を愛しています。しかし、母親は子供から何かを求めているのでしょうか、それとも何も求めていないのでしょうか？ 母親は子供への愛着から、子供のために命を捧げることもあると、私たちは知っています。しかし、子供が期待通りに行動しないと、母親は介入しがちです。私の患者の多くは、母親が支配的だ、または支配的だったと言います。母親は子供を強制し、条件付けることができますが、人間はそのように条件付けられるのを好みません。

人間は自発的に他者に対して非常に大きな関心を持つことができます——結局のところ、愛のために他者を必要としているのです。その結果、他者を手放すことができません。愛は、他者への関心ではなく、他者のための関心があるときにのみ真の愛となります。これは、愛が相手に100%の自由を与え、100%尊重するときのみ可能です。

このような愛を実践する人と暮らすのは、素晴らしいことではないでしょうか？ それは、あなたのために命を捧げる意志を持ちつつ、あなたが望むことを何でもする自由を与えてくれるような人です。完璧な関係でしょう。ところで、誰かのために最大限の関心を示すことと、完全な自由を与えることのうち、どちらが難しいと思いますか？ 人間の愛は、強制も条件付け

もしなくなると、無関心を装い、外面的には距離を置きます。しかし内面では、通常、相手を支配したいという欲求が続いています。一方、真の愛は善行を強制することはありません。

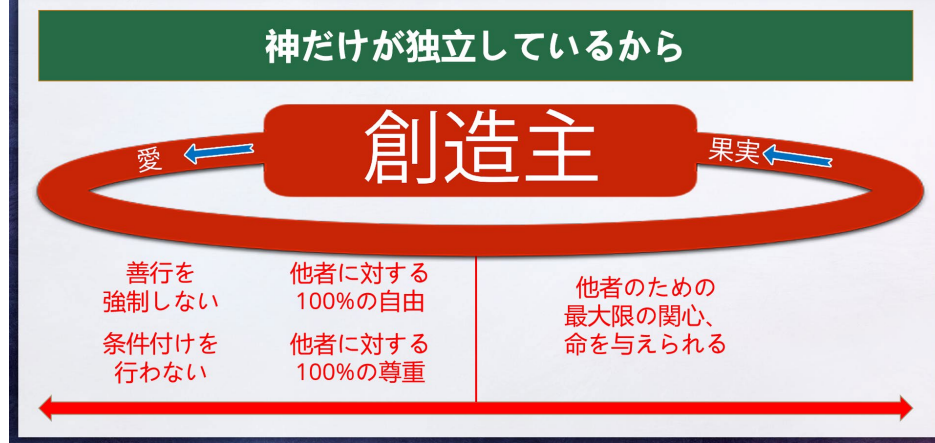
なぜ人は他者に対して善行を強制しなければならないのでしょうか？ それは本当に相手の安全や福祉のためなのでしょうか、それとも実際には自分の目的や保護のためなのでしょうか？ 規則や規制はたいてい、共同体に対する個人の責任や他者への愛によって正当化されます。しかし愛の定義は、抑圧や強制を用いる人たちは、真実の外にいるということを示しています。真の愛はどのような行動に対しても誘因を設定せず、条件付けません。条件付けは、人を操る行為なのです。

患者たちとの関わりを通じて、私が一貫して気づいたのは、患者の問題と病気はすべて、自由を与えられないことから生じているという点です。ほとんどの人々は、物事が自分の考え通りに進まないとすぐに、自由を与えられなくなります。

私は結婚して約40年になりますが、今でも妻に自由を与える練習をしています。もし私が他者にすべての自由を与えたとしたら、私自身にはどれだけの自由があるのでしょうか？ 完全な自由です。例えば、もし自由を否定し、他者をコントロールしようとしたら、私は病気になり、痛みを感じるでしょう。

愛は、正しく実践すれば、私たちを完全に自由にします。自由を与えることで、自由を得るのです。愛を与えられなければ、自由はありません。その場合、自由を否定しながらも、愛する人に依存している状態になるからです。こういった理由で、私は愛する人たちから、適切な形で常に独立しているのです。この独立が条件なのです。人間らしい方法で誰かを愛する場合、その人が何か間違ったことをしたら、例えばお金を無駄遣いしたら、その人の行動を本当にそのままにしておけるでしょうか？ 愛が真の愛かどうかは、自由という問題において試されます。自由が欠けている場合、相手に対する依存があります。この場合、私は明らかに相手に何かを求めているからです。最大の関心と同時に相手の自由を伴う愛は、「このような愛を生み出し、与える存在は独立した存在でなくてはならない」ということを証明しています。しかし、本当に独立しているのは創造主である神だけです。

愛の唯一の源としての神



神だけが独立しているため、神は無制限にすべての被造物に愛を提供できます。誰もが最初に愛を取り入れ、それを伝えることで愛を実践できます。人は愛をどこで与えるかを自由に決められますが、その使用自体は自分の命に関わる条件なのです。

あなたは自発的に食べますか、それとも強制されて食べますか？ 私は食べるのが好きです。他の多くの人たちもそうでしょう。普通は「残念だが、また食べなくてははいけない」とは考えません。愛もまた、被造物の私が取り入れ、実践しなければならないものです。愛は私の人生全体に力を与える要素であり、この種の愛が見つかる場所は一つだけです——創造主である神との関係の中です。

神についての見方がどうであれ、神は唯一の存在であり——愛の唯一の源です。源が複数あると、宇宙の基本法則は有効ではなくなります。神は一つであり、霊であるため、必然的に人格を持つ存在なのです。

15. 遺伝と育児：子供たちの依存

数多くの子供たちも診察し、アドバイスを与えてきたことから、私は多くを学びました。なぜ子供たちは鼻水をたらすのでしょうか？ なぜ神経性のチック症が起こるのでしょうか？

症例14：ある家族が10歳の娘を連れて来院しました。4年間、非常に目立つ咳払いをしていたのです。アデノイドの切除も、心理療法も、代替医療も効果がありませんでした。その子は現在小学校3年生で、2〜3分ごとに咳払いをしていました。クラスメイトはいつもそれを笑いものにしていたのです。

神経性チック症の場合、原因は特定の種類の愛の欠如、すなわち安全感の欠如にあります。子供には100%の安全感が必要なのです。子供はこの安全感をどこから得るのでしょうか？ 両親からです。両親と徹底的に話し合った後、3日後には咳払いが消えました。なぜこんなことが可能だったのでしょうか？ それは私たちの病気は何かの兆候に過ぎないからです。子供の霊が、安全感の欠如という信号がしっかり伝わったと認識し、この問題が解決されたと判断したとき、霊は咳払いを止めることができるようになり、病気は解消されたのです。

ところで、子供はどう機能するのでしょうか？ まずは子供の発達について注目しましょう。子供は二つの配偶子から形成されます。一つは母親、もう一つは父親のものです。これらの細胞は卵管という空洞で出会います。厳密に言えば、これは母親の「体内」ではなく、母親の「体上」で起こります。半数の染色体を持つ二つの配偶子が融合します。細胞は単独では何もできないため、それに関連する霊も存在しなければなりません。この霊は目に見えませんが、子供の半分は母親の遺伝情報から、もう半分は父親の遺伝情報から作られます。これは物理的レベルでの細胞と同様に、霊的レベルでの子供の霊にも当てはまります。子供の霊は父親の霊の半分と母親の霊の半分から形成されるのです。

融合した細胞は成長を始め、分裂し始め、子宮へと移動します。誰が誰に付着するのでしょうか？ 自然の法則によれば、常に何かを必要とする者が他者に付着します。したがって、発達中の子供が母親に付着するのです。へその緒と胎盤を通じて、これらは子供の体の一部です

が、子供は自らを養うため、つまり「取る」ために母親の子宮に付着します。物理的なへその緒は化学、つまり栄養を得る手段と関係しています。子供は母親の体に100%依存しているのです。体を選ぶという選択肢はもちろんありません。では母親はどうでしょうか？ 母親は独立しているのでしょうか、それとも彼女もどこかから取らなければならないのでしょうか？ 母親がニーズを満たすための源は自然です。母親は自然が提供するものを食べ、子供は母親から取ります。母親がアルコールを飲めば、子供も酔うことになります。母親が子供にとって唯一の源であるため、子供に害を与えるものを摂取しないよう注意すべきです。

子供の霊的な付着についてはどうでしょうか？ 霊的レベルでの結合は、物理的レベルと同様に不可欠です。受胎の瞬間から、胚が子宮に入る前でさえ、子供の霊は母親の霊に付着します。子供の霊に選択肢はありません。取らなければならず、信頼しなければならないのです。そうすることでのみ、子供の霊は与えることができるようになります。霊は、胚が生き、成長するために必要な電流を動かし、制御しなければなりません。子供の霊は一種の霊的なへその緒を通じて母親の霊から取り、最初の3か月間で小さな体を組み立てていきます。この構築段階の後、子供は長い間成長し続けますが、構造的には変化しないのです。

霊は子供の発達と成長をすべての過程において制御します。母親が不自由な思考という形で過度のストレスを経験すると、子供の霊は体を正しく完全に組み立てることができなくなります。個々の体の部分や血管のつながりが欠けてしまうこともあるのです。したがって、妊婦は何を適切に食べ、飲むべきかについてだけでなく、どのように、そして何を考えるべきかについても知るべきでしょう。誰が母親の思考を制御するのでしょうか？ 彼女にも自分のニーズを満たす源があるのでしょうか？ 確かに、彼女も誰かを信頼しなければなりません。彼女は夫を信頼しているのか、それとも自分の両親を信頼しているのでしょうか？

多くの人は一生涯、母親とのつながりを維持しています。ある高齢の患者は激しく怒りながら、「私の夫は今70歳です。夫の母親は90歳を超えていますが、夫はいまだに母親の言うことを聞いているのです！」と言いました。この継続的なつながりのため、多くの死にゆく人々は最後の瞬間に、「今から母親のところに行く」と言うのです。

子宮内で子供に何が起こるのでしょうか？ 一般的に、源は常に、何かを必要とする人よりも大きくなければなりません。母親の体が子供を完全に養うのに十分な大きさである限り、母親

は十分な存在です。しかし、子宮内で9か月が経つともはや十分ではなくなり、子供は生まれてきます。この時点から、子供は自らを二ーズを満たす別の源に結びつけるようになります。赤ちゃんへの授乳にも時期があり、その後、子供が母親の体から摂取することは少なくなるか、まったくなくなります。誕生すると、子供は自分で呼吸をするようになるのです。

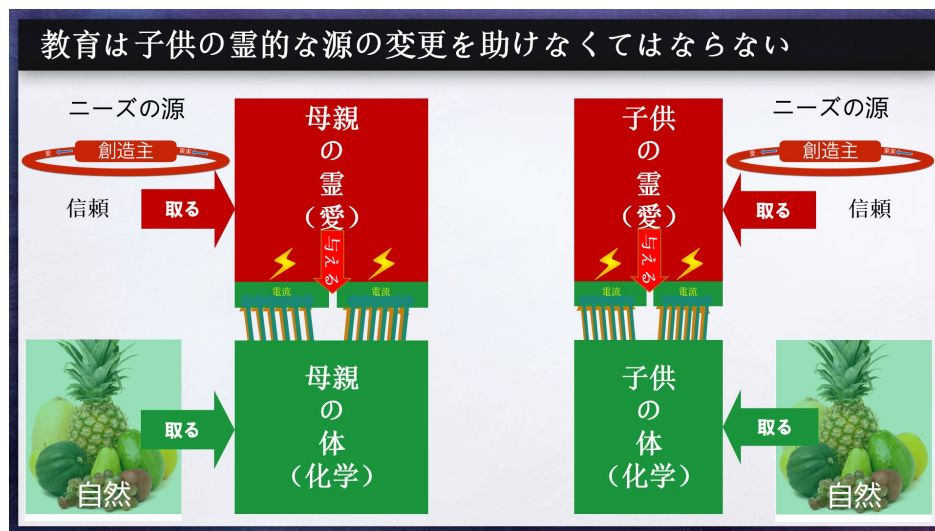
霊的レベルでの依存関係はどうでしょうか？ なぜ症例14の少女は神経性の咳払いをしたのでしょうか？ きっかけは子供にあるのか、それとも母親にあるのでしょうか？ 子供には選択肢がありません。霊的な欠如をチック症によって表現しているのです。子供は霊的に母親に結びつき、母親から取ります。この結合は実験によって証明できることです。霊は見えませんが、霊が引き起こす電流を測定することは可能です。母親と子供の脳波を同時に測定すると、子供の依存関係が明らかになります¹⁴。母親が電流を変えると、子供はごく短時間のうちにそれに追随し、電流も変化させるのです。母親の脳波と子供の脳波の関係は、ある一定の距離まで観察できますが、距離が遠すぎると、霊的なへその緒はいわば遮られてしまうのです。

子供はいつまで母親につながる霊的なへその緒を維持すべきでしょうか？ 出生後の時点では、子供はもちろん成熟した人間ではありません。母親の状態は最初の数年間における子供の発達と健康にとって決定的なものです。そのため、母親と子供は最初の7年間は互いに離れるべきではありません。動物界全体——少なくとも哺乳類——では、母親と子供は一定期間を一緒に過ごします。例えば、クマの場合は3年間です。理性的な人間だけが、どのような害を子供に与えているかを知らずに、わずか数週間で自分の子供を手放すことがあるのです。

霊的レベルでは、子供が母親から早期に引き離されることは、魚を水から出すことにたとえられます。多くの病気は、ずっと後になって現れたとしても、幼少期に起源があります。これは数多くの観察に基づいて言えることです。私の患者の悩みはたいてい、人生の早期の段階から来ています。そしてこれは、人々が子供の二ーズを理解していないからです。このことについて知らなかった母親たちに罪悪感を感じさせたくはありません。しかし、それでも実際にはどうということなのかを説明したいと思います。全員の理解が重要だからです。

¹⁴ 原文引用元：Turk, E., Vroomen, J., Fonken, Y., Levy, J., van den Heuvel, M. (2022): In sync with your child: The potential of parent-child electroencephalography in developmental research. Wiley. *Developmental Psychobiology*, Special Issue, 1-16.

さて、いずれ子供が母親に霊的に付着すべきではなくなる時が来ます。ある日、母親はもはや源として十分ではなくなり、子供はニーズの源を変えなければならなくなります。しかし、母親自身が「夫や他の人々は自分の霊にとって適切な源ではない」という点を理解していなかったとしたら、彼女の子供はどうしたら理解できるでしょうか？ 創造主が人々に代わってニーズの源となる位置を占めた場合にのみ、霊的なニーズは正しく満たされるのです。理想的には、子供は12歳までに神に対して霊的に付着しているべきでしょう。神からのみ霊的に取り、もはや母親や他の人々に霊的に依存しないようにするのです。もし子供がこの時点から完全に神と結ばれていたら、子供は人間から完全に霊的に独立するでしょう。それは素晴らしいことではないでしょうか？ 母親はすべてを正しく行い、子供を自由にできるのです。



しかし、周りを見回すと、まったく逆のことに気づきます。母親の多くは子離れができずにいます。母親はたいてい「親愛なる」母親です。子供が結婚すると、新婚カップルの寝室の隣の小さな部屋に引っ越したいと思うほどなのです。

興味深いことに、突き詰めれば誰もがいつも同じ話をしているのだと、私は気づきました。この人たちの経験はすべては、同じ原因、つまり誤った自己同一性に帰着するからです。そのため、子供も生まれつきの「私は神である」という誤った自己同一性に従って行動します。また母親の他に、父親、祖父母、兄弟姉妹、友人など、他の人々ともつながりを持ちます。「取る」という一つの目的のためだけに、すべての関係において自分自身を他者と結びつけるので

す。スポンジのようにすべてを吸収するのです。それと同時に、「他の人は自分を愛さなければならぬ」という誤解はしっかり根付いたままです。

子供は愛されることを要求します。両親が自分を愛することを期待しているのです。病気は、このニーズが満たされないか、完全に満たされないために発生します。子供は何よりも母親と父親、そして祖母や他の養育者からの愛を期待します。もし子供がキリスト教徒として育ったら、たいてい神も加わり、子供は神にも愛を要求するようになります。他者に対するこの要求は、まず自分自身が神であるという前提に基づいています。多くの人々の人生について話を聞いたところ、最終的には誰もが同じように考え、誰もが自分を同胞よりも高いと見なしていることに、私は気づいたのです。

一つ、疑問が残ります。なぜ私たちは皆、同じように誤った自己同一性を持っているのでしょうか？ この疑問を明らかにするには、遺伝の法則を見てみましょう。私たちの特性はすべて間違いなく遺伝します。「生命」はどこから来るのでしょうか？ そして地球上のすべての人たちはどこから来るのでしょうか？ 新しい生命は既存の生命からのみ生じます。私たちが生きているということは、何らかの生命の子孫だということを意味します。もちろん、これは私たちの両親、祖父母などにも当てはまります。人間は皆、どこから来るのでしょうか？ 私たちは一つの種であり、皆同じ構造を持っています。どの人間の機能も基本的なニーズも同一です。さらに、既に説明した霊的な共通点もあります。私たちは皆、誤った自己同一性という同じ誤解の下にあるのです。

現在、地球上には80億人以上が暮らしています。世代をさかのぼると、私たちの起源はどこにあるのでしょうか？

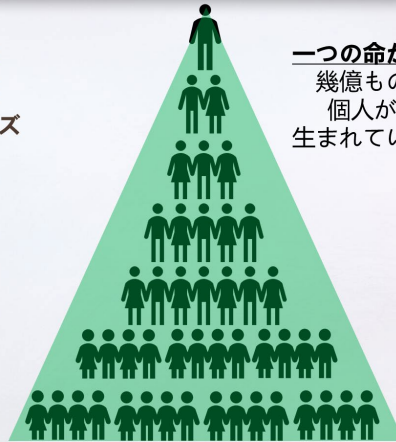
遺伝の法則は共通の起源を証明する

生命は生命からのみ
生じる



人は皆どこから
やって来るのか?

- ・ 一つの種
- ・ 同一の構造
- ・ 同一の機能
- ・ 同一のニーズ
- ・ 同じ誤り



一つの命から
幾億もの
個人が
生まれている

16. 新しい命：人間の問題に対する唯一の解決策

私たち人間は皆、それぞれが異なる個人ではあるものの、一つの命を起源として生きています。例外はありません。私たち全員に一つの起源があり、その起源は創造にあります。遺伝の法則も創造の時に確立されました。聖書は、神が初めに一人の人間を創造されたことを示しています——アダムです。聖書の創世記2章に含まれる記述を通して、その後イブがアダムから創造された経緯を知ることができます。神はアダムから肋骨を取り、肋骨からイブを形造られました。イブもまた霊的に神とつながる必要がありました。アダムと同様に、イブも被造物としての正しい自己同一性を持っていました。この状態でアダムとイブから生まれたであろう子供たちは皆、アダムの命を持ち、永遠に生き続けることができたでしょう。

アダムは霊的に神とつながっており、「私は被造物である」という正しい自己同一性を持っていました。他のすべての人間はアダムから生まれました。神の計画によれば、人間は繁殖し、永遠に、つまり無期限に生きることになっていました。



しかし、事態は異なる展開を見せました。アダムとイブは、自分たちの自己同一性を変え、神のようになれると思い込んで自らを欺いたのです。この自己欺瞞が神からの分離につながりました。しかし、霊的な依存は霊の機能に組み込まれているため、二人は必然的に互いに霊的に依存するようになりました。そして二人はもはや神とその不変の法則に信頼を置くことができなくなりました。神の言葉を信じることもできなくなりました。そこで、両者とも互いに信頼と信

仰を置いたのです。しかし、自己欺瞞によって、人々は「自分は霊的に独立している」と考えます。彼らは想像の泡の中で生き、自由に考えていると信じており、自分たちの思考がすべて他の人々の発言や行動に依存しているだけだということに気づいていません。私は身体的な病気を通してこの自己欺瞞を発見することができました。なぜなら、病気は偽りの霊的な依存を明らかにするからです。

人間が必要とする愛は、世界の初めから意図されていた源からのみ汲み取ることができます。神が最初から、私たちが酸素をどこで得るか——空気からであって水からではないということ——を決めておられたように、神はまた、私たちが霊的なニーズをどこで、何によってのみ満たせるかも決めておられます。それでも、水中で深呼吸をしようとすれば、良い結果にはなりません。霊的な依存についても同じです。人々から愛を得ようとするのは、水から空気を得ようとするようなものです。

この恐ろしい自己欺瞞の状態を人に気づかせるのは非常に困難です。なぜなら、医学においても科学全体においても、私たちは病気の発症における霊的な側面について明確に理解していないからです。

人間の「自分は神である」と信じる自己欺瞞を認識すると、神を否定するすべての教えがどこから派生しているかについて理解できるようになります。しかし、直接的に神を否定しない人々たちでさえ、なぜ神が必要なのかを知りません。残念ながら、宗教は創造主の愛の正確な反映ではなく、むしろ支配的で独裁的な神の姿を示しています。したがって、究極的にはすべての人々が神と対立していると言えます。人はもはや神に近づけない状態です。その結果、人間は何千年もの間、さまざまな方法で神との親密さの欠如を埋め合わせようと試みてきました。多くの人々が宗教やイデオロギーに自分たちの問題の解決策を見出したいと望んでいます。仏陀であれマルクスであれ、孔子であれガンジーであれ、目的は常に、何らかの形で人間の問題を解決することです。しかし、これは人間の偽りの自己同一性を修正するものではありません。

私たち全員が起源とするアダムの命は、最終的に神から分離されています。これは、私たちがもはや永遠に生きることはできず、死ななければならないことを意味します。この事実上の死の状態から抜け出し、死を置き換えて時間的に無制限の命に切り替える方法がなければ、私たちはそもそも生きていないでしょう。

自分自身が神であると誤って信じている人の考えを転向することは可能なのでしょうか？

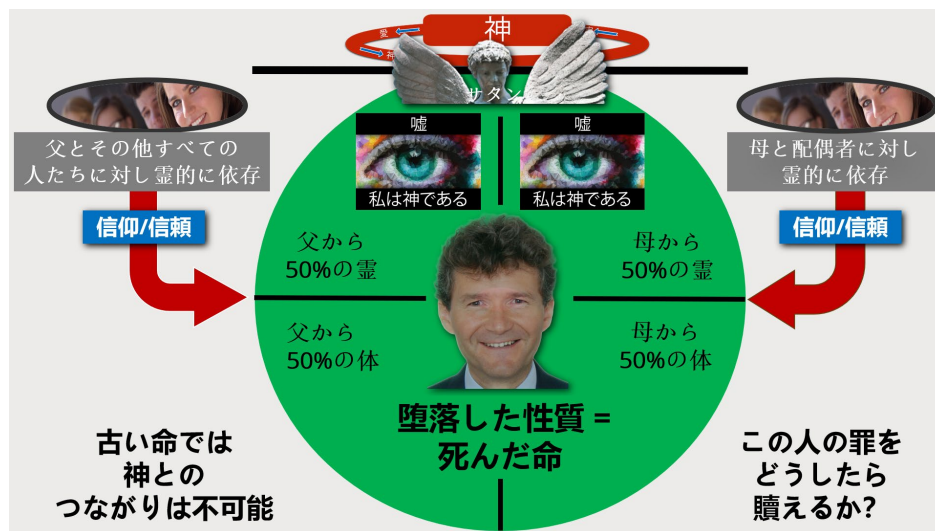
症例15：ミャンマーで、私はある仏教僧に出会いました。彼は約50歳で、甲状腺機能亢進症を伴う極度に肥大した甲状腺と重篤な心臓病を患っていました。彼にはどの薬も効きませんでした。10年前、妻は子供たちを連れて、彼のもとを去りました。それから彼はうつ病と賭け事に陥りました。しばらくして、彼は両親のお金をすべて、約6万ドルを賭け事で失いました。ミャンマーの人たちの日収は約1ドル程度。そのため、これはかなりの大金でした。お金を賭け事で失った後、彼は自分の行為で両親を破滅させたため、深い後悔に陥りました。彼は僧侶になり、瞑想に多くの時間を費やし、平安を必死で求めました。

この人を病気にしたのは何でしょうか？ 甲状腺の問題を引き起こしたのは誰でしょうか？

答えは彼自身です！ 彼の霊は、甲状腺と心臓を含め、全身をコントロールしています。彼の霊は悲しみ、問題の解決策を見出せませんでした。彼は妻と子供たちの愛に霊的に依存していました。その愛を失ったとき、彼は賭け事を通じて気持ちを高める以外に出口を見出せませんでした。賭け事は愛の代わりだったのです。ゲームそのものではなく、一緒に賭け事をした人々に依存しました。しかし、お金がなくなると、その人たちも去っていきました。彼は自分がさらに深い困難に陥っていることに気づきませんでした。彼の身体的な病気は偽りの霊的な中毒を反映していました。彼の霊には解決策がありませんでした。僧侶としての生活と瞑想も彼に癒しをもたらしませんでした。そんな彼に対し、私は何を解決策として示したのでしょうか？ 私は「あなたには新しい自己同一性を持つ新しい命が必要です」と伝えました。

なぜ新しい自己同一性を持つ新しい命が必要なのでしょうか？ 霊的なニーズを満たすにあたって、古い命は他の人たち——時には動物——だけに結びつくものだからです。「私は神である」という自己同一性の場合、神に霊的に結びつく能力はありません。もしこれが可能であれば、神だけに結びつく新しい命は必要ないでしょう。人間の問題はすべて一つの質問に要約できます。それは、「私は霊的に誰に依存しているのか？」という質問です。神への依存は生理学的で、正常であり、それに代わる選択肢はありません。

私たちはすでに、ニーズやニーズの源に関して選択肢がないことを見てきました。人間は自らのニーズを満たす源を失うとすぐに、生きていられなくなります。新鮮な水にアクセスできなければ、死んでしまいます。それと同様に、愛の源にアクセスできなければ、存在することはできません。神の愛の源から分離されているにもかかわらず、私たちが短期間ながらも生きていくという事実は、古い命から抜け出し、新しい命へと進めるように、という神の恩恵によるものです。自らの状態を変えるという一時的な機会を見逃すと、人に残されるのは非存在、すなわち永遠の死だけです。



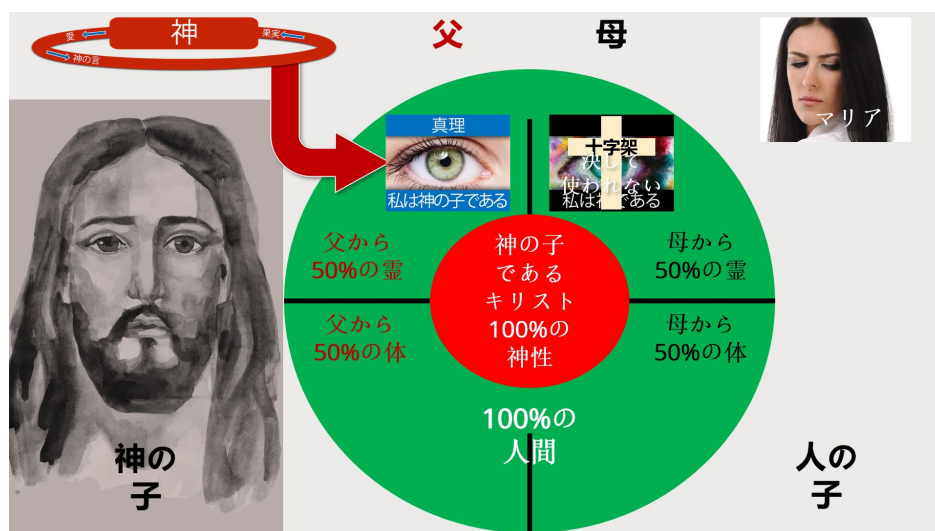
このように、私たちの病気と症状は、間違った霊的なつながりの点（他者に対するつながり）に縛られていることの兆候と警告の両方であり、このようにつながりを偽りとして認識できるようにしてくれます。その結果として、私たちには、古い命の誤りを放棄し、新しい命の真理でそれを置き換えることによって、愛と命の真の源に自分自身を結びつける選択が与えられるのです。

「新しい命」はどこから来るのでしょうか？ それはどのように創造されたのでしょうか？

17. 新しい自己同一性を持つ新しい命の創造

自己欺瞞の問題は人間の霊において発生するため、人間の霊の中でしか解決できません。人間は自らこの問題を解決できなくなったため、神は人間を助ける方法を見出されました。しかし、神は外部からコントロールできないような形で霊を創造されました。霊は、信頼を通じてその内側から愛の源と結びつく必要があります。しかし、過ちを犯した人間の霊はもはやそうすることができなくなり、それゆえに神ご自身がアダムの命の中に人間を宿されたのです。

聖霊によってマリアの胎内にイエス様を宿らせたのは、人間に出口を与える唯一の方法でした。遺伝の法則に従って、イエス様は父なる神によって宿ったことで、ご自身についての真理、すなわち「私は父の子である」という真の自己同一性を受け継がれました。この真理を通して、胚は神と結びついたのです。これにより、地上の父親によって宿った子供には決して克服できなかった障壁が取り除かれたのです。イエス様という人は父と結ばれ、正しい生理的な結合を果たしたのです。



ところが、遺伝の法則に従って、イエス様は母親のマリアからも誤りを受け継がれました。しかし、イエス様はこの偽の自己同一性を決して使用せず、それをご自身の内で破壊しなければなりません。地上で過ごす間、イエス様は人間としての存在において、完全に神であったにもかかわらず、「神であることを望む」という誘惑に抵抗しなければなりません。イエス様が永遠の神として存在していたという点を理解するのは重要です。イエス様は衣服を

着るかのように、人間性によってその神性を隠しました。イエス様の人間性は見えるものとなり、その神性は隠されたのです。これによって、イエス様は一方では神の子、他方ではマリアの側からアダムの子孫とされました。

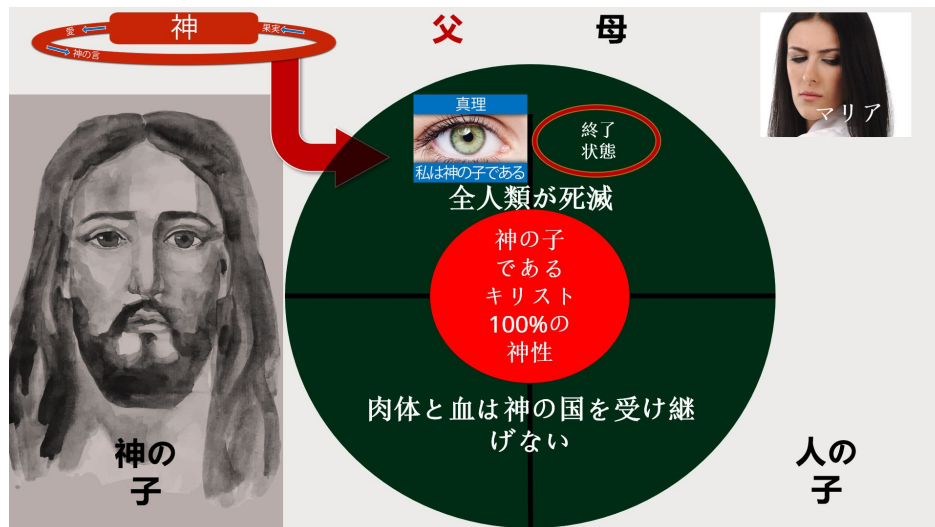
イエス様は地上で33年半の間生きられました。その間、神の子としての自己同一性が許さないようなことをするよう、繰り返し挑発されました¹⁵。多くの攻撃や欺瞞の策略に対応するため、イエス様は自らの真の自己同一性を疑わなければならなかったでしょう。疑いの余地が存在し、人間の贖いを妨げようとしてサタンが行う誘惑はすべて、その疑いを起こすことが目標でした¹⁶。しかし、イエス様は天の父の子としての自分の自己同一性を決して疑われませんでした。その結果、何か悪いことをするよう、誰もイエス様を誘惑できなかったのです。イエス様は十字架の上で霊を差し出すまで、父とのつながりを保っていました。

イエス様の使命は、父とのつながりと父との協力を通して、ご自身の中で人間の霊における誤りを暴き、その誤りと戦うことでした。イエス様は、十字架上で「成し遂げられた」(ヨハネの福音書19章30節)と叫ばれたとき、自らの罪深い性質、そして偽の自己同一性を完全に取除かれました。こうして、私たちの起源であるアダムの命は、罪深い性質から解放されたのです。

しかし、これで終わりではありませんでした。肉と血は神の国を受け継ぐことができないため、人間全体が死ななければならなかったのです。アダムの命が死んだのは、彼の一度の罪のためです。人間はもはや神に結びつくことができなくなり、自分の命を保つことができません。人間は恩寵のおかげで存在していますが、それは限られた時間のことであり、古い命から脱出する機会を個人に与えるためです。

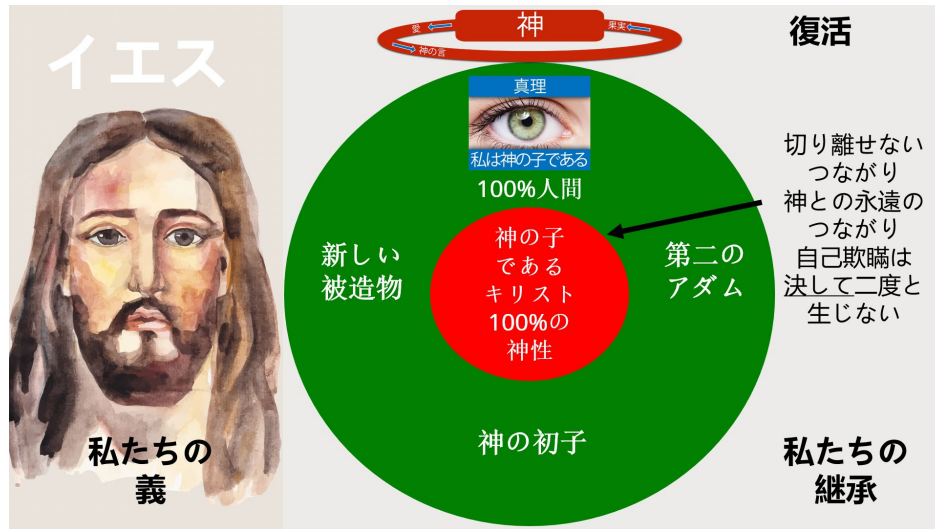
¹⁵ ヤコブやヨハネといった弟子たちでさえ、村が宿を与えなかったという理由で、「天から火を降らせましょうか」と尋ねたことがこの点を示す例として挙げられます(ルカによる福音書9章51-56節)。

¹⁶ 砂漠におけるイエス様に対する悪魔の誘惑を参照(マタイによる福音書4章1-11節、ルカによる福音書4章1-13節)。



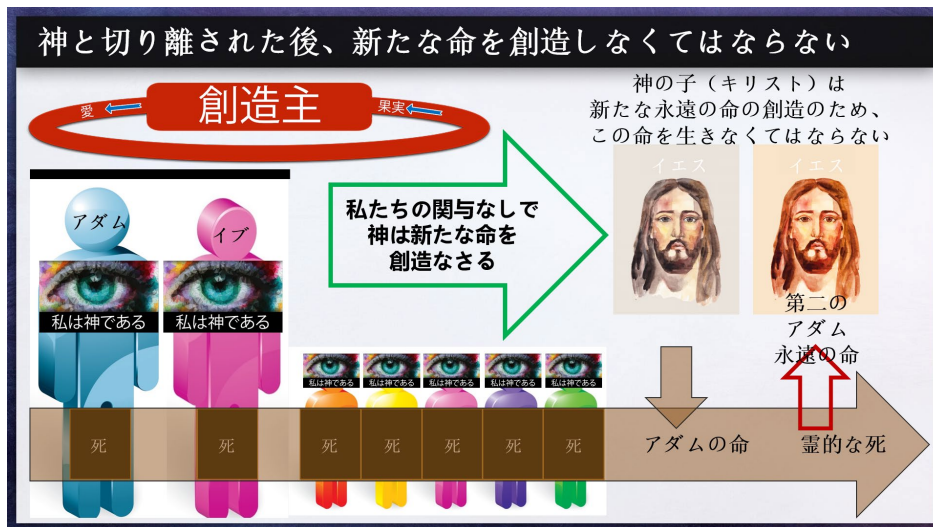
イエス様は、すべての人間が生きているアダムの命に入り、ありとあらゆる罪の原因（「私は神である」という誤り）を取り除き、ご自身の内でそれを破壊することによって、イエス様は全世界の罪すべてを背負われ、罪を正しく裁けるようにしてくださいました。イエス様はかつて存在したすべての人々の罪を負い、罪の原因と結果に対する勝利者として死なれたのです。そのためには、アダムの命を完全に終わらせる必要がありました。キリストが十字架上で人間全体を死に至らせる必要があったのはこのためです。私たちの贖いのためには、古い命を完全に破壊し、この命を構成していた要素（体と霊）を浄化し、復活して、完全に新しい命を創造することが必要だったのです。

三日目の復活によって、キリストは第二のアダム、つまり命を与える霊（コリントの信徒への手紙一15章45節）となりました。キリストは、死者の中からよみがえられたとき、不死の存在となり、永遠に神と結ばれ、新しい被造物となりました。こうしてキリストは今や永遠に真理の中に存在します。キリストは神の初子です。この素晴らしいメッセージが意味するのは、私たち全員がイエス様への信仰を通して神の息子、娘になるということです。それが私たちの救済なのです。人間にとって他の可能性はありません。この一つの新しい命こそが、私たちに必要なすべてなのです！もし古き人間がそれを信仰によって受け入れるなら、新しい人間は神の性質にあずかるのです。私たちの義と希望のすべてはキリストの中だけにあるのです。キリストの新しい命は、私たちを神の臨在へと連れ戻してくれます。



新しい人間を神から離すことはできません。自己欺瞞は新しい命においては永遠に排除されています。これは贖いによってもたらされるのです。神は自己欺瞞がもはや不可能となるように、何かをなされました。創造主は自らを人間と不可分に結ばれておられます。神は創造主以外に選択肢がないという点を、全宇宙で完全にはつきりと確立されました。いかなる霊もこの点を再び疑ったり、破ったりすることはできません。いかなる霊も自らの自己同一性において再び自らを欺くことはできなくなりました。欺瞞は一挙に暴かれ、ありとあらゆる存在に対して示されました。創造主と被造物の関係は絶対的で、不変であり、良いもの、そして正しいものなのです。

神はイエス様の復活によって創造された新しい命をすべての人に示し、その人たちが新しい命を信仰によって受け入れられるようにしています。この新しい命を信仰によって受け取ることが、人間のありとあらゆる問題に対する解決策なのです。人間の墮落によってアダムとイブから始まり、すべての子孫に影響を与える神からの分離は、人間の努力によって元に戻すことはできません。神に帰ることは、私たちにとって不可能なことです——つまり、私たちは死ななければなりません。唯一の出口は、イエス様の命を信仰によって受け入れることなのです。



救済を得るには、イエス様の地上での命と、イエス様が第二のアダムとして墓から出てこられたときに創造された新しい命の両方が必要です。私にとって、これはすべての罪の赦しと新しい命——つまりイエス様の命——への入場を意味します。この点において、聖霊は不可欠な役割を果たします。聖霊は信仰を通じて、私たちがイエス様の命に触れられるようにしています。聖霊はすべての人の心に働きかけるものです。

問題は、自由に生きられるようにするには、人はどのようにして新しい命を適用したら良いのかということです。

18. 生まれつきの二一ズから解放される人間

人間が創造された方法から明らかになるのは、解放はそれぞれにとって個人的なものでなくてはならないという点です。霊は内側からのみ自らをコントロールでき、それゆえに個人だけが神によって創られた新しい命を活用できるのです。新しい命は薬や治療法のように利用可能なものですが、それを受け取れるのは個人だけです。しかし、人がそれを信仰によって受け取らず、自分の命にしなかつたら、神による新しい命の創造はその個人にとっては無駄になってしまいます。

生まれつきの誤りからの解放と贖いは、神との協力によってのみ可能です。神は手段を創造されましたが、その活用は個人に委ねられています。したがって、人間が解放されるかどうかは、その人自身に責任があるのです。誰もその人の代わりに何かをすることはできません。しかし、これには自己認識、自然の法則の認識、そして神への霊的依存の認識といった一定の能力が必要です。

次は、信仰を通じて新しい命を受け入れるプロセスについて、私の個人的な経験に基づいて説明します。

子供の頃から、私は幸せな家族を持つことが人生の充実であるという考えを持っていました。そのため、この夢を早く実現させるために、若いうちに結婚しました。しかし、物事は予想とは違った形で展開したのです。

私の第一の霊的な二一ズは調和です。したがって、この願望を満たすため、私が妻へ持っていた期待はかなり高いものでした。基本的に、妻に満たしてほしいと期待した二一ズは三つありました。

1. 妻に私のことを理解してもらいたい。私の最も内なる感情を理解し、それに応えてほしいかったのです。
2. 何か言いたいことがあるときに、妻に私の話を聞いてもらいたい。しかし、彼女はすでにすべてをよく知っていて、私は話す機会を得られませんでした。

3. これは特別な願いでしたが、朝目が覚めたとき、妻が微笑むことを望みました。調和を必要とする人間として、私は彼女の笑顔から生きる力を得ていたのです。

私の誤った心にとっては、妻がこれらのニーズを満たすのは当然のように思えました。しかし、期待が満たされなかったため、私はこの関係に不満を感じていました。キリスト教徒として育った私は、結婚は自分の意志で捨てることができるものではなく、生涯のものであると学んでいました。そこで、内心では受け入れないまま、この状況に甘んじることにしました。

人は不幸なとき、他の手段でニーズを満たそうとします。こうして、私は映画、インターネット、スポーツに依存するようになりました。妻に対する不満が募れば募るほど、依存症も強くなっていったのです。

それと同時に、教会のコミュニティで積極的に活動していました。子供の頃から牧師になりたいと思っていたからです。できる限りどこにでも関わっていましたが、こういった活動も人生の目的を満たそうとする試みに過ぎないことに気づいていませんでした。しかし、どこにも満足を見出すことはできなかったのです。診療所での医師としての仕事、教会コミュニティでの活動、家庭での家族との時間——これらのどれにも、本当には満足できませんでした。自分の環境に対する私の期待は満たされなかったのです。なぜこれほど不幸で、追い立てられたように感じ、落ち着かないのか、私にはまったくわかりませんでした。

そのため、2002年末、専門医の学位を取得した後、休息が必要だという結論にたどり着き、一年間の長期有給休暇を取ることにしました。結婚生活を続けられるよう家族の状況を改善したいと思ったのです。

2002年末の私たちの家族の状況を明確にするために、他の側面にも触れておくべきでしょう。1998年、私たちの教区で6人の子供のいる家族が分裂しました。置き去りにされた7歳から17歳までの子供たちにどう対応すべきかという問題が生じました。神の導きのもと、私たちはすぐに子供たちを家族に迎え入れ、6人の子供たちの里親になることを決めました。ストレスのたまる状況でしたが、それでも私は充実感を強く感じました。私は子供たちを愛し、様々な活動をして、多くの時間を一緒に過ごしました。

この新しい状況は、実りのあるものではありませんでしたが、それでも私を幸せにはしてくれませんでした。私を幸せにしてくれる妻を持つという夢について、私はいつも考えていました。しかし、子供たちを手放したくなかったため、2002年末に休暇を取ったのです。家族の中で幸せになるために、自分の持つあらゆる手段を使おうと決意しました。妻にもっと応じれば、彼女は変わってくれる、そして家族としての関係を続けられるようになる、と思ったのです。

しかし、計画はうまくいきませんでした。2003年の最初の数か月が過ぎると、私は妻を変えることができないという結論に達しました。当時は、離婚して私を幸せにしてくれる別の女性を探す以外に選択肢はないと考えていました。苦しみを感じる中、自分の幸せをようやく得られるというだけで、養子たちを手放す準備もしていました。当時39歳の私は、今行動しなければ一生不幸になるだろうと思ったのです。

私は、学年度末に別れるという計画を新しく立てました。子供たちと一緒に住んでいた家の賃貸契約を解約しました。まだ未成年の子供たちは母親と一緒に住み、私は母と一緒に住み、妻も両親と一緒に住めるようにしました。こうして、全員の居場所を確保できるようにしたのです。

2003年の夏に別れる計画を立てる以前に、アメリカ合衆国に住む家族を訪問する旅行を計画していました。この家族は、夫婦カウンセラーでもありました。旅行の予約はしっかりと済んでおり、私の別れの決断は明確でしたが、私たちは予定通りに飛び立ちました。2003年6月1日、約3時間の夫婦カウンセリングのセッションで、私は自分の立場をしっかりと守り、和解に同意しませんでした。しかし、その後、こんな思いが心に浮かびました。「もしあなたが私の戒めを守ったら、私はあなたのニーズを満たすだろう」と。

幸せになれるかもしれないという見込みを示されたことで、私はこの奇妙な考えに喜びました。しかし、よく考えてみると、私のニーズを満たすための条件に気づきました。それは、「戒めを守りなさい」という条件です。キリスト教徒として、私は幼い頃から十戒を知っていました。そして、私の場合、結婚を破ってはならないという第七の戒めが適用されるのでした。

心の中で、私は20年間、少なくとも肉体的には家族に忠実であったが、幸せではなかったと主張しました。それなのに、幸せになるためには家族に留まるべきだというのでしょうか？ 理解できなかつたので、そのことについて考えるのをやめました。

一週間後、私たちは別れを告げるため、夫婦カウンセラーの家族と会いました。10人が同じ部屋に集まりました。私と妻、14歳、16歳、18歳の養子3人。そして同じくらいの年齢の子供3人を持つ相手の家族です。一緒に過ごした時間について、簡単に感想を交換するような集いのはずでした。この会話の中で、その家族の父が私に向かって「決意を固めたのですか」と突然尋ねました。この言葉を聞いた私は、家族と別れる決意をしたかどうかを尋ねているのだと確信しました。私はそれまで常に自分の意向を明確に伝えてきたからです。質問の残りを待たずに、私は大きくはっきりと「はい」と答えました。しかし、彼の質問は逆で、「決意を固めたのですか、家族と一緒にいるという決意を」というものでした。大きく、はっきりとした「はい」という私の答えは無視できませんでした。子供たちと私は驚きました。子供たちは私が別れる決意をされていて、一緒にいるつもりはないと知っていたからです。私はジレンマに陥り、解決策が必要でした。意図していなかったことに対して「はい」と言ってしまったからです。

選択肢は、「はい」をすぐに撤回するか、それを受け入れるかのどちらかしかありませんでした。家族と一緒にいることに対する「はい」を支持するよう、何が私を促したのかはわかりませんが、内心でそうしました。その瞬間、神の約束が成就したのです。私が家族と一緒にいれば、私のニーズは満たされるだろうという約束です。

なぜそうなったかは説明できませんが、「女性に愛されたい」という私の大きな飢えはなくなりました。強迫観念と情動不安も、すぐに止まりました。私はこうして内なる平穏を得て、この平穏は今でも私と共にあります。不満と共につきまとい、それまで成功せずに戦ってきた依存症もすべてなくなりました。その時から20年以上経ちますが、どれも再発していません。

この経験は非常に印象的で、本当に説明できないものでした。私の内なる人生全体が変わり、内なる牢獄から解放されたのです。私の身体も反応し、何十年も続いた腰痛が癒やされました。15歳の頃から続いていた片頭痛も、それ以来消えました。

私はこの経験を命の交換だと考えています。「他者は私を幸せにしなければならない」という誤解を中心とする古い命を、私は手放しました。そして、神が御子の中に創造された新しい命を、私の心に受け入れたのです。それは私を愛と平和の源に結びつけ、今やイエス様の充実した命の中に生きることができるようになりました。

この経験の前、私は神が本当に存在するかどうかについて、時々大きな疑いを持つことがありました。神を理解できず、神がどこにいるのが不思議に思うこともありました。しかしこの経験は、神が存在し、すべての幸せの源であるということを明確に示してくれました。

私の疑念を最終的に晴らすために、今や20年となる実際の経験を通じて、神の存在について反駁できない証拠も、神は与えてくださいました。人間の愛、自由、正義、安全などに対する霊的な欲求は、神によってのみ、そして神を源としてのみ満たすせるのです。霊的なニーズの充足が、他の人々を通じて、あるいは自然界のどこかで行われることは決してありません。満たす方法や源がないような明確なニーズを、私たちが持つのは不可能なのです。神はご自身だけが人間の霊的なニーズを満たすことができるように計画されたからです。

19. 新しい命がもたらすもの

私は常に疑いを持っていましたが、今では信じられる立場にあります。私の霊的なニーズすべてが一挙に満たされたという事実を、神の働き以外では説明することができませんでした。神の子として、私はこの関係を模索し、それに基づいて生きることを始めました。今日、私はこの2003年6月7日を、新しい命のスタート地点として宣言します。それは私のエゴの部分的な死の始まりであり、「私は神である」という私の誤りが、「私は神の子である」という真理と置き換えられました。

私は2003年6月7日以来、ようやくアクセスできるようになった神の愛を実践することを学んでいます。誰もが愛する能力を持っていますが、愛を欠いています。愛は自分自身で生み出せません。身体的なレベルでは、誰もが呼吸する能力を持っているものの、外部の源から酸素を得なければならないということを、私たちは皆、簡単に理解できます。私たちが「愛」という包括的な用語を使って示している霊的なニーズについても同じです。私は今、神と確立したつながりにより、神の愛を伝えることを学べるのです。私にとって愛らしく見えない人々にさえも愛を伝えます。また、これには「他者からの愛を待たない」ということも含まれます。

天の父と共に歩む道は、解放をもたらしてくれるプロセスです。しかし、私の中に残り続ける誤りが、このプロセスを難しくします。まずは困難を経験することで誤りの残りを認識できるようにしなくてはなりません。そうすると、原因、すなわち自己欺瞞を自分自身に関する真実と置き換えられるようになります。これはクリスチャンの信仰の戦いです。なぜなら、自分自身について、どこでまだ自分を欺いているかについて、そしてどこで真実が嘘を置き換えなければならないかについての認識がなくては、完全には自由になれないからです。

この点において、救済に関する従来のカリシト教の理解には何かが欠けています。人間の霊の機能、自己制御、生来の誤りに関する人間の無知のために、クリスチャンは本質的に二つのグループに分かれています。この分裂は他の宗教や思想においても見られます。表面的には、私たちはこれを「保守派」と「自由派」として表現することを好みます。しかし、究極的には、あなたがその線のどちらの端に立っているかは重要ではありません。極右であろうと極左であろうと、あるいは穏健な中央であろうと、ただ同じ線上にいただけだからです。あなたは、あ

る人を一つの方向に、別の人を他の方向に導く自己欺瞞を認識していません。しかし、それは依然として同じ自己欺瞞であり、その中で誰もが無意識に（そして一部の人にとっては意識的に）自分自身のものを求めているのです。そして、人は自分自身のために何かができると考えている限り、愛の法則を破っています。なぜなら、いかなる被造物も自分自身のためには何もできないからです。人間もそうです。しかし、心の誤りにより、人は自分自身のために何かをしていると確信しています。

イエス様は「私は神である」という偽りを十字架に釘付けにし、愛の法則の下で再び機能する新しい被造物、新しい命を創造するためにやって来られました。神とその全創造物のような、無私無欲の命です。

私は「私は神である」という考えを持って生まれました。2003年6月7日までに私が行ったことすべては利己主義に基づいていました。私はすべてを自分自身のために行いました。これは法則に反します。それまでの39年間、外面的には良く見えることも数多く行いましたが、動機は依然として間違っていました。無私無欲に見えたとしても、その行動は常に私が中心だったのです。2003年6月7日に決定をしたことで、交換が起こりました。私の以前の命は十字架に行き、私には新しい命、イエス様の命が与えられました。これが、愛の動機に基づいて行動する私の道の始まりでした。

誤った考え方からは利己主義しか生まれないと理解するのが重要です。真理からは愛しか生まれません。これは自然の法則が明らかにしています。ルカによる福音書6章44-45節は「木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。茨からいちじくは採れないし、野ばらからぶどうは集められない。善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す」といって、非常に簡単に描写しています。

十字架での交換を通して、私は過去39年間に対する赦しを経験しました。赦しは、罪の理由、利己的な行為が同時に取り除かれる場合にのみ起こります。これが心の誤り——またはイエス様がいう「悪いものを入れた心の倉」です。したがって、赦しは古い命を新しい命と交換することによってのみ達成できます。個々の行為の理由を取り除くことなく、各行為を赦すことは、神の正義と相容れないでしょう。このような理由で、旧約聖書では犠牲制度が使われまし

た。そしてこれは、命の交換、行為の源を通してのみ、義認と正義があるということを明らかに示しています。

ここで示される命の交換は信仰に関する霊的な行為であり、最初は物理的現実において起こるものではないということはおわかりでしょうか。イエス様は新しい命を創造し、それは現実ですが、それはイエス様の再臨においてのみ、各個人が外面的に目に見える形で受け取るものなのです。そうして初めて、私たちは新しい命という現実へ完全に変化を遂げます。そして、私たちは実際に新しい被造物になるのです。それまでは、私たちは新しい命に対する信仰において生きています。そして、信仰を通してのみ新たな命を私たち自身の命へと移すことができます。

この信仰の交換とは、具体的に何を意味するのでしょうか？ 信仰には実体が必要であり、霊にはそれを導く明確な情報が必要です。次の内なる態度二つが求められます。

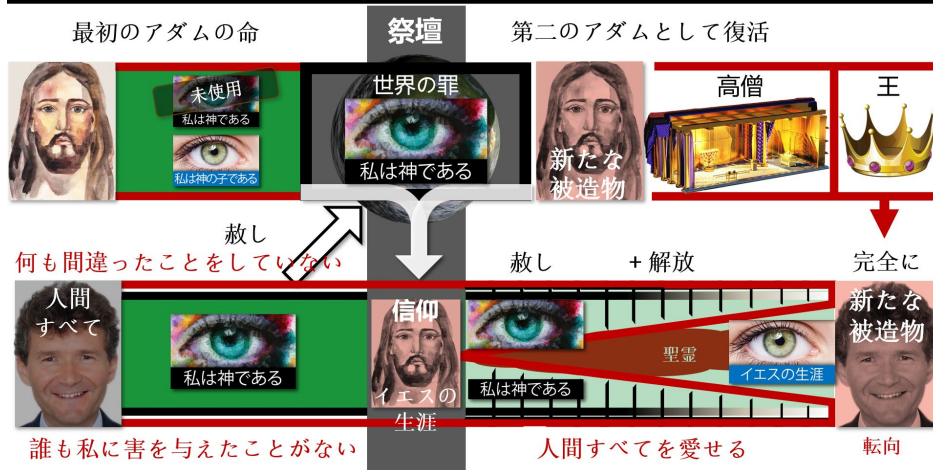
1. 過去に関する明確な良心。私は、新しい命では、私が決して罪を犯したことがなく、間違いを犯したことがないと信じなければなりません。もし私が古い命において殺し、結婚の誓いを破り、嘘をついたり、それ以外にも何かをしたりしたとしても、私はもうそれをしていません。イエス様が引き継がれたからです。古いものはもはや私のものではなく、今それはキリストに属します。それはイエス様が裁きの際に決定するでしょう。これが神の側からの赦しです。罪悪感の思いを持ち続けている人は、まだ命の交換を完全に信じていません。その人はまだ自分の古い命を自分自身のものと見なし、まだ自分のものであるかのように、過去の行為にしがみついています。つまり、すべてをキリストに明け渡していないのです。
2. 私の過去は今ではイエス様のものです。「過去において、誰も私を害していない」というのが、心の中で認め、信じなければならない情報です。これにより、自分自身を他者の犠牲者として見ないようにするためです。私が経験したことや他者が私に行ったことが何であれ、それは交換を通してもはや私のものではなく、私に個人的に当てはまらなくなります。これが私の側からの赦しです。もし誰かがまだ私に何かを負っているなら、もし私が過去に誰かによって害を与えられたと思うなら、私はまだ信仰を通じてイエス様の新しい命を得られていません。

古い命とイエス様の新しい命の交換は、人間の問題すべてを解決します。これらの問題は、「自責」と「他責」という二種類にまとめられます。人は自分自身を自分の行為の犠牲者か他者の行為の犠牲者のいずれかと考えます。両方とも間違っており、自己欺瞞から来ています。そして、自分自身を自らの敵に仕立て上げ、自分自身の破壊へと導きます。

2003年6月7日はとうに過ぎ去り、私は信仰において前進しました。「私は神である」の残りは今、毎日、少しずつ消えつつあります。毎日、私は過去の日に関して自分を確かめ、どの源に基づいて生きたかを調べます。この確認はたいがい、自然の中で、天の父と共に行います。天の父は、どこに自己欺瞞があったかを正確に把握する助けとなってくれます。こうして、自己欺瞞を真実と置き換えられるようになるのです。私は自分の行動によって思考を、そして思考によって動機を、また動機によって、根本である、自分自身に関する嘘または真実を試みます。具体的にはどこで自分自身を欺いたかを見つけ出し、この点で明確に欺瞞と真理を置き換えられるようにしなければなりません。私は自分がどこで神を演じているかを意識的に見つけなければなりません。私は、自分が神の子であると知り、新しい命を生きるにはどうすべきかを認識する必要があります。神の子として、私は誰かに仕えてもらったり、私のために何かを満たしてもらったり、何らかのニーズを満たしてもらったりする必要はありません。私は神から受け取り、この愛を伝えることによってのみ、自らのニーズを満たすことができるのです。

次の図は、信仰の戦いにおいて、人が嘘に囚われた状態から真理による完全な自由に至るまでの道を示しています。誰もがこの道を個人的に歩む必要があります。私が自分の写真を使ったのはそのためです。私は信仰を通じて、いつか自らの霊へと新しい命を完全に吸収したいと望んでいます。そうすれば、私の仲間である人間のいかなる行為によっても、私は他者に対して善行を強制したいとは思わなくなるでしょう。私は、すべての人を愛し、もはやいかなる形の強制も行わないような神の子になりたいと望んでいます。それが解放の目標なのです。

唯一の解決策：新しい命



私はまだこの目標の道中にいます。そして、自らの行いではなく、信仰を通じて達成を目指しています。私の行いは、内面的な態度の外面的な証明にすぎません。私の善行は、悪行と同じく、間違った動機に基づく場合もあるのです。だからこそ、聖霊を通して支援していただき、天の父の助けを借りずには達成できないのです。神を完全に信頼するその日が来るまで、私は人に対する信頼を段階的に減らしています。この状態では、私はもはや自らを欺くことはなく、心の中に掟が刻まれます。そしてこれはすべて、信仰の内面的なプロセスと神と私の間の連携を通じて起こることです。神は誰も制御したり強制したりしないからです。神に対する信頼を置けるのは、私たちだけなのです。したがって、救済は神と人間の連携においてのみ可能なのです。

まとめると、思考が生じる自己同一性は二種類だけです。つまり「私は神である」という嘘、また「私は神の子である」という真理のいずれかです。思考は無意識のうちに生じるため、どちらの自己同一性が源なのかを確認できるのは、思考が意識として現れたときだけです。したがって、自分が間違っているかどうかは、意識的な思考を通じて確認できます。そうして初めて、私は自らの思考を続けて「養う」かどうかに関する選択肢を得られるのです。思考が自己欺瞞に基づくものだとわかったら、その考えを止めるための措置を取れます。原因は必ずしもすぐにわかるとは限りません。こういった思考が嘘から生じるとすでに知っていたとしてもです。時には、無意識の嘘を突き止めるのに数日かかることもあります。そして、それを真理と置き換えたときにのみ、私はその問題から自由になれるのです。

私たちの内面と向き合うのは簡単なことではありませんが、これは自らを解放するための活動です。他者が私に対して何か悪いことをしたり、良いことを拒んだりしたからといって、私は間違っただけでいたくはありません。この誤りは私の人生を困難にします。誤りを受け継いだのは私の責任ではありませんが、神の恵みにより、私はこの嘘によって苦しめられないようにするため、何らかの行動を起こすことができるのです。

ある種の思考がどこから生じるのか、具体的な例を以下にいくつか挙げます。

強迫的な思考：常に嘘から生じます。衝動強迫の思考は常に間違っています。もしあなたが誰かに無理強いをしたいと思ったり、怒ったりしたら、それはあなたの間違いです。もし誰かに対して腹を立てたら、自分自身を破壊することになります。自分の思考をコントロールできず、感情的に行動したら、あなたは抑圧の影響を受けているのです。衝動強迫の思考が生じたらすぐに、自分は間違っているのだと注意を促す努力を意図的に行いましょう。その問題に関して、あなたが実際にはどれほど正しいかは関係ありません。他者の行動がどれほど間違っているかも関係ありません。抑圧は常に自己欺瞞の結果なのです。

恐怖の思考：常に間違っています。恐怖を感じたらすぐに、「待て、私はどこで間違っているのだろうか？ また神を演じているのだろうか？」と自問する必要があります。恐怖は、自分の制御や管理下でない、何か否定的なものを避けようとするときに生じます。誰もが、越えることのできない自らの行動領域を定義し、持っています。これは物理的なレベルでは認識しやすいでしょう。コンクリートの壁を通り抜けようとする人はいませんが、開いているドアを通じて部屋に出入りします。物理的な世界では、越えることのない境界内に留まろうとします。しかし、心の誤りがある場合、霊的な枠には気づきません。そのため、不可能なことを試みます。つまり、制御できないものを制御しようとするのです。これには、母、配偶者、子供たちの人生、さらには自分の人生が当てはまります。恐怖は、誤りに気づき、その根本を探る助けとなってくれます。誤りが見つかれば、真理と置き換えられると、恐怖は消え去ります。

体の圧力：自己欺瞞の結果です。体は無意識の否定的な思考にすぐに反応し、誤りを示します。この場合は、間違っただけの思考が生じた原因を自分自身に説明し、そのような思考の追求を止め、その代わりに、真理について考えるようにすべきです。

罪悪感の思考：非常に有害です。罪悪感の思考は、私たちが間違っただけで行動したときに別の選択肢があったという誤解から生じます。この思考は、間違っただけの結果が否定的だという理由で生じるのであって、必ずしも私たちがその行動について悔やんでいるからではありません。ここでの誤りは、私たちの行動の結果として損失を経験したというものです。また、私たちは何も失うことがないはずなので、自分自身を責めなくてはならないということを、誤りは示唆します。もし自分が神であれば、自分自身と他者の両方を非難できます。被造物は自分自身（また他者）に対して判決を下せないため、被造物に罪悪感の思考が生じることはありません。また自らを神の子と見なしていたら、個人的な損失を被ることもできません。

孤独感：偽りの結論です。自分は神の子であると認識していたら、孤独を感じるなどあるのでしょうか？ 「私は孤独だ！」、「親類は皆死んでしまった」、「親類と離れ離れになっている」、「自分独りで子供を育てている」、「助けてくれる人が誰もいない」といった考えが正しいはずはありません。こういった思考はあなたを落ち込ませ、体に害を与えます。孤独感の思考は「他者は私のために存在しなくてはならない」という誤解から生じます。心と体はこのような間違っただけの思考を止めるため、私たちに助けるべきです。私たちは決して孤独ではありません。神が常に存在するのです。神の存在を認識していたら、自分は孤独だと考えるべきではないでしょう。



拒絶：自己破壊の思考を強めます。神として、私たちは崇拝を求めます。その望みを拒否されても、認めることができません。他者が私たちに褒め称え、認めてくれないと、私たちはそれを個人的な損失だと見なします。しかし、同胞である人間に対し、このような要求をする自分は一体何者なのでしょう？

両親が子供を拒絶すると、子供はそれを大きなトラウマとして認識します。これにより、影響を受けた子供はその人生において、多くの問題や病気を抱え、非常に困難で痛ましい道を歩むこととなります。神の恵みや、両親やその他の人間は自分に対して何も責任を負っていないという真理の認識なしでは、私は段階的に自らを破壊する運命にあります。したがって、私たちは自分自身に関する真実を知り、他者に対する個人的な要求はすべて不当であると気づくべきです。私たちの両親が（時には大きな）間違いを犯したという理由による自己破壊を防げるのは真理だけです。

絶望の思考：間違っています。この思考は、自分は将来を計算できるという誤解から生じます。神である自分はこの状況がどう展開するか知っていると思うために生じるのです。しかし、私は本当にそんなことを知っているのでしょうか？

出口がないという思考は、多くの人たちをうつ病や自己破壊、さらには自殺に導きます。助けとなる認識として、「自己破壊へ導くものすべて、否定的な感情を引き起こすものすべてが、真理とは対応しないものである」という点に、私たちは気づかなくてはなりません。どこで自分自身を欺いているか、すぐに気がつけなかったとしても、出口がないという思考を抱くのは止めるべきです。私たちに正してくださいと天の父に助けを求めれば、父は救いの手を差し伸べてくださいます。神は私の代わりに考えることはできませんが、私が受け入れさえすれば私を自由にしてくれるような、適切な情報を与えてくださいます。

私たちの思考で起こる戦い — どうすれば勝てるのか？

<p>間違った思考：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 強迫 ▶ 恐怖 ▶ 圧力 ▶ 罪悪感 ▶ 拒絶 ▶ 孤独感 ▶ 絶望 	<p>意識</p> <p>どの源から自分の思考が生まれるのか？</p> <p>真理の認識だけで何かを変えるという選択</p>	<p>正しい思考：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 私は自由に動ける ▶ 自分が決定できる ▶ 希望 ▶ 現実的 ▶ 知恵を得られる
 <p>私は神である</p>	<p>潜在意識/心</p> <p>思考の起源</p>	 <p>真理</p> <p>私は神の子である</p>

特定の状況が私たちに否定的な反応を起こす原因となるのは紛れもない事実です。その一方で、喜ばしい反応を起こす原因となる状況もあります。では、このような喜びや快い感情が真理から生じているのか、それとも嘘からなのか、私たちはどうしたらわかるのでしょうか？心が誤っていても、何かを個人的な利得だと判断したら、私たちは常に喜びを感じるはずでしょう。その瞬間には、この反応は体に害を及ぼしません。この利得を失って初めて、体に害が生じるのです。

これは、肯定的な感情を持っている場合、私たちは自分が真理の中にいるかどうか、確信を持ってないことを意味します。誤りが利得と見なすものはすべて、体にとって快い電流を引き起こ

し、快適な感情を生み出すからです。しかし、もしその状況が悪く、私たちのニーズを満たさないものでありながらも快く感じるとしたら、そしてそれは私たちが当該の状況ではなく天の父に頼っているからだとしたら、私たちはこの反応が真理から生じているという確信を持てるでしょう。

私たちの救世主イエス・キリストは、その人生の困難な状況において、否定的な思考を一切起こしませんでした。このような状況には、敵意、偽りの告発、暗殺の試み、嘲笑を受け、そして殴られ、十字架に釘付けにされた状況が含まれます。イエス様は、自らに対して行われたこの悪に対しても、内なる抵抗は一切しませんでした。加害者たちが天の父に向けてこのような行為を行っており、父が不正を裁くだろうと、イエス様は知っていたからです。結果として、このような困難な状況でもイエス様は常に肯定的な感情を持っていました。決して、自分の考えを通じて自らの気分を害するようなことはしなかったのです。私のこのような考え方をしたいと強く望んでいます。私はそのために努力しており、本書を読んでいる方にもそうしていただければと望んでいます。

しかし、私たちの真の自己同一性もまた、ある種の否定的な感情を生じさせるものです。例えば私たちが時々泣く必要があるのはこれが理由です。イエス様の人生にも同じことが見られます。では、本当に否定的なもの、否定的に見えるものは、どうしたら区別できるのでしょうか？

ここでも、嘘と真理を分離できるようにするため、明確な基準が必要です。私たちの反応は潜在意識において始まるため、その効果を使って反応が真実または嘘のどちらから生じているかを判断できます。その際、自分から制御を奪うものは自己欺瞞から生じているという規則が適用されます。否定的でありながらも、自分から制御を奪わないものは、真理から生じるのです。

私は自分の動機を確認する必要もあります。それは私に関する動機なのか、それとも天の父に関する動機なのかです。また、無私無欲の状態でありながらも否定的な感情を認め、感じることもあります。それは神の創造物が破壊されていることで、神に対して持つ真の思いやりから生じるものなののでしょうか？ しかし、それが自分自身に関する動機であり、自己憐憫に陥っているとしたら、これは常に誤りから生じるものです。それは私たちを破壊するからです。

違いはすぐにわかるとは限りませんが、時と共に自己認識の練習を積むことで、誤りから自分自身のために何かを追求しているのか、それとも天の父とその創造物のためなのか（つまり、真理を基に考えているのか）、よりはつきりと区別できるようになります。

真理においては、ルカによる福音書23章34節で救世主が「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と述べたように、私たちは行われた不正、暴力、財産や子供たちの奪取などを認め、さらには加害者に対する思いやりすら感じられるようになります。この態度は真理における完全性の実現が求められます。私はその実現を信じており、いつかそのように生きられるようになりたいと望んでいます。

神の子としての正しい自己同一性により、私は自分の考え方を完全に変え、時間と共にすべての問題を解決できます。すべてを単一の点へと還元できる、すなわち人の出発地点へと還元できるのは良いことだと思います。その人の自己同一性が出発地点です。これは人の人生において、最も重要な点なのです。

最終的には、この点を理解し、偽りの自己同一性を伴う古い命を捨て、神によって生み出された新しい命と交換するという決断を自信を持って行うのが鍵となります。誰の霊も強制して何かをさせることはできません。誰もが、信仰を通じて、自発的な達成を望むことができます。そしてこれは良いことなのです。創造主は私たちが自律した存在として創造されたからです。

私たちの選択肢は一つだけ、すなわち古い命を去ることです。しかし、古い命を改革し、改善しようとする宗教や思想の例に従うべきではありません。人間の内側に問題があるのに、外観を重視するのは解決策にはなりません。人は、古い命の苦悩に嫌気がさして初めて新しい命を受け入れるでしょう。そしてそれは、自分の古い命では何もできないと確信を持ったときなのです。私たちは自らの最も内なる存在において、信仰を通じてのみ得られる、新たな命を必要としています。人の二ーズは内部にあるため、内部でのみ解決、回復が可能なのです。外的な変化はまったく不十分です。汚れが内側にあるとき、ボトルの外側を洗うのは賢明ではありません。それではボトルはきれいにはならないからです。

終末の危機はすでに始まっていると私は確信しています。この危機は、人類を二つの位に分けるでしょう。金持ちと貧乏人ではなく、重要な人たちとそうでない人たちでもありません。こうした分裂はすでに存在しています。人類は、自由な人たちと囚われた人たちに分かれるでしょう。この世界における対立は、自由を中心としています。抑圧が行われ、個人の霊が真剣に受け取られない場合には、愛は存在しません。聖書のコリントの信徒への手紙二3章17節では、「ここでいう主とは、“霊”のことですが、主の霊のおられるところに自由があります」と明確に述べられています。

私は内側で完全に自由となり、神の霊に従って生きることを決意しました。自由があれば、それをすべての人に与えられるようになります。また制限したり、指図したり、または上に立ったような態度を取ろうとはしなくなります。この状態は、真理の中に生きているという明確な証拠です。愛があるところには自由があります。恐怖は根絶され、もはや生じなくなります。その結果、そのような人の行動は他者から影響を受けなくなります。どのような困難が現れても、愛の原則に忠実であり続けるのです。

私たちは逆境に直面することになりますが、その時、誰もが自らの本質を目に見える形で証明するでしょう。自由な人は、誰かが強制することではなく、自らの良心に基づいて正しいと信じることを冷静に、自信を持って行い、それを証明します。嘘を生きる人は、抑圧によって抑圧と戦うでしょう。力には力を、不正には不正を、嘘には嘘を、欺瞞には欺瞞を使って戦うのです。こうして、人は自らの心の誤りを証明します。抑圧と戦えるのは自由だけです。悪を克服できるのは善だけです。そして嘘を根絶できるのは真理だけです。

最終的に、二つのグループは明確に異なるでしょう。皆は誰の霊的な子なのかが明確になります。私たちは近いうちに、それぞれが最終的な決定をしなければならない点に達します。各人にはまだ、自由になるか、それとも生まれながらの死んだ命に囚われたままの状態を続けるかのどちらかの選択肢が与えられています。今日、あなたはどちらを選びますか？